

地域と大学

——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要——

第4号 2024年3月

【巻頭エッセイ】 日本社会の地域性……………城西大学副学長 蓼沼康子	1
【論文】	
地域で育てる、学び合う——ボランティアを通して—— ……柳澤智美・牧野郁子・小川和弘	4
川角駅周辺のまちづくり——風景と法—— ……市川直子	17
留学生による出前授業の教育的有用性の検討 ——東松山市きらめき市民大学における取り組みを事例に ……田淵敬光	29
【地域教育実践報告】	
健康イベントでの活動——ロコモを知ろう—— 石倉恵介・塚崎杏・山田晃也・矢嶋涼・勝見大也・川上優翔・小野澤樹・和智弦汰・富徳	43
2023年における城西大学経営学部石井ゼミナールの活動 ……………相川達哉・新井優也・荒川大介・蘭晃人・岩田佳佑・倉田魁人・高星悠斗 中村祐葵・萩原康陽・畠山大地・平井翔太・野口祐貴・石井龍太	52
紀尾井町キャンパス周辺の環境を活用した英語教育の試み ——地域と関わりながら「協創力」を養う—— ……三國信夫	64
「第25期ひ・まわり探検隊」事業に参加して ——化学を楽しもう☆城西実験クラブ☆—— ……森田勇人・阪田知巳	75
ときがわ町における高齢者世代に向けた魚食推進食育活動 ——健康食生活教室「1日1品は魚料理！」—— ……………中里見真紀・深谷睦・内田博之・松本明世・真野博	78
食育に貢献する小規模がどう農園をめざして——リーフレットの作成—— ……………平岡翔太・堀由美子・内田博之	84
管理栄養士養成課程に在籍する学生および管理栄養士有資格 大学院生による埼玉県民への魚食推進食育活動 ——アトレマルヒロ2023アカデミックフェスティバルにおける実践報告—— ……………深谷睦・中里見真紀・立花千聖・真野博・内田博之	88
【地域連携報告】	
がんばれ、小学生。未来の博士を応援！——水田記念図書館学生アドバイザーの活動報告—— ……………大澤和真・清水勇斗・本間大翔・松下純也・吉田瀬里菜・渡部拓真・山口直美	95
【地域情報】	
戦時の奥武蔵観光……………加藤寛之	105
聞き書き 龍神と大蛇、そしてツチノコ騒動 ……………平井亜未(聞き取り) 平井亜未の母・叔母(話) 加藤寛之(解説)	117
【講演録】	
生成AIと協創する社会 ……高橋達	121
【地域活動ノート】	
第17回薬局管理栄養士研究会の活動報告 ——積極的な活動の発信・アウトプットで、成果の見える化をしよう—— ……………藤田智子・小口淳美・川戸麻紀・内山貴雄・奥寄沙恵・金子侑未・家辺愛子 南野知子・堀由美子・君羅好史・清水純・松本明世・真野博・内田博之	130
学生の課外活動における子ども食堂の取り組み ——城西大学ローターアクトクラブの地域活動—— ……成瀬秀一郎	132
管理栄養士養成課程学生によるパンの共同開発の取組 ——埼玉県産の食材にこだわって—— ……淵上絢音・中里見真紀・内田博之	134
スピーチコンテストをなぜ行うのか——地域との繋がりを目指して—— ……大橋稔	136
『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』投稿規定	138
編集後記	141

Journal of Josai Community Liaison Center

No.4 March 2024

CONTENTS

[Preface]	TADENUMA Yasuko	1
[Article]		
Student learning through volunteer activities - Community activities -	YANAGISAWA Tomomi, MAKINO Ikuko, OGAWA Kazuhiro	4
City Planning Project around Kawakado Station - Landscape and regulation -ICHIKAWA Naoko	17
A Study of Educational Usefulness of Visiting Lectures by International Students - A Case Study of Kirameki Citizen's College -TABUCHI Takaaki	29
[Reports]		
Activity in the health event - Let's learn about locomotive syndrome -	ISHIKURA Keisuke, TSUKAZAKI An, YAMADA Koya, YAJIMA Ryo, KATSUMI Daiya, KAWAKAMI Yuto, ONOZAWA Tatsuki, FU De	43
Activity Report in 2023 about Ishii Seminar, Faculty of Management, Josai University	AIKAWA Tatsuya, ARAI Yuya, ARAKAWA Daisuke, ARARAGI Hiroto, IWATA Keisuke, KURATA Kaito, TAKAHOSHI Yuto, NAKAMURA Yuki, HAGIWARA Koyo, HATAKEYAMA Taichi,HIRAI Shota,NOGUCHI Yuki, ISHII Ryota	52
Trial of English education utilizing the environment around the Kioicho Campus - Cultivating "Collaborative Creativity" while engaging with the local community -MIKUNI Nobuo	64
Educational consideration for the participation to the 25 th Hi · Mawari expedition	MORITA Eugene Hayato, SAKATA Tomomi	75
Promoting fish-eating and nutrition education (Syokuiku) activities for elderly generation in Tokigawa Town	NAKASATOMI Maki, FUKAYA Mutsumi, UCHIDA Hiroyuki, MATSUMOTO Akiyo, MANO Hiroshi	78
Aiming for a small-scale grape farm that contributes to food education - Preparing of information leaflet -	HIRAOKA Syouta, HORI Yumiko, UCHIDA Hiroyuki	84
Food and nutrition education (<i>Shokuiku</i>) activities promoting fish-eating for Saitama residents by students in the registered dietitian training courses course and graduate students who are registered dietitians - Report of Atre Maruhiro 2023 Academic Festival -	FUKAYA Mutsumi, NAKASATOMI Maki, TACHIBANA Chisato, MANO Hiroshi, UCHIDA Hiroyuki	88
Good luck, elementary school students. Support future doctors! - Report on the activities of the Mizuta Memorial Library Student Advisers -	OSAWA Kazuma, SHIMIZU Yuto, HONMA Yamato, MATSUSHITA Junya, YOSHIDA Serina, WATANABE Takuma, YAMAGUCHI Naomi	95
[Information]		
Tourism in OKUMUSASHI during the war period.....	KATO Hiroyuki	105
God Dragon,Great Snake,and Tsuchinoko	HIRAI Ami, KATO Hiroyuki	117
[Lecture Records]		
A society that co-creates with generative AI	TAKAHASHI Toru	121
[Notes]		
Activity report of the 17th Study Group on Pharmacy Registered Dietitians - Let's visualize the results by proactively disseminating and outputting our activities -	FUJITA Tomoko, OGUCHI Atsumi, KAWATO Maki, UCHIYAMA Takao, OKUZAKI Sae, KANAKO Ikumi, YABE Aiko, MINAMINO Tomoko, HORI Yumiko, KIMIRA Yoshifumi, SHIMIZU Jun, MATSUMOTO Akiyo, MANO Hiroshi, UCHIDA Hiroyuki	130
Students activities in children's cafeteria - Josai University Rotaract Club's community activities -NARUSE Shuichiro	132
Collaborative development of bread by training course students of registered dietitian - Focusing on ingredients produced in Saitama Prefecture -	FUCHIUE Ayane, NAKASATOMI Maki, UCHIDA Hiroyuki	134
Why are We Holding Speech Contests? - Aiming to the Connect with Local Communities -	OHASHI Minoru	136
Postscript		141

JOSAI UNIVERSITY and JOSAI JUNIOR COLLEGE
Community Liaison Center

1-1 Keyakidai, Sakado-shi, Saitama, JAPAN

日本社会の地域性

城西大学副学長 蓼 沼 康 子

日本は、決して広い国ではない。しかし、それぞれの地域を見ると多様性に富んでいる。日本社会の地域性の研究は、農村社会学、社会人類学、日本民俗学をはじめとする多くの分野のテーマとされてきた。日本社会を理解するために膨大な業績が残されている。ここでは、日本社会の地域性研究の歴史をふまえ、地域社会とは何かを考えてみたい。

近代化以前の日本社会は、農村社会であった。従って、農村社会学者たちによる研究は農村の研究というよりは日本社会の構造分析であった。農村社会学者の鈴木栄太郎は、「自分たちの研究は、アメリカ合衆国の文化人類学に近い」と述べている。日本各地の調査から集まったそれぞれの地域の実態をもとに、多くの議論がなされた。

日本社会の地域性は、「日本社会の二類型」という形での議論となっていった。福武直『日本農村の社会的性格』（1949）などに始まる「東北型」「西南型」と言われるものである。日本民俗学の柳田國男、社会人類学の蒲生正男らによるテーマとして「日本社会の地域性」が議論されていく。

東北日本では、同族に代表されるような本分家関係、地主小作関係などにより村社会が一方向に上昇していく関係により村落構造が作られている。一方、西南日本では、村の役職が順番に回るしくみがあり、神社組織も年齢階梯により順番に役職が変わるなど平らな構造になっている。もちろん、日本社会の特徴とされる「家」は、東北日本にも西南日本にも存在し、親族のつながりも存在したが、村々で調査をした彼らにはどうしてもその違いが見えたのであろう。たとえば、家族についても、跡取りが結婚したら同じ敷地内に世帯をわけて、別棟に親夫婦が住む隠居制は、福島県を北限に存在する。

岩手県の北西部秋田県に近い山間地に位置する「石神」という地域は、有賀喜左衛門が1935年に調査し、その後東北日本型の社会を代表する村のように取り上げられてきた。福武直は、「東北型」として秋田県大館周辺の村をとりあげ、「西南型」として岡山県吉備町の村を取り上げている。

この二類型に加えて、日本各地の実地調査が進み、長崎県五島、鹿児島県奄美などの地域を含めた地域性の研究が続いた。その際に、地域による差異をどのようにとらえるかが問題となる。もともと日本であるから、共通する部分が多い。「家」が存在する点などである。しかし、大きな家族を志向する東北日本と小さな家族を許容する西南日本の違いは存在する。これを、質の違いととらえるか、量の違いととらえるかである。日本社会の同質論、異質論ともいわれるものである。

日本には多様な地域があり、そこで人が暮らしている姿を事実として受け入れて、それはなぜかを考えていく。それを積み上げてきた日本社会研究は、異なる方法論を用いて今後も明らかにされていくであろう。しかし、近代化の結果、日本社会は一つの価値で動いている。日本社会の地域性は、今後どのようにとらえられていくのだろうか。

地域と大学

—城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要—

第4号

2024年3月

城西大学・城西短期大学 地域連携センター

【論文】

地域で育てる、学び合う

——ボランティアを通して——

柳澤智美*・牧野郁子**・小川和弘***

キーワード：ボランティア、地域連携、サービスラーニング

1. 概要

1.1 研究背景

地域の受け入れ先との関係は、大学生がボランティアに参加する際に大変重要である。現在、多くの大学で地域貢献という形でボランティア活動を推奨する事例が多く存在している。これらは、地域住民の「地域を活性化したいが、担い手となる若者が地域で減少している」または、ボランティア活動者たちの「高齢化にともない活動が続けられない」などの需要にも対応している。そのため、地元住民から、大学にボランティアの依頼を直接することもあれば、行政が中間支援組織となって大学と学生のニーズを受け、地域活動の橋渡しをするような事例もある。

このようなことから、ボランティア活動は肯定的な意見が多く、「大学生がボランティア活動をする意義」などが記載された雑誌や、「学生の成長につながる」といった研究報告も多く存在している。

だが、これらのボランティア活動を語る時、「参加する学生側」に主眼を置いたものが多い。学生側の視点で、ボランティア活動に参加することのメリットやデメリットを取り上げ、大学時代にしておくべきことの1つとして挙げられることも多い。しかし、ボランティア活動は、学生側のメリットばかりが強調されるのではなく、受け入れ先にもなんらかのメリットがなければ、その受け入れは続かない。例えば、受け入れに際して失敗や反省、ボランティア学生を受け入れるNPOや市民団体、地域や社会との関係性、受け入れ先が学生ボランティアをどのように見ているか等という問いに対する検証が少ないといえる。本稿では、受け入れ先は、学生ボランティアの受け入を実際にどのように感じているのか、様々な受け入れ先への調査を行うことで、その現状を明らかにしていく。

1.2 先行研究

まず、ボランティアとサービスラーニングの違いについてであるが、ボランティアは自発的な活動であり第三者の評価を必要としない。今日の大学が地域貢献として学生にボランティア活動の参加を促している多くの場合、所謂ボランティア活動といえる。この際、学生にはボランティアに参加することを1つの経験として提案し、地域には地域貢献として提供している。だが、例えば単位認定型のボランティア活動や、授業としてのボランティア活動のような場合などのように、なんらかの評価を

* 城西大学現代政策学部社会経済システム学科教授

** 社会福祉法人鶴ヶ島福祉協議会

*** 社会福祉法人川越福祉協議会

必要とする場合、サービスマーケティングとする方が適切である。サービスマーケティングは教育活動の一環であり、授業として評価を伴っているからである。まず、市民性を育む教育事例として Jacoby, Furco (1996) によれば「サービスマーケティングとは、学生が異なる文化を持つ地域社会と協働しながら、地域社会を発展させることを狙いとした、地域密着型経験学習プログラムとされている。学生が地域に一方的に奉仕するボランティア活動とは異なり、学生と地域社会が対等な関係を維持しながら、異なる文化や知識を持ち寄り、建設的で創発的な協働作業を行うことで、学生の能力を開発することを目的としている」。このような考え方をもとに現在の大学生たちが参加しているボランティア活動は、徐々にボランティア活動から学びつつ地域社会から評価されるサービスマーケティングへと変化している。

1.3 リサーチ・クエスチョン

本論文では、大学の地域貢献の1つである学生ボランティアの受け入れ先に焦点を当てていく。ボランティアを受け入れる側にとって、どのような影響があるのか良いプラス面ばかりでなくマイナス面についても考察したい。

1.4 研究目的

学生中心のボランティア受け入れの研究は多く存在するが、受け入れ側の体制や学生を受け入れたことによる受け入れ側の変化など学生が参加することでどのような影響を受けたかを解明したい。ボランティア活動ではなくサービスマーケティングとした場合、学生は単に参加しただけではなくなんらかの教育効果を享受することになる。そのためには、受け入れ先との良好な関係作りが必要であり現状を把握することがよりよい結果を生むことになる。

本研究は、多くのボランティア受け入れ先が、大学生ボランティアを受け入れることによってどのような影響（メリット・デメリット）を受けているのか、または目の前の課題について、どのような影響を与えたかについて研究していく。

1.5 調査方法

実際の受け入れ先の状況を知るため、筆者3名が多様な受け入れ先のアンケートを行った。受け入れ先の地域も坂戸、鶴ヶ島、川越など広範囲であり、福祉施設や市のイベントなど様々な受け入れ先を調査した。

2. 城西大学現代政策学部のボランティア

2.1 城西大学現代政策学部でのボランティア

現代政策学部は2015年にボランティアを開始した。これは単位認定型でのボランティアであり、事前研修や事後研修などを行い、さらには学生のボランティア状況を視察にいくなどの活動をしている。学生は概ね40時間というボランティア時間を体験することになる。行く場所は、様々であり、主に坂戸市と鶴ヶ島市が中心となる。

2.2 どのような受け入れ先か

ボランティアの受け入れ先は、主に市役所や社協からの紹介先が多い。また、坂戸市からは市民協働推進会議*が審査する提案型協働事業での助成が決定された先などへの参加なども、近年増えている。基本はボランティア担当教員が市や市民との継続的なボランティア受け入れ先として、知りえている先へのボランティア参加を促している。これによって、ボランティアに参加している学生の活動状況などを把握することができる。また、直接受け入れ先からの現状を聞くことが可能といえる。

受け入れ先への質問に関しては以下の質問項目を用意した。

- ①受け入れの不安はあったか
- ②受け入れ後、活動内容や参加者に変化はあったか
- ③メリット・デメリットは団体としてあったか
- ④良い関係を築くために必要なことはなにか
- ⑤今後受け入れをしたいと思うか
- ⑥その他
- ⑦いつ

以上の質問を各受け入れ先へなげかけた。他2名も同様の質問をしている。

2.3 アンケート結果

アンケートは、受け入れ先の方の思いや、感じたことや、言葉を大切にしたいため、頂いた形式のまま記載している。

表2.1 受け入れ先1 坂戸竹灯の夕べ

団体名	坂戸竹灯の夕べ・灯籠流し
ヒヤリング日時	2023年12月21日
聞いた方の役職等	実行委員
担当	柳澤
1	ご紹介頂いた田中先生が学校側との間に入っていただいていたので、あまり不安はありませんでした。
2	この度の、ボランティアの学生さんは、非常に良い学生さんで、弊社社員と共にお手伝いを頂き、社員も一緒になって楽しく行う事が出来たと感じています。
3	日本文化の継承及び行事を行うには沢山の準備や苦勞があることに気づいていただけたのではないかと思います。
4	目線を同じにすることだと。また指示するにも学生が自ら考え行動するように仕掛けることだと考えております。プラス笑顔！
5	是非お願いしたい。何故ならば、若い方にもっと弊社の生業である冠婚葬祭（日本文化）を知っていただき、次の世代に繋げたいと考えております。また学生さんのパワー（勢い・不安など含む）は私たちが忘れているものであり、それに気づくチャンスでもあります

* 市民の意見及び情報を市政運営に反映させるため、審議会の設置や市民コメントなどの様々な形で市民参加を推進しています。この市民参加に関する基本的事項を調査・審議するため、坂戸市市民参加推進会議を設置しています。

6	この度は学生を3名お手伝いいただきありがとうございました。ボランティア活動を通じ何を感じたかなどフィードバックなど頂けると今後の参考にもなりますし、より一層心に届くのではないかと考えております
7	Qいつ=2023年10月8日 Q人数=3名(男子) Qどんな活動をしてもらったか=灯ろう流しの作成(組み立て)及び川の中でスムーズに灯ろうが流れるようにしてもらったり、灯ろうの回収などを弊社スタッフと共に行っていただきました

表2.2 受入れ先2 竹灯の夕べ

団体名	竹灯の夕べ
ヒヤリング日時	2023年12月21日
聞いた方の役職	市議会議員
担当	柳澤
1	全くありません
2	活気づいた。いるだけでパワーもらえた。
3	実際に助かったのだと思う。
4	本当は、当日だけでなくもっと親睦できると良い。名前もわからないので呼びかけもしにくい。
6	指示をするとサッと動いてくれたり、自ら考えて先回りして助けてくれた学生もいたり、とても心強かったです。礼儀正しく、人間力がある子もいて息子よりも若い子と話せて嬉しかったです。

表2.3 受入れ先3 MOA美術館 坂戸鶴ヶ島児童作品展実行委員会

団体名	MOA美術館 坂戸鶴ヶ島児童作品展実行委員会
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職	実行委員会
担当	柳澤
1	教授のご指導をもとに、学生リーダーを決めて、リーダーを中心に役割を定めて責任感をもって進めていただいていると感じています。学生の方々と実行委員とは、活動の目的意識を共有し、そこに向かって進めさせていただいているという思いがあり、信頼関係を築いていきたいという意識で接しさせていただいております。また、授業、部活、バイトなど大変忙しい中、コロナなどで体調不良の方もおられた中で、ご努力していただいているという感謝、尊重、協同の思いでおります。 子どもたちをとりまく環境は、いじめや心の病など、深刻な問題があり、MOA美術館の願いでもある、生活の中で美を楽しみ、豊かな心を育てる営みを、多くのボランティアとともに進めていきたい、そのための一助としての児童作品展の開催という実行委員会の目的意識のもと、今後とも多くの方々にお力添えを頂きたいと存じております。
2	他ではあまりない、異世代連携で、苦労を共にし、協力しながら、募集から企画、広報、展示、表彰式運営までの一連の事業運営を通して達成感・喜びを共有し、一体感や、若い方々の発想、アイデア、デザイン等、学ぶものがあり、表彰式など、子どもたちと年齢の近いお姉さんお兄さんに接遇していただくことで安心感があると感じています。 ボランティアされた学生が就職の面接で体験を通して気づいた内容を語っていただいたり、卒業された学生も気にかけて設営準備にかけつけてくださった話などをお聞きして、有難く、本当に連綿と続けていき、地域で子どもたちを長い目で育て(「思いやり」や「生きる力」を身に着けるなど)ていくことの大切さを感じています。

3	全国で児童作品展は開催しておりますが、例えば、高大生のボランティアサークルの方を、展示かたづけ、展示会場の受付など、単発的に受け入れているところが多く、城西大学生のように目的意識を共有して（濃い薄いはありましようが）、協同で開催するということはあまりないので、大変ありがたく存じております。また、子どもたちに自信や他者への思いやりの心の培いなど情操教育に、ささやかながら寄与する活動を共にできることを嬉しく存じております。
---	---

表2.4 受入れ先4 SDGs坂戸ふれあい食堂

団体名	SDGs坂戸ふれあい食堂
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職	スタッフ
担当	柳澤
1	ありません。以前から坂戸市内在住の数人（5人）のボランティアが来てくれていたので、大丈夫だと思いました。
2	以前からきている学生たちと仲良くなっています。お互いに連絡先を交換しています。女子学生が多かったので、男子学生が参加することで、男性にやってもらえる力仕事など気軽に頼めるようになりました。
3	十分あります。若い世代が参加することで、全体に活気がみなぎります。今のところ、SDGs坂戸ふれあい食堂の学生ボランティアの登録者は17人、ラインでつながっています。
4	事前連絡などをきちんとすること。あまり、強要しないこと。ボランティアの内容を分かってもらえること。また、ボランティアの内容が楽しく、やりがいのあること。
5	今後お願いします。理由は3の項で述べたとおりです。
6	
7	2023. 7月 子ども縁日 4人（城西大学の学生の数字のみ） 縁日の売り子、食堂のまわりの植木などの伐採 9月 花火と焼きそば 焼きそばの売り子 花火の設置など 4人 10月 ハロウィンパーティー ハロウィンパレードの付き添い 4人 11月 キウイ狩り キウイ枝の伐採、掃除、3人 12月 クリスマス会 サンタクロースにふん装してプレゼント渡す ビンゴゲームで子どもたちと遊ぶ、4人

2.4 アンケートからわかる学生と地域の関係性

以下に、アンケートの結果から、受入れ先と学生ボランティアが良好な関係が続く、共通の要素をあげていきたい。

2.4.1 信頼関係

学部としてボランティア学生を地域に送り出しているが、人間関係の構築が非常に重要であることがわかる結果となった。ボランティアの受け入れに関しても〇〇先生のご紹介なので大丈夫である等、紹介相手を信じているという回答にみることができるよう、人とのつながりが重要な指標となっている。多くの社会的課題も、人との信頼関係が重要なのだと思われる。学生ボランティアが参加する際、信頼できる紹介者がいることは重要な要素といえる。

2.4.2 受入れ先メリット

学生は、ボランティアに参加することで、社会の中での自分の立ち位置を明らかにしていくことができる利点がある。社会の中で自分をどう生かすのか、自分が社会の一員としてどのような社会を望むのかを考える機会となる。そのような学生の思いを受けて多くのボランティア受け入れ先が、学生が参加することに対して肯定的であり、来てくれると活気が出るなど、メリットを感じていることがわかる。受け入れ先にとってもメリットを感じていることが受入れ継続の要素となっている。

2.4.3 緩やかな期待

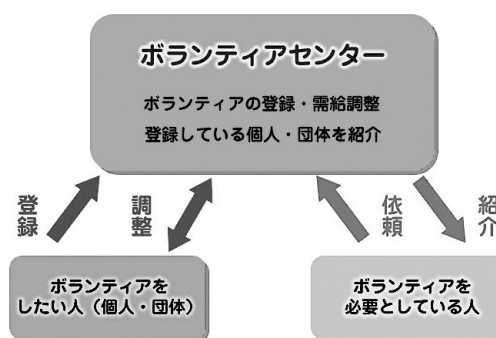
今回のアンケートで、受入れ先と学生ボランティアが良好な関係が続く要素の最も重要と感じた点は、受け入れ先が学生に対して過剰ではなく、ほどよい期待をしている点であった。つまり、受入れ先も学生と同じ目線にすることや、学生自身がボランティアに対しての思いに差があることを理解し、頑張ることを強要せず互いに対等な立ち位置でいてくれているという点である。教育をするというよりも育てるという感覚に近い。受け入れに慣れてくることによって学生を指導しなければいけないという強い責任感から、厳しい発言や過剰な思いをぶつける事例が見られる。そのような受入れ先に対して、熱烈なファンが存在し、学生もその中で一緒に活動したいという思いになる場合もあるが、多くの学生はその状態に息苦しさを感じてしまい、短期間のボランティアで終了していた。良好な関係が築けていると感じた受け入れ先は、忙しい活動の中においても学生と一緒に成長していく自分たちに対しても、楽しむゆりのようなものを感じ取ることができた。

3. 川越社協での取り組み

川越市社協ボランティアセンターでは、みなさんがボランティア活動をしやすい環境をつくるために、ボランティア登録制度を導入している。

ボランティア登録制度とは、「ボランティアを必要としている人等からの依頼に対して、登録していただいた個人・団体の方の活動希望内容や時間等があった場合に、ボランティアとしての活動を紹介する制度です。」[†] この制度の活用事例について紹介したい。

図3.1 ボランティア調整の流れ



出所 <http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php>

[†] <http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php>

3.1 アンケート結果

表3.1 受入れ先1 NPO法人日本語教育ネットワーク

団体名	NPO法人日本語教育ネットワーク
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	代表
担当	小川
1	当NPOの活動が外国籍住民への日本語支援や相談という、ある意味対人スキルを求められるボランティアのため、受け入れ側として、どのような事前準備が必要か迷いと不安があった。
2	活動内容に関して、高校生と外国籍の成人の組み合わせ等当初は無理だと思われたが、意外にもテキストをトピックに楽しく交流ができていたので、matchingも様々試行錯誤してみた。高校生が持つゲーム、アニメ等知識が外国籍住民の知りたいことだったりして、新たな異文化交流の可能性を感じた。
3	シニアボランティアに比べて、相手に教えすぎない、相手をよく見てニーズに応えようとする学生ボランティアの姿勢を見ることができてよかった。シニアも高校生の対話力に驚いていた。世代間異文化交流にもなった。
4	グループ活動では、シニアがファシリテーターにならざるを得ず、結果として、面白いコミュニケーションになっていた。その場で何が求められているかで、それぞれ役割を創造して相談（シニアがアドバイス）、日常会話力アップ（学生にふる）等共に課題解決へと向かうように場を作る。
5	学生ボランティアを一定数、受け入れ続けるハブでありたい。今後の多文化共生の地域社会づくりに興味を持ってほしいため。
6	現会員の中には、学生の態度に不満を持つ方もいたので、価値観の違いを認めながら、自分の意見として、学生と対話する等勧めてみたが、難しい面もあった。（例えば、学生がガムを噛みながら会話する、フードをかぶったまま、裸足でサンダルなど身だしなみ面など、またシニアが学生にライン交換を気軽に申し出る等逆もあった。）
7	団体チャットで出欠を知らせる（なるべく）など、ゆるくつながっており、参加も問い合わせがあり次第受け入れをしている。定着は3名、あとは、時間のある時に連絡をして来ている状態で、もう少し市の多文化共生の協働事業を自分事としてもらえるようアプローチして行きたい。

表3.2 受入れ先2 NPO法人ファミリーねっとスマイリー

団体名	NPO法人ファミリーねっとスマイリー
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	代表
担当	小川
1	まったくありません
2	夏休みのイベントで、餃子作りチャレンジという企画で、身近にいるお兄さん、お姉さんといった感じで、餃子を作りながら、気さくに話している様子が見られて、参加された親子も楽しそうでした。
3	普段、学生さんと接する機会がないので、受け入れることによって、場の雰囲気が明るくなり、親からも学生さんがいると「いいね」という声も聞くので、いっそう盛り上がり成果があると思う。
4	良い関係を築くには、やはりその場が楽しかった、やって良かったと思える場の雰囲気が大切であり、上下関係ではなく、対等な友だち的なコミュニケーションを保つことで、「次回、また参加したい」気持ちになってくれることにつながると思う。
5	希望する学生さんがいれば受け入れたいです。学生さんがボランティアを体験することで学びの場となり、受け入れる側も学生さんのパワーで元気になれる部分も多々あると思う。

6	学生さんも積極的にボランティア活動に参加し、自分の将来の一助になれば嬉しく思う。
7	8月18日の餃子作りチャレンジに参加するお子さんと一緒に手作り餃子をしてもらい、みんなでランチをし、みんなでスイカ割もしました。

3.2 アンケートからわかる学生と地域の関係性

ボランティアセンターには、ボランティア活動をするための情報提供、相談・助言、講座・研修などボランティア業務を専門に行うボランティアコーディネーターがおり、[‡]その、ボランティアコーディネーターという立場から受入れ先と、登録した学生さんをつなげる中間支援組織的要素を意識している。実際に社協が提供するボランティアということもあり、社会福祉施設などが多くなる。そのため学生も受入れ先も通常ではあまり関わることがない場での活動となる。受け入れ先も、学生がどのように動くかわからないと初めは不安があるようであるが、参加回数が多くなるにつれて解消されていくようである。

ここでの特徴としては、学生がボランティアに参加してくれること自体は歓迎しているが、ボランティアがいないと運営が厳しいというようなことではない。互いが頼り過ぎず共生する社会の一員として互いの場を提供している。このように、ゆるいつながりというのが今後のボランティア活動で必要な姿ではないかと思われる。

4. 鶴ヶ島市社協での取り組み

鶴ヶ島市社協では、彩の国ボランティア体験プログラム^{‡‡}の実施もあり、児童生徒学生の受入れを市内の様々な団体、施設等に受入れていただいている。今回は、特に学生の受入れに力を入れてくれた施設（認知症対応グループホーム）と学校（T中学校特別支援学級）にヒヤリングをして、若者ボランティアの受入れについてのヒヤリングを行った。

4.1 アンケートの結果

表4.1 受入れ先1 認知症対応型グループホームでのボランティア受入れ

団体名	認知症対応グループホーム A
ヒヤリング日時	2023年12月19日15:00～
聞いた方の役職等	施設長
担当	牧野
1	感染症についての不安があるが、以外は特にはない。
2	利用者さんの表情があかるくなる。ボランティアが参加してもらうことで職員も気が引き締まる。
3	交流のない世代と交流できる。利用者とボランティアが接している間に職員が仕事ができる。ないと思うが、人生経験がない学生さんなので、フォローが必要な場合がある。話が弾んでいないとき等も入っていく必要がある。
4	受入側の空気感を大切にしている。ボランティアに来た方がしやすい居場所のようなところを目指している。

[‡] <http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php>

^{‡‡} <https://www.tsurusha.or.jp/volunteer>

5	感染症が落ち着いたら、受け入れていきたい。認知症サポーター養成講座等のリアルに接する場にしてほしい。認知症の方もやさしい等感情もあることもわかってほしい。
6	以前、初任者研修を受けている方がボランティアに来た方が職員になったこともあった。
7	夏ボラ、社協からの依頼によって、1日からの受入れ。利用者との交流がメインで継続的に受け入れをしているが、コロナ禍により現在は受入れなし。

表 4.2 受入れ先2 中学校特別支援学級でのボランティア受入れ

団体名	T中学校
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	教諭 特別支援学級担任
担当	牧野
1	不安はなかった。自分もボランティアをしたことがあり、積極的に受け入れをしたかった。当初はダンスということでプロに近い方が協力してもらえるのかと思ったが、社協の方から学生ボラということで、それもとてもいいと思いお願いをした。
2	子ども達も学生も変化があった。特別支援の子どもたちなので、家族や学校の先生以外の方にかかわる機会がない。彼らにも私たちにも一生に残る経験だった。財産だったと思う。出会い、いつかまた出会いたいと思う。来てくれた方も時間も限られているが、中学生が大学生に教えることもあった。すべてプラスであると感じている。最後の大きな舞台をつくっていただいたことも学校にとってもよかった。保護者も見れたのでなお、よかった。
3	すべてがメリットだった。デメリットが考えられない。
4	単発じゃなく、時間が必要だったと思う。心と心がつながる時間が必要、回を重ねるごとの関係性ができてきたと感じる。
5	もちろん、受け入れたい。
7	9月から12月まで毎週木曜日の1時間目を使って、ダンスをつくって覚えて発表をする活動。最終的には、学校内で発表会のあと、障害者交流フェスティバルの市のイベントで発表を行った。大学生は4人と今年度から社会人のボランティアと一緒に活動を行った。

4.2 アンケートからわかる学生と地域の関係性

社協では、ボランティアの活動者と受入側を調整する社協ボランティアセンターの立場で、それぞれを調整する中間支援施設としての機能をもっている。中間支援組織としては、ボランティア受入れ側を支援し、ボランティアが活動しやすい場をつくることも重要な機能となっている。内容は、日時、場所、人数、内容だけではなく、そのボランティアが求められている活動をよりよくできるための働きかけや心構え等も伝えることにより、それぞれの立場でかかわる組織や人が目的を達成できるように支援をすることが重要である。

私自身は、鶴ヶ島市社協の職員であると同時に、城西大学経済学部にてサービスマニエールの授業をもっている。中間支援組織としての一面とボランティアを送り出す側でもある。送り出す側としては、学生らが時間に遅れたり、自分勝手な行動をとることにより、受入側に迷惑をかけたりしないかということを常に考えながら、ボランティアを送り出している。

本来ボランティア活動の内容を単なる人足としての活動ではなく、それぞれの良さを活かしあう形でのボランティア活動が必要ではないかと考える。受け入れ先2のダンスボランティアについては、「中学生が大学生に教えることもあった」という場面があった。学生ボランティアが朝早い活動であったこともあり、数回休んでしまったためだ。そんな大学生を見ながら、支援学級の生徒たちは、ボ

ランティアに来てくれることに感謝して、リスペクトしていた。身近な少し年長の彼を見て、多様な価値観を学んだに違いない。それは、認知症対応型グループホームのボランティアについても同じことが言える。学生が高齢者と接したり、施設の役割を知ったりすることで、閉鎖されがちな施設に新たな風が吹き、施設内の関係性も豊かになる。

様々な人たちにかかわり合うことにより、学び合い、認め合う関係づくりができるボランティアの場づくりを見据えながら、送り出す学校側もその受入れ側のニーズや役割をしっかりと認識したうえで、送り出すことが重要である。

5. 今後の課題

本研究では、ボランティア受け入れ先から社会貢献・地域連携活動の一つであるボランティア活動がどのようにみられているかを調査し分析した。その結果、ボランティア活動がサービスラーニング的要素へ変化している現状において、いくつかの課題を認識することとなった。

5.1 単位認定の必要性

現代政策学部でボランティアを単位認定科目としたいと打ち出したのが2015年である。当初、ボランティア活動は自主的な活動であり、単位認定にすると単位目当ての学生がボランティアを履修することになってしまい、本来のボランティアと意味が違うという批判的な声が非常に多かった。だが、現在、ボランティア活動が地域社会の学びの場であることや、サービスラーニングという要素が含まれていることにより理解が進んできている。

だが、学外の受け入れ機関との良好な関係作りを通して、学生の学びの提供であることを受入れ先に理解を求めなくてはならない。そのためボランティアを担当する担当者は属人的になりやすいという問題をかかえている。アンケートの記載にもあるように紹介者が信頼できる人である必要がある。信頼できる担当者を増やすためにも担当者間で人材を、紹介をするネットワークを広げていく必要があるといえる。

そのうえで、ボランティアを単位認定科目としてサービスラーニング的要素を含んだ評価の対象とする必要がある。しかし、サービスラーニングという言葉自体馴染みを持っている学生が少ないこともあり、ここではサービスラーニング的要素を含んではいるが、やはりボランティアという名前を使用することが多くなるであろう。だが単位を認定することによって、サービスラーニング的要素を含んだ活動であることを周知していかななくてはならない。

5.2 中間支援組織としての機能

今回、ボランティア受け入れ先からのアンケートを取得した筆者ら3名の受け入れ先に同時に言えることは、どの受け入れ先も、担当者間で、よく連絡を取りあっているということである。また、受け入れ先の状況や受け入れてもらう学生がどのような学生かなども含みつつ、過剰な期待がないように理解しあえるように対応していた。さらに、受け入れ先も独自に学生と連絡を取り合っており、受け入れ先、学生、組織担当者間での連絡がなされていることも重要な点といえる。互いの理解を深める

ための話し合いの場などが設けられ、LINEやメールなどがやりとりされている。また、学生が現場で活動するだけでなく視察も兼ねて組織担当者も参加するなどの活動が行われており、積極的な交流が行われている。これらの対応は、担当者が他に通常業務を持っている場合、担当者の負担が課題といえる。

5.3 誰もが参加しやすい場

今後、ボランティアにサービスラーニング的要素を含んで活動するならば、学生と地域が対等な立場で協働して問題解決に向かうこととなる。学生たちが、若い労働力としてだけみられるのではなく、地域の課題や懸案を学生が参加することによって実現できた (Narsavage, Lindell, Chen & Duffy, 2002)、という要素を打ち出さなくてはならない。そのためには、学生は、ボランティア参加地域の課題を理解し、受け入れ先もまた自分たちの問題に向き合い、地域理解を深めつつ、誰もが参加しやすい開かれた場にしていく必要がある。また、参加のしやすさは内容や場所ばかりではなく時間についても同様である。一日開催しているイベントや活動である場合、一日いないといけないなどの活動はボランティアに参加する際に学生にとって負担になる場合がある[§]。短時間の参加や参加途中での退出などが責められないような雰囲気づくりが必要であろう。参加できるときには、参加していき無理はしないという仕組み作りが受け入れ先や中間支援組織担当者の力量として求められている。

5.4 地域で育てる・学び合うために

大学生の一般的な学習方法としては、キャンパス内で講義を受講することである。アクティブ・ラーニングなどの講義が増えている現在においても、分野系統毎に専門性を深化させることが大学の講義といえる。しかし、現代社会は問題が複雑に絡みあい、専門知識や技術面だけでは対応が難しい。学ぶことの必要性や社会に出た際に、この学がどのような場で役に立つのかを理解することで学ぶことの楽しさが広がっていく。

そのために、ボランティア活動を通して、大学の講義で学んだことを実際の地域の中で実践し問題解決に努めることにより、考える力ややり抜く力が身についていく。これらを繰り返すことにより、学びをより実践的な課題として探求することに面白みを覚えることとなる。地域住民とのコミュニケーションを積極的にとることで、人間性の向上もまた期待できる。

地域によりよい受け入れ先があれば、学びの場は広がる。学生を地域で育て、学び合うことが可能となり、課題解決力の向上や明確な目的意識・責任感を育てていくことが可能となる。そのためにも、今後も受け入れ先のニーズを確認し、よりよい活動を続けるための検討が必要である。そのためにも筆者らもまた調査・研究を継続していきたいと考える。

§ 近年、多くの学生がバイトをすることが金銭的に必要というケースが出ている。

引用・参考文献

論文

- 1) 文部科学省 国立教育政策研究所編集 (2015) 「『自尊感情』？それとも『自己有用感』？」：『生徒指導・進路指導研究センター生徒指導リーフ』.
- 2) 中里陽子・吉村裕子・津曲隆 (2015) 「サービス・ラーニングの高等学校における位置づけとその教育効果を促進する条件に付いて」『熊本県立大学総合管理学会 アドミニストレーション』22 (1), 164-181.
- 3) 木村充・河井亨 (2012) 「サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究 立命館大学『地域活性化ボランティア』を事例として」 (<特集>大学教育の改善・FD) 『日本教育工学会 日本教育工学会論文誌』36 (3), 227-238.
- 4) 石井三恵他 (2009) 「大学教育におけるボランティア活動の意義と授業開発・実践・評価～ボランティアセンター設置に向けて～」『広島女学院大学生生活科学部紀要』16, p21-44.
- 5) 上条秀元 (2000) 「大学教育におけるボランティア実習の意義についての一考察」『生涯学習研究 宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要』(5), 1-13.

書籍

- 1) 齊藤ゆか著 (2022) 「ボランティア評価学：CUDBASを用いた評価指標の設定と体系化」ミネルヴァ書房.
- 2) 山下美樹編著・宇治谷映子・黒沼敦子・藪田由己子著 (2021) 「サービス・ラーニングのためのアクティビティ」研究社.
- 3) 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編 (2019) 「ボランティアで学生は変わるのか：『体験の言語化』からの挑戦」京都：ナカニシヤ出版.
- 4) 田中暢子編著 (2018) 「実践で学ぶ！学生の社会貢献：スポーツとボランティアでつながる」成文堂.
- 5) 池迫浩子, 宮本晃司著 (2015) 「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成～国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆～」『ベネッセ教育総合研究所』.

Student learning through volunteer activities

- Community activities -

YANAGISAWA Tomomi

MAKINO Ikuko

OGAWA Kazuhiro

Key words : volunteer, Community cooperation, Service learning

Abstract

Participating in volunteer activities as a college student can be highly beneficial for gaining experience. Therefore, much research has been conducted from the perspective of college students on the significance of their participation in volunteer activities. However, building a reciprocal relationship would be challenging if there is no benefit for the ones who receive support. This study investigates how the recipients in the volunteer activities perceive the contribution of college students.

【論文】

川角駅周辺のまちづくり

——風景と法——

市川直子*

キーワード：まちづくり、整備、都市計画、財産権、公共の福祉

1. はじめに

東武越生線川角駅のホームを背にして南西に向かって歩き始めると、ほどなく軒下に玉ねぎを吊るす生活景が目に飛び込んでくる。背丈の低い垣根の向こうには柿や金柑の黄色い実のなる小さな果樹が植えられ、すこし先にはオープン外構の家庭菜園と花壇が整えられている。春から秋にかけて色とりどりの花が咲き乱れるその一画は、道行くひとの心を和ませる景色を作り出している。顔を上げると奥武蔵の山々が遠くに眺められ、視線を下げると栗畑が視野に収まる。寺社が並び立つあたりは幾本もの杉が木陰をつくり、反対側には黒土からなる田園風景が広がっている。小道が三辺を取り巻いているような畑地は、初春に青や紫の小花があらわれ、耕作が始まる頃には緑が地面を覆う。農家の人が採りたての野菜を並べる小さな販売所は地元民の隠れた人気スポットになっている。小山のように生い茂って見える防風林からは野鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。

城西大学は埼玉県坂戸市に位置するが、最寄り駅からキャンパスに至るまでの公道やその周辺は隣接する毛呂山町に含まれる。毛呂山町はまちづくりの方針の一つに「ふるさとの原風景となる広がりのある田園風景や集落景観の維持・保全、田園・農地の開けた良好な眺望の確保¹」をあげている。この自然豊かな景観はどのように維持・保全されているのだろうか。本稿は大学周辺に広がる毛呂山町の美しい風景やその醸し出す雰囲気念頭に置きつつ、大学周辺のまちづくり整備計画を法的視点から考える。

まちづくりは公共交通機関である鉄道駅を拠点とすることが多い。2023年11月、毛呂山町の東の玄関口である川角駅は改札口が増設され、整備計画は新たな一步を踏み出した。本稿はその川角駅周辺の整備計画に光をあてながら「地域と大学」のあり方を考えることも、いま一つの目的とする。

以下においては、まず川角駅周辺地区整備計画をめぐる近年の歩みを確認し、ついでそれを毛呂山町のまちづくりの実現に向けた基本的な考え方に照らして考察する。その上で、まちづくりの仕組みを地方自治の本旨に結びつけ振り返るとともに人権論ともからませていく。その過程において風景²と法の関係にも意識を向けていく。

* 城西大学現代政策学部社会経済システム学科准教授

1 毛呂山町（2017）『毛呂山町都市計画マスタープラン-改訂版-』80.

2 本稿では著作権との関係で言及されることの多い風景の自由には触れない。

2. 川角駅周辺のまちづくりの経緯

越生鉄道（越生線）が旅客営業を開始した1934年、川角駅が開業した。ややひらけていた沿線北側に駅舎が設けられたが、反対側に私立大学が設立されると南方へ向かう人の流れも生じた。早くも1970年代に川角駅周辺の整備を求める声上がるものの、それは大勢とはならなかった。変化の兆しが見え始めたのは現町長が初当選したところからである。

2012年、毛呂山町は川角駅周辺地区整備事業に取り組み始めた。川角駅周辺地域の区長、中学・高校・大学の代表者、そして毛呂山町議会議員が集まり意見交換をし、2013年から2014年にかけてアンケート調査や交通量調査を実査した。2016年には道路の拡幅、駅前広場の整備、そして南側改札口の追加を内容とする整備計画案を策定した。しかしながら駅舎の追加や位置の変更にあたり求められる鉄道事業者の同意を得られなかった。

毛呂山町は2018年、鉄道事業者が協議継続につき示唆した駅舎の橋上化を検討したところ、財源の見通しがつかずに行き詰った。そこへ私立大学が難局を打開する方策を提示した。毛呂山町は2019年2月、大学との間で川角駅周辺地区整備協定を結び³、駅舎移設などの負担付き寄附の受納を決めた。毛呂山町議会も翌月この案件を可決し、川角駅周辺地区整備事業を新年度予算の主要事業の一つとして住民に広報した。そして毛呂山町は同年秋、駅前広場・駅舎移動・通学路の整備を一体的に行う川角駅周辺地区整備事業について整備資金の補助などを埼玉県に要望した⁴。

しかしながら、川角駅周辺地区整備事業に駅舎移設が含まれることを知った沿線北側の住民は反発した。毛呂山町議会がコロナ禍の2020年3月、住民の合意を求める付帯決議案を可決すると、毛呂山町は同年8月、川角駅周辺地区整備事業の地区説明会を開いた。それでも住民は納得せず、毛呂山町議会は同年12月、住民参加の協議会設置を求める請願を採択し、川角駅周辺地区整備協議会の開催を議決した。翌年から全7回開催された川角駅周辺地区整備協議会は2022年10月、毛呂山町に対し川角駅周辺地区につき4段階におよぶ整備を求める方向で報告書をまとめた⁵。

もっとも、この協議会の活動と相前後して社会の潮流に変化が生じていた⁶。地元の埼玉新聞や全国ネットのテレビニュースなどが川角駅周辺の道路の混雑を取り上げ⁷、踏切付近の路上の安全性につき反響を巻き起こしていた。翌春の統一地方選挙においても川角駅周辺の安全性確保がテーマの一つになり、その流れをつかんだ現職の町長が4期目の当選を果たした。

そして数か月後の2023年8月、毛呂山町は「町が進めている川角駅周辺地区整備事業の今後の予定と、川角駅の改札口整備について」と題するニュースを発表した⁸。鉄道事業者は、毛呂山町が実施

3 城西大学（2018）『平成30年度事業報告書』23.

4 埼玉県町村会（2019年）『令和2年度県予算編成並びに施策に関する要望』32-33.

5 川角駅周辺地区整備協議会（2022）『川角駅周辺地区整備協議会結果報告書』

6 毛呂山町（2023）『広報もろやま』995, 10.

7 2022年9月に埼玉新聞が記事を掲載したことから翌10月にはテレビ朝日とテレビ埼玉がニュースで報道をした。再び11月に埼玉新聞が記事を書き、12月にはBSTBSが取り上げた。

8 住民向けの広報誌『広報もろやま』は毎月1日付で発行される。城西大学、日本医療科学大学、明海大学の周辺3大学は2023年8月1日付で川角駅改札口の新設を各HPに掲載した。

する駅前広場やアクセス道路の整備に先行して、既存改札口を残した上で、近隣大学の資金協力を得て、駅南側に改札口を新設する⁹。同年11月、鉄道事業者は学園口を完成させ、2024年以降は毛呂山町が引き続き川角駅周辺地区整備事業に取り組むことになっている。

3. 町民・事業者・行政の協働

この川角駅周辺のまちづくりの歩みはどのように理解されようか。毛呂山町はまちづくりの実現に向けた基本的な考え方として「町民・事業者・行政などの協働によるまちづくりの推進」を掲げ、まちづくりの主体の役割を示している¹⁰。それを規準に振り返ってみよう。

3.1 町民

個人と団体に分け、つぎのように説明する。個人は自分たちが住む地域をもう一度見直し、周辺に配慮した住まいづくりや暮らし方など、身近なところから自らできることを自発的に進めていくことが重要である。個人の活動を越えた地域の自治会¹¹、多様な地域活動、NPOやボランティア団体・グループなどもまちづくりの牽引役として、活発な活動を展開していくことが期待される。

前章で触れた通り、住民はアンケート調査に協力し、住民代表は意見交換会に出席し、町民有志は請願も行った。話し合いの結果も報告書にまとめて提出した。そのほかにも市民としてSNSなどを利用し日常的に情報を発信している。町民の活発な活動は毛呂山町の期待に答えているだろう。

もっとも、2019年に北側駅舎の廃止に反対の声を上げた住民は利便性の維持を確保できたが、沿線南側の住民はそれを上回る影響を受けていよう。また、整備協議会に参加した住民の心も穏やかではないだろう。住民の利害が錯綜し、財政の拘束も長期にわたる整備計画は、実際のところ、協働による推進が甚だ難しい。

9 毛呂山町（2023）『広報もろやま』995, 6.

10 毛呂山町（2017）『毛呂山町都市計画マスタープラン-改訂版-』83.

11 地方自治法第260条の2は認可地縁団体の定めを置き、個人単位の団体に法人格を付与する。最高裁は権利能力なき社団である自治会の退会の自由を判示する（最判民集平成17年216号639頁）。これに対し、毛呂山町は独自の仕組みを作る。

「毛呂山町区及び区長設置規程」（平成30年規則第4号）は、町内に50以上の行政区を設置し、区民の総意で推薦された者を町長が区長に委嘱する旨を定める。毛呂山町は住民に「地域のことなどで役場への要望がありましたら、まずはお住まいの地区の区長へご相談ください」と広報する。この行政区は広報誌の紹介では自治会と表記されている。

他方、毛呂山町には毛呂山町社会福祉協議会がある。社会福祉協議会は自主財源のほか公的財源により運営されていることから理事や評議員に町議や町役場の職員、地域自治組織（区長会）からの選出者も名を連ねる。協議会会長が発出した回覧文には福祉委員（区長）を中心に各組長・班長などが全戸加入を目標に各家庭をまわる旨が記されている。

このような文書からは、町・区・組・班・戸という連絡網の存在が窺える。この法的・非法的な網はトップダウンに行政情報を流すだけでなく、住民個人から行政へのボトムアップの機能を果たしているのか。実証的な研究が必要であろう。

3.2 事業者

事業者の協働については雑多に記されているが、エッセンスはつぎのようなところであろう。民間事業者等は企業活動や経済活動を通じて直接的・間接的にまちづくりに関わっている。まちづくりの担い手の一員としての役割と責任を理解し、積極的にまちづくりに参加するとともに、専門的な知識を活かした協力や支援など社会的な役割を果たしていくことが求められる。

東武鉄道株式会社はまちづくり事業に取り組んでいることをアピールしている¹²。実際に鉄道協議をはじめとして川角駅周辺の整備計画に長年かわり、2023年にも自社施設として改札口を新設した¹³。その新設に資金協力をしたのは駅周辺に立地する私立大学であった¹⁴。その法人の広報誌は2019年、川角駅周辺の整備につき「悲願実現へ」¹⁵という記事を掲載し、2023年には学長が「感無量」という熱い言葉でコメントを寄せている¹⁶。

川角駅周辺の事業者はまちづくりに好意的であり、行政の求める役割を果たしているといえよう。もっとも、その事業者間の協働の過程は同じく協働することが求められる住民には見えづらい¹⁷。

3.3 行政

行政の協働につき、つぎのように述べる。行政は「毛呂山町都市計画マスタープラン」に基づいて、町民、事業者等との協働のもと、都市計画を決定し具体的なまちづくり事業を実施する。そのような総合的・効率的なまちづくりを推進していくとともに、まちづくりに関する情報提供や意識啓発、主体的なまちづくり活動への支援、まちづくり推進体制の充実など、協働によるまちづくりの推進に向けた合意形成や基盤づくりに努める。

ここで町民や事業者と協働する行政とは首長部局の担当部署のことであろう。法的には、道路などの都市基盤を整備する都市計画がいったん決定されると、道路用地を確保するための都市計画事業の認可や土地区画整理事業の換地などが続き、それらの行政行為を法律に基づき行うのは町長である。毛呂山町の歴代町長も川角駅周辺の問題に取り組んだが、現町長はそれを一歩前進させた。この点で評価できようが、手続きの観点からは好ましいものではなく周囲に衝撃を与えた。町長と同じく住民からの支持を得ている毛呂山町議会は振り回された。もろやま議会だよりは2019年、川角駅周辺地区整備事業（1億1,241万円）を紹介する際、近隣大学から負担付き寄附3億5,000万円（分割納入）を受けけることを明らかにしたが¹⁸、4年後の2023年には寄附金3億5,004万5,092円を返還するための補

12 <https://www.tobu.co.jp/corporation/dev/communitydev/>（2024年1月15日）

13 東武鉄道は改札口が完成し利用できることを1枚のポスターで公表した。

14 毛呂山町（2023）『広報もろやま』995, 6.

15 学校法人城西大学広報センター編集（2019）『地域と大学を結ぶ広報誌 城西』28, 5.

16 近隣2大学の発表の仕方とは異なり、城西大学は学長のコメントを付した。

https://www.josai.ac.jp/news/20230801_kawakadoeki/（2024年1月15日）

17 2022年12月2日の第5回学長ダイレクトメッセージ「川角駅周辺の今後について」は経緯及び大学の方針を教職員に示した。この約10分の説明は口頭によるもので活字化されていない。学長も構成員である理事会の議事録は公表されていない。

18 毛呂山町議会だより編集委員会編（2019）『議会だより』104, 8.

正予算の議決を掲載することになった¹⁹。

以上より、マスタープランが期待する町民、事業者、行政などの協働はまずは機能していることがわかる。そして「長い時間と労力、多大な費用」²⁰の支払われていたことも明らかである。他方で、本章ではまちづくりの一端に触れたに過ぎないが、町民の行政参加は空回りし、議会と長との関係も相互に牽制しあうものではなく、事業者との協働もその過程の透明性が低いことを看取できた。次章ではこの背景を法制面から確認する。時代に翻弄される都市計画の変遷をみていこう。

4. 地方自治の本旨

4.1 地方自治権の拡大

日本国憲法は国会を全国民の代表機関と位置づけ、国会を国の唯一の立法機関であると定める。大日本帝国憲法にはなかった地方自治の一章を設け、地方自治の本旨にもとづき行政権ではなく立法権の行使により地方公共団体の組織などを定める。

大綱を明らかにする地方自治法（昭和22年法律第67号）は都道府県と市町村を普通地方公共団体であると規定するが、当初は大日本帝国憲法下に制定された都市計画法（大正8年法律第36号）にもとづき都市行政を行った。都市計画はその区域の内外におよぶ安寧の維持などを目的とする施設執行計画であり、主務大臣が計画を決定し内閣が認可をする。そして政令で都市を特定する。その都市を統括する市長が国の機関として都市計画事業を遂行する。

この国家主義的な仕組みは高度経済成長に向かう1960年代には適合しなくなった。都市計画法（昭和43年法律第100号）は1968年に刷新され、都市計画区域が創設された。これにより原則として都道府県知事及び市町村が計画区域の土地につき開発許可を行い民間の開発を方向づけていった。地方自治法も1969年に改正され、市町村が地域開発を押し進めるために総合的かつ計画的な基本構想を策定することになった（第2条第4項）。

さらに時代は下り、国際環境の変化や日本経済の衰退が目立ちはじめた1990年代後半、今度は国の権限を地方に移譲するための地方分権が行われる。第一次分権改革により機関委任事務制度の廃止と事務の再構成が行われた。都市計画法は都市計画に関する事務を自治事務とし（第15条第1項）、2002年の改正ではさらに土地所有者などによる都市計画提案制度も創設した（第21条の2）。第二次分権改革は国の法令による地方公共団体への義務づけ・枠づけ規制を緩和した。地方自治法は2011年に改正され、市町村の基本構想策定義務は解かれた。都市計画法も改正され、市は都道府県との協議を経ることで都市計画を決定できるようになった（第19条3項）。さらに2014年以降、提案募集方式が導入された分権改革は地方主導で進められる。2020年以降、この提案募集方式の活用により²¹、町村も都道府県の同意なしに都市計画を決定できるようになった。

このような地方自治権の拡大が毛呂山町のまちづくりの背景にある。川角駅が開業を始めたときも

19 毛呂山町議会だより編集委員会編（2023）『議会だより』122, 7.

20 毛呂山町（2017）『毛呂山町都市計画マスタープラン－改訂版－』90.

21 酒々井町（提案募集方式データベース平成26年管理番号68）と全国町村会（同970）の提案にもとづき、町村の都市計画決定に関する都道府県の同意は廃止された。

城西大学の創設時も都市計画法は旧態依然とした中央集権的なものであった。都市計画決定は都道府県知事が機関委任事務として行うか市町村が団体委任事務として行うものであった。現町長が川角駅周辺地区整備計画を始めた時点においても、町の都市計画決定には都道府県知事との協議の上、その同意を得ることが必要であった。

では、現在の毛呂山町のまちづくりの法的仕組みはどうであろうか。

4.2 都市計画区域マスタープラン

都市計画に関する事務はいまや地方公共団体が条例を定めることのできる自治事務である。とはいえ、法執行ではなく法政策の側面が強いまちづくりの分野では、まず、法的縛りの緩やかな行政計画が策定される。地方公共団体の策定する行政計画は多種多様であり、各計画内において法令や他の計画との関係が明示される。

埼玉県は埼玉県全体の都市計画やその方向性を県と市町村で共有することを目的に、まちづくり埼玉プランを策定する。ここでは埼玉県5か年計画と埼玉県都市計画審議会の提言にもとづき都市計画制度の運用原則を明らかにする。この都市計画の基本指針に依拠し、埼玉県は都市計画区域の整備、開発及び保全の方針を定める。

この都市計画の区域区分は1968年の都市計画法により創設されたもので、無秩序な市街化を防止するため都市計画区域を大きく二分する。すでに市街地を形成している区域及び概ね10年以内に優先的かつ計画的に市街化をはかる区域を市街化区域とし、それ以外は市街化を抑制するための市街化調整区域とする。この市街化調整区域は農地改廃を防ぎ営農環境を保持するとともに自然環境の保全や調和をはかる目的をもつ。とはいえ、そこには社会経済情勢に対応したまちづくりを進めるための仕組みも用意されている。

一つは区域区分の見直しである²²。埼玉県は2023年、まちづくり埼玉プランを策定し、すべてが都市計画区域²³である毛呂山町の都市計画区域マスタープランを決定し、ここでは市街化区域と市街化調整区域のエリアについて従前通りであることを付記する²⁴。埼玉県が区域区分を初めて行ったのは1970年であるが、その直後から市街化調整区域に区分された川角駅周辺では市街化区域への編入の陳情と編入反対の陳情が繰り返されている²⁵。

いま一つが開発許可である。公益上必要な建物などを除き、都市計画法第29条の規定する開発許可を得た私人は、建築などを目的とする土地の区画形質を変更できる。開発行為の許可事務は第一次地方分権改革以降、広域自治体の自治事務である。とはいえ、埼玉県は知事の権限に属する事務処理の特例に関する条例（平成11年条例第61号）を制定し、この権限の市町村への移譲を進めている。毛呂

22 区域区分の当初決定は1970年であり、1回目の見直しは1976年、2回目以降は1983年、1989年、1995年、2003年、2011年、2015年、2021年である。埼玉県都市整備部都市計画課（2023）『埼玉の都市計画2023』11。

23 都市計画法によれば、都道府県が都市計画区域を指定（第5条第2項）変更（同条第6項）するときには、あらかじめ関係市町村と都道府県都市計画審議会の意見を聴くとともに、国土交通大臣に協議しその同意を得た上で公告する（同条第5項）。

24 埼玉県（2023）『毛呂山・越生都市計画（毛呂山町、越生町、鳩山町）都市計画区域の整備、開発及び保全の方針』

25 川角駅周辺地区整備協議会（2022）『川角駅周辺地区整備協議会結果報告書』7。

山町は市街化調整区域における開発を抑制するための許可権限の委譲を受け²⁶、2011年以降、毛呂山町の町長は埼玉県条例にもとづく行政庁となっている。毛呂山町都市計画法に基づく開発許可等の基準に関する条例（平成23年条例第6号）にもとづき、毛呂山町は開発許可権限を行使している。

行政は一般に権限行使にあたり準拠法の範囲を逸脱してはならない。埼玉県権限移譲方針（令和2年3月25日知事決裁）は事務執行に支障が生じた場合の方策を明らかにしている。毛呂山町は埼玉県に支援を要請することができるとともに、埼玉県も助言や情報提供などにより事務処理内容を改めて周知し円滑な事務遂行を支援する。

4.3 都市計画マスタープラン

上記のように、都市計画は地方公共団体の自治事務であるとはいえ、広域自治体の区域計画の下に基礎自治体が都市基盤整備と土地利用規制からなるまちづくりの骨格を定める。

毛呂山町は1973年に第一次総合振興計画を練り上げて以降も長期総合計画を策定している。2015年には2024年までの第五次毛呂山町総合振興計画を策定した。それは10年間の毛呂山町基本構想、5年間の毛呂山町基本計画、毎年見直す毛呂山町実施計画の3層よりなるが、地方創生の充実強化に向けた5年ごとの毛呂山町総合戦略と合わせると4層から構成される。

また都市計画法第18条の2は都道府県が指定した都市計画区域につき、市町村が広域自治体との協議を経て都市計画に関する基本的な方針を定めることを求める。毛呂山町は1997年に概ね20年を目標に策定した毛呂山町都市計画マスタープランを2017年に改めた。さらにコンパクトな集約型都市構造の実現をめざす都市再生特別措置法が2014年に改正されたことから、毛呂山町は市街化区域につき毛呂山町立地適正化計画を策定し、それを都市計画マスタープランの一部とする。

毛呂山町の将来像とまちづくりの基本方針を示す毛呂山町都市計画マスタープランは地域別構想において町内を3つに分け説明する。西部地域は大半が森林であり豊かな自然や里山環境と共生する土地利用を進める。中央地域は旧市街地と住宅地に行政機能や商業施設が集積するため快適で利便性の高い住環境の形成や都市機能の充実を目指す。東部地域は河川低地部の平坦地に田園農地が広がる一方、鉄道沿線の南側や駅周辺には学校や企業、住宅団地が立地する。その他は旧来からの農地・集落地である。この東部地域に川角駅周辺が含まれる。

川角駅沿線の田園地帯は開発が抑制される市街化調整区域である。マスタープランは東部地域のまちづくり基本方針の一番目に田園農地の保全と地域資源を活かした環境と共生する土地の利活用を進める旨を記す。しかし他方において、方針図では郊外型土地利用誘導エリアを特定する。そこに斜線をかけた上で「市街化調整区域における土地の秩序ある利用をどのように計画的に誘導していくのか」が毛呂山町の都市計画上の課題であると明かす²⁷。

毛呂山町は市街化区域と市街化調整区域の線引きよりも、市街化調整区域には計画的な土地利用の定めが存在しないことに注目し、良好な環境を維持・保全する地区と都市的土地利用を一定程度許容する地区を明確にする。地域特性に応じた計画的な土地利用を図ることが必要であるとの認識を示し

26 埼玉県都市整備部都市計画課（2023）『埼玉の都市計画2023』32.

27 毛呂山町（2017）『毛呂山町都市計画マスタープラン-改訂版-』93.

た上で、毛呂山町独自の土地利用誘導方策の検討に入っている。

都市計画法にもとづく開発許可の弾力的な運用、市街化区域への部分的段階的な編入などのほか、条例や独自ルールをつくることにも言及する。市街化調整区域の土地利用方針を作成し地区計画を検討の上、土地利用に関する条例など、まちづくりに関する条例を制定する。毛呂山町の特性を生かしたまちづくりの仕組みや、建築物や開発行為に関する手続き、土地利用に関する基準、都市計画法の規定に基づく都市計画の手続きなど、まちづくりに関する条例を複数、制定していく。地域再生法の改正を受けた「小さな拠点」形成を活用する。地域ルールをつくる。法律にもとづく地区計画・建築協定・緑地協定や町民などが任意に定めるまちづくり協定などを締結していく²⁸。

これらがマスタープランの最後に触れられている。この簡単に列挙された方策を一瞥するだけで、毛呂山町が多様な選択肢に戸惑っている様子を想像できよう。このマスタープランの策定は2017年であり、川角駅周辺の整備が検討され手探りの協働が始まっていた時期である。

4.4 川角駅周辺地区整備計画

毛呂山町が最終的に選択した方策は、前章で概観した通り、住民の参画と行政によるエリアの細分化である。マスタープランは町内を三分割した上で、東部地域の市街化調整区域をさらに二地区に分ける。その後多くの住民参加を試みつつ、さらに鉄道施設と他の施設を切り分けて費用の再分担をする。これによって毛呂山町は川角駅周辺のまちづくり整備計画を進めている。

この方策をめぐり毛呂山町議会で質疑応答がなされている。「長い間解決できなかった問題が、東武と大学と話し合ったら簡単に解決している。民民の問題に町が口を挟みかえって難しくしたのではないか」という町議の問いに、「町はこの事業の解決を急ぎすぎたため、地域住民に対し説明不足があったと感じている」と回答している²⁹。

鉄道事業者と近隣大学との話し合いで問題が簡単に解決しているか否かは措くとし、以下では毛呂山町が整備事業を進めるために多大なエネルギーを投入していたのに、それでも説明不足があったと反省している点に注目したい。その説明は、先に言及した行政計画の柔軟性とも関連してはいるが、マスタープランの強調する「まちづくりの主役は町民です」というスローガンの不明瞭さとも関係していよう。そして、それは住民の人権論につながっていると考えられる。

5. まちづくりと人権論

日本国憲法は人権保障を究極の目的とする。その人権は自由権のほか社会権などに分けられる。まちづくり事業に関係する人権の代表的なものは自由権と権利構造を異にする社会権や財産権である³⁰。まちづくりの主役である住民はどのような社会権や財産権をもつのか。

28 毛呂山町（2017）『毛呂山町都市計画マスタープラン－改訂版－』93－95。

29 毛呂山町議会だより編集委員会編（2023）『議会だより』122, 13。

30 環境権やプライバシー権なども代表格であるが、本稿では割愛する。

5.1 社会権

日本国憲法第25条第1項は「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と掲げ、国民には生存権が保障される。もっとも、そこに第2項が続き「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と定める。この条項の関係については学説上争いがあるところ、国民が国に対して有する権利は自己の生存権保障を求めることができる具体的請求権ではないと通説はいう。社会権規定は国や地方公共団体に対し確固たる権利を保障するように命じる憲法規範とはなっていない³¹。

憲法規定と一般的な法律の規定を重ね合わせても、そこからまちづくりに関する具体的な権利を引き出すことはできない。健康で文化的な生活に言及する都市計画法第3条1項によれば、「国及び地方公共団体は、都市の整備、開発その他都市計画の適切な遂行に努めなければならない」が、他方で「住民は、国及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するため行なう措置に協力し、良好な都市環境の形成に努めなければならない」と第2項は定める。都市に暮らす住民は良好な都市環境を享受する権利ではなく、良好な都市環境を形成する努力義務を負う。

国や地方公共団体が整備する都市施設について、住民はそれを公共用物さらに公共サービスとして利用することができる。この利用権は給付行政の一環として受ける反射的利益と解されている。元来、行政組織法で観念されていた公物法が作用法上に広がってきている。次の財産権とも関連し、住民がこれまで受けてきた公共的利益の水準の維持を既得権として主張することには難しさが伴う。

5.2 財産権

日本国憲法第29条第1項は「財産権は、これを侵してはならない」と定める。その財産権とは、通例、個人の現に有する具体的な財産上の権利であると同時に、個人が財産権を享有できるという制度の保障である。前者は既得権の保護であり、まちづくりでは地権者の意向が重視される。もっとも、まちづくりに関する法律は数が多く、そこには古い規定もある。さらに改正の頻度も高い。実際に都市計画法や建築基準法などは相当に広範な規制をかけていることを合わせ考えると、後者の制度的保障の核心の理解が肝要となる。

日本国憲法第29条第2項は、その核心を侵害しない限りで、「財産権の内容は、公共の福祉に適合するように、法律でこれを定める」と規定する³²。この核心につき、かつては生産手段の私有制であると解されたが、むしろ個人の人格的自律のための不可欠の前提をなすものであると理解されるようになってきている。さらに、従前よりこの自覚的な通説のほかに自由な財産権保障という無自覚的な通説があると指摘されている³³。それによると、日本国憲法第29条第1項の財産権は、所有権その他

31 朝日訴訟（最大判昭和42年5月24日民集21巻5号1043頁）や堀木訴訟（最大判昭和57年7月7日民集36巻7号1235頁）が立法裁量や行政裁量を広く認める。学説ではその裁量の収縮や統制が考察されている。

32 判断枠組みが規制目的二分論から立法裁量論さらに比較衡量論へと移ってきている。

33 安念潤司（1995）「憲法が財産権を保護することの意味－森林法違憲判決の再検討」長谷部恭男編著『リーディングズ現代の憲法』日本評論社、146。

の物権に限らず債権、無体財産権なども含むすべての財産的権利をいう³⁴。この点につき、民法の一部を憲法上の財産権に含めた森林法共有林事件（最高裁昭和62年4月22日民集41巻3号408頁）を機に財産権は考察が深められている³⁵。

5.3 法的基盤

憲法の財産権と実定法上の制度との関係は一様ではないが、深く結びつくものである³⁶。ここでは川角駅周辺を念頭に置きながら、まちづくりの法的基盤を瞥見する。

一般法の地位を占めることが多い民法（明治29年法律第89号）は有体物としての物を定義し、それを不動産と動産に分ける。不動産は一軒家や集合住宅、商業施設などの建物と、その敷地や周囲に植栽される立木などを内容とする。所有者はこの物を自己で使用できるほか他者に貸借して収益をあげたり最終的には処分したりできる。この法定された物権は強大な威力を発揮するので、民法が法令の制限内における自由であることを第206条で明記し、特別法による制限を受けさせる。

もちろん民法も抽象的な土地を考えるのではなく隣地や公道などの存在を想定し、相隣関係の規定を置く。しかしより詳細な規定は他の法律に譲られている。建築基準法（昭和25年法律第201号）は建物の敷地の所有者に接道義務を課す（第43条）。道路法（昭和27年法律第180号）がその構造や管理者などを定める道路は都市計画法第11条第1項の定める都市施設であり、私有地はその道路とつながることで都市の一部となる。土地を所有するという自由権はこのような制約を内在的に受けている。

都市には建築基準法の適用される一般建築物のほか、鉄道などの建築土木一体型の構造物もある。鉄道工作物である地上駅や橋上駅舎は建築基準法の適用される建築物であるが、その改札内のコンコースやプラットホームなどは適用法規が異なる。自由通路や一体として整備されることの多い駅前広場は適用法が主に道路法である。都市計画区域で不動産を所有する自由権はこれらの法律を含む各種の政策的な規制を受け、その際には目的の公共性や手段の合理性・必要性などが考慮される。

以上は川角駅周辺の整備事業に関連した財産権をめぐる法的基盤の一部にすぎないが、その原型をつくる法的論理は明らかではない。自由権とは異なる構造をもつ財産権は、前述の通り、作用法として広がる公物法とも関係し、いまだ解明すべき点が多い。都市は人の生活の基盤であり、日常生活と密接なものではあるものの、住民の人権論でまちづくりを方向づける議論を展開するのは容易なことではない。このあたりが行政のまちづくり担当者が説明不足に陥ってしまう遠因となっていよう。

6. おわりに

小高い丘の上に広がる城西大学は、老朽化した旧1号館・2号館・3号館・4号館などを次々に壊し、坂戸キャンパスの刷新をはかっている。その陰で、長らく風趣を添えていた大きな庭石や地被植

34 法学協会（1948）『注釈日本国憲法上巻』有斐閣、288。この説明を批判したものとして、高橋正俊（1986）「財産権の不可侵の意義（2）」香川法学（5）4、14。

35 学界の動向が簡潔にまとめられている。巻美矢紀（2019）「共有林の分割制限と財産権の保障」『憲法判例百選I（第7版）』有斐閣、209。

36 清水潤（2008）「憲法上の財産権保障の意義について」『東京大学法科大学院ローレビュー』13、86。

物は除去され、入学式や卒業式のころに花びらを散らしていた桜の巨木や校章にもその葉が描かれるケヤキの大木はその多くが伐採されている。

本文で見たように、川角駅周辺のまちづくりで毛呂山町の担当者は説明不足を反省していたが、駅周辺と徒歩数分の距離でつながる大学のキャンパスづくりにおいても同様に情報の偏在があるのではないか。たしかに、大学の敷地の所有者は学校法人であり、その意思機関である理事会がキャンパスの刷新につき決定権をもつ。諮問的であれ、意見を述べることができるのは評議員会だけである。しかしながら、大学は川角駅周辺地区整備計画をめぐり通学生の安全性の確保を強調していたのであり、その学生の意見を軽視することはできない。さらに、大学は正門に近い新複合棟 JOSAI HUB（23号館）につき、理系－文系、学生－教職員、大学－地域などの垣根のない交流を生み出すことをそのコンセプトとして示している。この点からも、在学生³⁷のみならず、教職員そして近隣の住民や自治体にも、キャンパスの修景について丁寧に説明していくべきであろう。その実践が豊かな風景を保つ「地域と大学」の法的な関係をより実質的なものにしていこう。

参考文献（脚注であげたものを除く）

- 1) 芝池義一・見上崇洋・曾和俊文編著（2007）『まちづくり・環境行政の法的課題』日本評論社.
- 2) 北村喜宣（2008）『分権政策法務と環境・景観行政』日本評論社.
- 3) 岩橋浩文（2010）『都市環境行政法』法律文化社.
- 4) 糊澤能生・佐藤岩夫・高橋寿一・高村学人編（2018）『現代都市法の課題と展望』日本評論社.
- 5) 宮守代利子（2020）『景観共同体としての地域：里山景観を持続させる権利』晃洋書房.
- 6) 久保茂樹（2021）『都市計画と行政訴訟』日本評論社.
- 7) 藤井康博（2023）『環境憲法学の基礎』日本評論社.

37 演習において川角駅改札口的一件を取り上げたとき、学生はいろいろなアイデアを出した。さまざまな手段で通学する学生の意見をより積極的に聴取すべきだったという意見もあった。キャンパス内部の改革についても同様のことが言えそうである。

City Planning Project around Kawakado Station

Landscape and regulation

ICHIKAWA Naoko

Key words : City planning Act, citizen participation, property right, local authority, urbanization control area

Abstract

In the fall of 2023, the installation of a new ticket gate at Kawakado Station in Saitama marked a significant development not only for the station but also for the surrounding area. This paper analyzes the legal framework of this project, focusing on its alignment with the Japanese City Planning Act and the unique approach to development adopted by Moroyama City.

Moroyama City's approach prioritizes community engagement, allowing residents to actively participate in planning and propose ideas. Landowners are encouraged to preserve the area's natural beauty by continuing agricultural practices. Furthermore, collaboration between local universities, the railway company, and the City ensures that development respects property rights within urbanization control areas and integrates seamlessly with existing infrastructure.

In addition to these points, it's important to note that collaboration is crucial as it can lead to more open information and improved legal understanding.

【論文】

留学生による出前授業の教育的有用性の検討

——東松山市きらめき市民大学における取り組みを事例に——

田淵敬光*

キーワード：留学生、出前授業、きらめき市民大学、教育的有用性

1. はじめに

高等教育課程で学ぶ留学生と地域とのかかわりについては、木谷・高岸（2019）、シンプソン（2020）などで報告されているように、自然発生的なものだけでなく、各教育機関が独自のプログラムにより留学生が地域に適応し溶け込む、あるいは地域住民からの理解を促すような取り組みが行われている。このような教育機関主導による取り組みの必要性は、岸田（2022）の2019年度に行われた全国調査の報告からも伺える。当該調査によって、留学生自身の地域に対する意識が明らかになっているが、そのなかで、「日本人や日本社会との接点は思ったより少なかった」という項目で回答者662人中、482人（72.8%）が「よくあてはまる」または「ややあてはまる」を選択している点に注目したい。当該調査によれば、多くの留学生の地域や地域住民とのかかわりの機会は留学生の想定より少なかったのである。彼・彼女らの考える地域・地域住民とのかかわり方を実現させるためには、地域連携の基盤を担う教育機関の主導による機会創出が必要不可欠であろう。

なお、教育機関が主導して留学生と地域や地域住民との接触を促す場合、ただ闇雲に交流の機会や場を提供し続けるだけでなく、このような取り組みが地域や留学生にどのような効果をもたらすのかについても考慮しておく必要がある。例えば、村越（2020）の、城西短期大学ビジネス総合学科の科目である「日本文化研修」における小川町にぎわい創出課との連携についての報告で、地域とのかかわりが一定の教育的効果をもたらすことが明らかとなっている。また、木谷（2019）は、高大連携や地域貢献を狙いとして行った留学生と高校生による共同学習の場で、留学生が自国の事情について紹介することで、高校生側はこれまで持っていたイメージが変わり、「国際交流」に対する意識変化につながったとし、留学生自身も当該授業が留学生活の中でも重要な経験となったとしている。

ただし、これらの報告ではいずれも、地域や地域住民とのかかわりを経たことで具体的に留学生にどのような成長をもたらしたかについては言及していない。したがって、本稿では、留学生が講師役となって行う出前授業を事例として、留学生と地域住民との接触やそのための準備を通して、留学生のどのような能力が成長したのかを明らかにする。さらに、本稿における取り組み（出前授業）と留学生がそれまで体験してきた地域や地域住民との関わりとの比較も加えて、本稿の取り組みの教育的な有用性を検討することとする。

* 城西短期大学・准教授

2. 出前授業実施の背景と狙い

本学ビジネス総合学科では、2023年度に入学した留学生は2名で、2名ともベトナム出身であった。筆者は、彼ら1年生の日本語の必修科目を担当しており、日本語による文章作法や発表、ディスカッションなどを行っている。その中で、近年、ベトナム人に対する印象の悪化が自身らにも悪影響を及ぼしているとの主張があった。その事例として、当該留学生がアルバイトの採用面接において、自身がベトナム人であることを明かした途端、それまで穏やかだった雰囲気が一変し、不採用となってしまったといったことがあったようである。ベトナム人だからという理由で不採用となったか否かは定かではないが、少なくとも、ベトナム人であることを明かしたことで自身の印象が悪くなってしまったと留学生自身は感じているようである。このように、彼らは一部のベトナム人により全体に対する印象が悪化していることを憂えており、ベトナム人全体に対する負のイメージを払拭する機会がないものかという訴えがあったのである。

以上のような経緯から、本稿のテーマである留学生自身が講師役となって、自国についてのイメージを改善させ、さらに主体的な学びや日本語能力の向上につながるような出前授業ができないかと考えた。幸いにも筆者がメンバーとして関わる東武東上線沿線大学プラットフォーム（TJUP）の加盟校である東京電機大学職員の杉山成二氏より、東松山市きらめき市民大学（以下、きらめき市民大学）において留学生が自国についての紹介をしたという事例を聞き及んでいたため、早速、杉山氏を介してきらめき市民大学に留学生による出前授業の実施を打診した。後日、きらめき市民大学事務局長小関一史氏より回答があり、「国際・文化」学部において2023年10月18日（水）に実施することで承諾を得た¹。

この出前授業を実施するにあたっての狙いは、留学生の立場からは、地域住民に「自国に対する理解の深化と良化」を、また、筆者の教員としての立場からは、前項で述べたように教育的効果を期待して実施するものである。具体的には、準備段階および出前授業実施を通して留学生が「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力²（基本的学習成果）の獲得・向上」といった成果を獲得することを狙いとしている。

3. 出前授業実施に向けた準備

2023年5月16日にきらめき市民大学の担当者より内諾を得た後、春学期6回目の授業日である5月17日（水）より出前授業実施に向けた準備を開始した。大まかな準備のプロセスは表3.1のとおり

-
- 1 きらめき市民大学に本件を打診した時点で、既に2023年度の授業開始から4週ほど経っていたが、次の学期以降での実施が可能とのことであった。準備期間等も考慮し、きらめき市民大学が2学期に入り、本学でも秋学期が始まって数週経ってからの実施が望ましかったため10月18日（水）を候補日として伝え、快諾を得た。
 - 2 本学ビジネス総合学科では、ディプロマポリシー（2023.4入学者用）において、①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力を「基本的学習成果」として定めており、これに加えて、「専門的学習成果」である④職業人として活躍できる幅広い教養、⑤ビジネススキルを身につけた者に学位を授与するとしている。

である。

表3.1 出前授業実施までの準備過程

学期	回数	日付	準備項目
春学期	1	5月17日	実施要件・環境について確認
	2	5月24日	実施内容の検討
	3	5月31日	内容の確定、情報収集開始（各自 teamsに蓄積）
	4	6月7日	情報収集（各自 teamsに蓄積）
	5	6月14日	情報の整理、まとめ作業、スライド作成開始（teams共同作業）
	6	6月21日	スライド作成（teams共同作業）
	7	6月28日	スライド作成（teams共同作業）
	8	7月5日	スライド作成（teams共同作業）
夏休み			各自資料収集、PPT作成
秋学期	9	9月27日	スライド最終確認（teams共同作業）、読み上げ原稿作成
	10	10月4日	読み上げ原稿完成、練習
	11	10月11日	練習
		10月18日	出前授業実施

初回準備日に、先方の1コマ分の時間（90分）を頂いていること、間10分の休憩があることなどの要件を確認し、PC・プロジェクター・スクリーン・マイク等を使用することなど、実施環境についても留学生らとともに整理した。

3回目の準備段階で、出前授業で扱う内容を「ベトナムの社会」、「日越関係」、「ベトナムの文化」の紹介（講義型）と「ベトナムの遊び」の実践（体験型）に確定した。その後、内容毎に担当者を決め、各々の担当する内容に関する情報を収集させた。収集した情報については、Microsoft teams（以下、teams）でチームを作成し、同チーム内のClass Notebookに蓄積させた。なお、teamsでの共同作業にあたっては、PCによる作業が必須であったが、ノートPCを持っていない学生がいたため、情報科学研究センターの貸出しノートPCロッカーを利用させ、毎回の授業（準備）において事前に借りてくるよう指示していた³。共同作業中は、筆者が日本語の間違いや深掘りすべき情報等を都度指摘し、作業が円滑に進むよう促した。

3 情報科学研究センターのPC貸出し用ロッカーは、学生証を端末にかざすだけで出し入れができ、煩雑な手続きが必要ないため、日本語やコミュニケーションに自信のない学生でも気軽に借りられるようになっている。

図3.1 Class Notebookに蓄積した情報



5回目の準備段階で、それまでに収集・蓄積した情報を図3.1のようにまとめ、これをもとにPowerPoint (以下、PPT) 資料の作成を開始した。PPT資料の作成にあたっては、自身が担当する各パートを各自個別に作成するのではなく、teams内で同一ファイルを開くことによるリアルタイム共同作業で進めた。筆者も資料作成の進捗を俯瞰的に把握しながら日本語チェック等を同時に行った。毎回、作業の終わりには日本語科目 (文章作法・口頭表現) の時間を使って準備を行っていたこともあり、進捗や今後の予定を口頭で報告・確認させた。また、作業中に情報の取捨選択や使用する表現等が悩ましい場合には、2名の作業を中断させ、留学生同士で議論させながら日本語による合意形成を促し、使用する表現等を決めさせた。

図3.2 事前準備の様子



当初、春学期中に資料作成作業が完了する予定だったが終わらなかったため、夏休み中にも各自で不足している情報の収集と資料作成を続けることとなった。

秋学期に入り初回の授業で漸く使用するPPT資料が完成し、出来上がったスライドは全49枚、表紙や目次等を除いた内容部分が43枚（「ベトナムの社会」10枚、「日越関係」8枚、「ベトナムの文化」25枚）といったものとなった。次に完成したPPT資料を基に読み上げ原稿を作成したのだが、先述したように、当初の予定より資料作成に時間がかかってしまったため、読み上げ原稿の完成と練習ができたのは出前授業実施の前週であった。

4. 出前授業の実施

前項のような事前準備を経て、出前授業を2023年10月18日（水）に予定通り実施した。当日の受講者数は26名であった。

当初は、持ち時間90分（うち休憩時間10分）のなかで50分程度を「ベトナムの紹介」に充てる予定であったが、実際に授業を始めると、講師役の2名がともに緊張し、やや早口で話してしまったため、40分程度で紹介が終わった。

その後、質疑応答の時間を10分ほど設けた。その際に出た質問としては、「日本での留学生活で困ったことや母国との違いはあるか」、「ベトナムにおけるアルファベットの読み方」、「学生の着るアオザイについてももう少し詳しく教えてほしい」、「ベトナムでは英語をよく使うのか」、「ベトナム人は結婚後に親と同居することが多いのか」、「ベトナムの病院などで、お金を多く払うことで対応が変わることはあるか」、「ベトナムでは地域によって性格の違いなどはあるか」などといったものがあった。

図4.1 「ベトナムの紹介」・「質疑応答」の様子



その後、10分の休憩を挟み、ベトナムの遊びである「バウクア（Bầu Cua）」を1グループ5～6名ずつに分かれて体験してもらった。「バウクア（Bầu Cua）」は、日本のチンチロや丁半博打に似た卓上ゲームである。高齢者にとって、馴染みのある遊びに似ており、ルールもそれほど難しくない。そのため、ルールの説明にほとんど時間を要さず、すぐに始めることができ、また、非常に盛り上がった。留学生らも一緒に参加するものと思われたが、2名とも親役の受講者がスムーズにゲーム進行ができるようサポートに徹していた。

図4.2 バウクア体験の様子



5. 受講者の反応

授業終了時に受講者に対してアンケート調査を実施した（表5.1）。アンケートの回答者は当日の受講者26名のうち19名（73.1%）であった。

なお、設問3-3から回答者数が14名となっているが、これは3-3から5までの設問がアンケート用紙の裏面に記載されていたため、設問の存在に気付かなかったものと思われる。また、3-4のみ11名となっているが、「内容（情報）に知りたくないものがあった。」という設問の意図が受講者にとって不明瞭であったためであろう。なお、この設問は、講義内容で日越関係における日本のベトナム占領期やその後のベトナム戦争について等、センシティブなものも扱っているため、これらに対して嫌悪感を抱く受講者がいたかどうかを明らかにし、今後同様の機会があった際に当該内容を取り入れるべきか否かを検討する材料とする狙いがある。

表5.1 受講者アンケート集計結果

※4. そう思う 3. ややそう思う 2. あまりそう思わない 1. そう思わない

設問	回答者数(%)				
	4	3	2	1	計
1-1. 学生の話すスピードは適切だった	10(52.6%)	8(42.1%)	1(5.3%)	0(0.0%)	19
1-2. 学生の声の大きさは適切だった	7(36.8%)	10(52.6%)	2(10.5%)	0(0.0%)	19
1-3. 学生の発音は適切だった	9(47.4%)	8(42.1%)	2(10.5%)	0(0.0%)	19
1-4. 学生の使う語彙は適切だった	9(47.4%)	9(47.4%)	1(5.3%)	0(0.0%)	19
2-1. スクリーンに映し出した資料や配布資料は見やすかった。	15(78.9%)	4(21.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	19
2-2. 話している内容と資料の内容が合っていた。	16(84.2%)	3(15.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)	19
2-3. 資料の分量やバランスは適切だった。	10(52.6%)	7(36.8%)	2(10.5%)	0(0.0%)	19
3-1. 内容（情報）は分かりやすかった。	14(73.7%)	5(26.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	19
3-2. 内容（情報）の量は適切だった。	12(63.2%)	6(31.6%)	1(5.3%)	0(0.0%)	19
3-3. 内容（情報）に知りたかったものがあった。	5(35.7%)	8(57.1%)	1(7.1%)	0(0.0%)	14
3-4. 内容（情報）に知りたくないものがあった。	1(9.1%)	2(18.2%)	3(27.3%)	5(45.5%)	11

3-5. ベトナムの社会について理解が深まった。	5(35.7%)	9(64.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
3-6. ベトナムと日本の関係について理解が深まった。	5(35.7%)	8(57.1%)	1(7.1%)	0(0.0%)	14
3-7. ベトナムの文化について理解が深まった。	6(42.9%)	8(57.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
4-1. 質問に丁寧に答えてくれた。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
4-2. この授業に満足している。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
4-3. 授業を受けてベトナムに対する印象が良くなった。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
4-4. 授業を受けてベトナム人に対する印象が良くなった。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14

5. 自由記述欄

- ・未知の国だったのでとても楽しくお話をきけた これからもこんな授業がほしい
- ・バウクアとても楽しかったです。
- ・ベトナムの音楽、楽器を奏でてほしかったです！
- ・国際交流協会ぜひ在東松山ベトナム人の友人達を支援して下さい。
- ・たのしかったです！

アンケート項目は「1. 学生の話の聞き取りやすさについて」、「2. 授業で使用した資料について」、「3. 授業の内容について」、「4. その他」、「5. 自由記述欄」といった構成となっている。それぞれ、日本語運用能力、授業準備、内容、効果等を振り返るための項目である。

日本語運用能力については、話のスピード（1-1）・声量（1-2）・発音（1-3）・語彙（1-4）がやや不適切だったとする意見が1～2名からあがっているが、概ね良好であったとの評価を得ている⁴。なお、声量に対する評価がほかの3項目に比べてやや低いが、これは、授業の前半（スライド発表部分）でマイクを使用しておらず、後部に座っていた受講者が講師役2名の声を聞き取りづらかったためであろう。なお、発音や語彙については、筆者が聞いている限りでは、言い間違いなどのミスがあり、話の趣旨が上手く伝わらなかったであろう場面が何度かあった。

授業準備に関しては、見やすさ（2-1）、話と資料の整合性（2-2）は高評価であったが、分量やバランス（2-3）に関してはやや不適切だったとする意見があるなど、見やすさや整合性と比べると評価が高くなかった。今回の授業で使用したスライドは、前項でも示したように「ベトナムの社会」が10枚、「日越関係」が8枚、「ベトナムの文化」が25枚と、たしかにベトナムの文化に偏重していると捉えられかねないバランスであった。今後、同様の機会があった際には資料準備にあたり、この点を考慮して作成すべきであろう。

次の「3. 授業の内容について」は、情報の分かりやすさ（3-1）については、評価が高かったが、情報量（3-2）は、1名からやや不適切であったとする回答があった。また、情報に対する関心度をみる項目として、知りたかったものがあった（3-3）、知りたくないものがあった（3-4）を設けているが、先述したように特に「知りたくないものがあった」については意図が伝わっていなかったことから回答が割れてしまったようである。一方で、留学生の狙いの1つである「自国に

4 授業開始前に、講師役が短期大学1年生であること、日本語能力がまだ十分でないことなどを受講者に伝えていたため、評価が甘くなった可能性がある。

対する理解の深化」についての項（3-5～3-7）は、概ね悪くはないが、突出して高いわけでもない。また、日越関係（3-6）では、やや不適切とする意見が1名あった。情報量（3-2）に比べ、これら3項目の評価がやや低いことから、情報の量の問題ではなく質の問題と考えられる。

4つ目の項目は質問への対応や受講者の満足度、ベトナム（人）に対するイメージの良化についての設問である。各設問の方向性は全く違うが、結果はすべて同じで、回答者の半数以上が「思う」、4割弱が「やや思う」と答えており、ネガティブな回答はなかった。したがって、留学生側の狙いである「自国（人）に対するイメージの良化」（4-3、4-4）については、ある程度達成されたものと考えられる。

以上、受講者による評価については、概ね良好であったようである。また、最後の自由記述欄のコメントは、「未知の国だったのでとても楽しくお話をきけた これからもこんな授業がほしい」、「バウクアとても楽しかったです」、「ベトナムの音楽、楽器を奏でてほしかったです!」、「国際交流協会でぜひ在東松山ベトナム人の友人達を支援して下さい。」、「たのしかったです!」といったもので、否定的なコメントはみられなかった。ただ、ベトナムの楽器の演奏が実演できなかったことに対する指摘は、今後の課題として留意しておくべきであろう。

以上のように受講者（アンケート回答者）からの評価は、高かったようであるが、講師役となった留学生の自己評価についてはどうだろうか。

6. 留学生による評価

ここでは、留学生自身が出前授業の準備や実施に対してどのような自己評価をしているのかを明らかにする。

受講者と同様に、講師役の留学生2名に対しても出前授業終了後にアンケートを行った（表6.1）。質問項目は受講者のものと同じものも一部あるが、主として出前授業を通じた自身の成長などを問うている。具体的には、表6.1のように、「1. 自分の取り組みについて（準備段階）」、「2. 自分の取り組みについて（出前授業当日）」、「3. 出前授業に対する受講者の評価について」、「4. 自身の成長について（日本語能力以外）」、「5. 自身の成長について（日本語能力）」、「6. 自由記述欄」といった構成になっている。

表6.1 講師役留学生アンケート集計結果

設問	回答者数			
	4	3	2	1
1-1. 話す内容を決めるときに自分の意見を言えた。	2	0	0	0
1-2. 自分が担当した部分の調査はよくできた。	0	2	0	0
1-3. 自分が担当した部分のPPTはよくできた。	0	2	0	0
1-4. PPT全体はよくできた。	1	1	0	0
1-5. 自分が担当した部分の情報量はちょうど良かった。	1	1	0	0

1-6. PPT全体の情報量はちょうど良かった。	1	1	0	0
1-7. PPT全体の情報のバランスはちょうど良かった。	1	1	0	0
2-1. 自分の話すスピードは適切だった。	0	2	0	0
2-2. 自分の声の大きさは適切だった。	0	2	0	0
2-3. 自分の発音は適切だった。	0	2	0	0
2-4. 自分が使った語彙（ことば）は適切だった。	0	2	0	0
3-1. 受講者はベトナムの社会について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
3-2. 受講者はベトナムと日本の関係について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
3-3. 受講者はベトナムの文化について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
3-4. 受講者は出前授業に満足していると思う。	2	0	0	0
3-5. 受講者は出前授業を受けてベトナムに対する印象が良くなったと思う。	0	2	0	0
3-6. 受講者は出前授業を受けてベトナム人に対する印象が良くなったと思う。	0	2	0	0
4-1. 以前より「前に踏み出す力（主体性、働きかけ力、実行力）」が成長した。	0	2	0	0
4-2. 以前より「考える力（課題発見力、計画力、創造力）」が成長した。	1	1	0	0
4-3. 以前より「協力する力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性）」が成長した。	1	1	0	0
4-4. その他に日本語能力以外で成長したと感ずるものがあれば以下に記入してください。 ・お年よりと一緒に話して、よくコミュニケーションしたことでたくさんの単語を学ぶことができて、よかった。 ・コミュニケーション力が成長した				
5-1. 以前より「読む力」が成長した。	1	1	0	0
5-2. 以前より「聞く力」が成長した。	0	2	0	0
5-3. 以前より「話す力」が成長した。	0	2	0	0
5-4. 以前より「書く力」が成長した。	0	2	0	0
5-5. 以前より「会話力」が成長した。	0	2	0	0
5-6. 以前より「語彙力」が成長した。	2	0	0	0
5-7. その他に日本語能力で成長したと感ずるものがあれば以下に記入してください。 ・紹介の時に間違ったことばがあったことに気付いた。そのあと、会話しながら、そのことばを自分で直すことができた。				
6. 出前授業に関する意見や感想があれば以下に記入してください。 ・初めてお年寄りと話せて、ベトナムのことをみんなに紹介でき、ベトナムの印象がよくなってよかったと思う。				

2名の回答をみると、PPTに関するものや日本語以外の能力の成長に関して多少の違いがある程度で、ほとんどの項目で差異はなかった。

準備段階の評価をみると、自身の担当した調査やPPTに対する評価はそれほど高くなかったようである。また、情報量やバランスについては見解が分かれており、1名はやや評価が低い。受講者からの評価にもあったが、スライドの枚数だけを見ても、「文化」のパートに偏重していると捉えられ

かねないバランスであった。

出前授業当日の自己評価は、2名ともスピード（2-1）、声量（2-2）、発音（2-3）、語彙（2-4）すべてで評価がそれほど高くなかった。なお、これらの評価は、受講者によるものに比べ、留学生自身のもののほうが低い結果となっている。

次に、出前授業に対する受講者の評価がどうだったと思うか、という設問であるが、これも、前項と同様にやや控えめな回答がほとんどであった。しかし、受講者の満足度（3-4）についてのみ、2名とも「4. そう思う」と答えており、留学生自身も手ごたえを感じているようである。ただ、今回の取り組みの留学生側の狙いであった「自国（ベトナム）に対する理解の深化と良化」の達成は、「3. ややそう思う」という回答から、十分に成しえていないと考えていることが伺える。

一方で、筆者の狙いであった「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」については、「4. 自身の成長について（日本語能力以外）」および「5. 自身の成長について（日本語能力）」で問うている。

ディプロマポリシーに定める能力については、前に踏み出す力（4-1）が2名とも「3. ややそう思う」という控えめな評価であったのに対して、考える力（4-2）、協力する力（4-3）については1名が「4. そう思う」、もう1名が「ややそう思う」と答えており、1名は自身の成長を強く感じているようである。具体的に、何がきっかけでこのような回答となったのかを明らかにしたいところではあるが、本アンケートは留学生2名に対して匿名性を保障することを条件に回答させているため、本稿ではこれ以上の言及は控えることとする。

また、自由記述欄（4-4）には、「お年よりと一緒に話して、よくコミュニケーションしたことでたくさんの単語を学ぶことができ、よかった。」、「コミュニケーション力が成長した」との記載があり、前者は日本語能力（語彙）についての言及であるため、この欄の趣旨とは外れているが、2名ともコミュニケーションというキーワードで一致している。日本人とのコミュニケーションによって自身の成長を強く感じたものと思われる。

日本語能力についても、概ねある程度の成長を感じているようである。具体的には、聞く力（5-2）、話す力（5-3）、書く力（5-4）、会話力（5-5）の成長に関してはそれほど高いものではないが、読む力（5-1）や語彙力（5-6）に関しては高い成長を感じているようである。日本語能力に関する自由記述欄（5-7）をみると、「紹介の時に間違ったことばがあったことに気付いた。そのあと、会話しながら、そのことばを自分で直すことができた。」との記載があり、自身の日本語の誤りを直す力の成長を感じているようである。

以上のように、アンケートの結果を見る限り、本取り組みにおける筆者の狙いである「日本語能力の向上」と「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」については、ある程度の成果があったことが分かる。

また、出前授業に対する自由記述欄（6）には、「初めてお年寄りと話せて、ベトナムのことをみんなに紹介でき、ベトナムの印象がよくなってよかったと思う。」との回答があった。アンケート結果の端々から留学生の自信のなさが伺えるが、その一方で、「2. あまりそう思わない」や「1. そう思わない」と回答した項目がない点や最後の自由記述欄（6）から、総じて今回の取り組みに対する自己評価や満足度は高く、手ごたえもある程度あったものと思われる。

7. 留学生による出前授業の教育的効果

アンケートとは別に過去の地域や地域住民との交流との比較などについてのインタビューも行った。インタビュー内容は、「①過去の日本人・地域との交流の機会の有無とその内容」、「②過去の交流と今回の取り組みとの違い」、「③今回の取り組みでどのような点が自身の成長につながったと思うか」、「④今回の取り組みの中でどのような能力が最も成長したと思うか」、「⑤他の留学生も今回の取り組みのようなことをすべきだと思うか、その理由は何か」という構成である。

2名とも①はあると答えたが、学校などが主導したものではなく、アルバイト先や友人関係など個人的な接触のみしか経験がないとのことだった。また、②の過去の日本人との交流と今回の取り組みとの違いについては、「これまでは交流の相手が若者だったが、今回はお年寄りだったから、感覚の違いなどを感じた。しかし、若者との交流よりお年寄りとの交流のほうが使う言葉がわかりやすく、コミュニケーションを取りやすかった。」「これまでは、交流の場で敬語などを意識してこなかったが、出前授業では丁寧語をしっかりと使うよう意識した。」と答えている。留学生と日本人との交流においては、同世代の若者同士のほうがスムーズであると思われがちであるが、同世代の若者の言葉遣いに戸惑ったという訴えは、筆者がこれまで指導してきた留学生からも一定数あった。一方で、高齢者との会話は、その豊富な経験からか、留学生にとって理解しやすい言葉遣いをする上に、留学生の発話を誘引する話術にも優れていることが多いと思われる。さらに、後者の回答のように、相手が年長者であることから、留学生自身も丁寧な言葉遣いを心がけようとする効果も期待できるのである。

③今回の取り組みでどのような点が自身の成長につながったと思うかについては、「交流の時間が短かったため、実施の段階での具体的な成長はあまり感じていないが、準備を通して、ベトナムについて深く理解できるようになった。」「ベトナムの歴史を調べることによって深く理解できた。ベトナムの文化もよく理解できるようになった。」との回答があった。やや質問の趣旨から逸れた回答であったが、2名とも準備期間を通して自国についての理解が深まったようである。実際に、準備段階では特に「ベトナムの社会」、「日越関係」の部分で調査が難航した。当該部分を担当した留学生は、これまで、自国の政治や経済、外交について全く興味を持たずに過ごしてきたため、当該部分の内容のほとんどは、今回の準備（調査）の際に初めて知ったことだと述べていた。その国の人間であれば誰しものがその国について精通しているというわけではないのだが、留学先で自国の紹介をするという機会は存外多い。この2名も今後、自国の紹介をする機会が再度訪れるであろう。その際に、今回の経験を通じて、少なくとも自国の社会や日越関係、自国文化については円滑にその魅力の一端を伝えられるようになったものと思われる。

④今回の取り組みの中でどのような能力が最も成長したと思うかという質問については、2名とも「PPT作成技術が向上した」との返事があった。この「PPT作成技術」は、本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める、専門的学習成果に該当するものであり、本取り組みにおける当初の狙い以上の成果を得たことになる⁵。

⑤他の留学生も今回の取り組みのようなことをすべきだと思うか、その理由は何かという質問については、2名ともすべきだと答え、その理由として「日本にいても日本人と交流できない留学生も多

い。日本人と交流したくても会話が苦手でなかなか一步を踏み出せない留学生も多い。授業としてやれば、その一步を踏み出しやすい。」「1度はこのようなチャレンジをして、自分の力をよく理解できるようになる。日本語のコミュニケーションも良くできるようになる良い機会だと思う。」と答えている。この回答からも、出前授業を実施した意義は十分にあったとわかる。

8. おわりに

以上、留学生による出前授業に対する受講者と講師役の留学生による評価とインタビューを通して、当初、本取り組みの狙いとしていた「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」は、ある程度達成されたことが確認できた。また、それ以外にも本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーの専門的学習効果の獲得も副産物的に達成されたことがわかった。以上のことから、留学生による出前授業は、その効果をもみても、異文化の相互理解だけでなく教育的有用性が期待できるものといえよう。

なお、本稿では、出前授業の受講者が得られる教育的効果については、アンケートによって明らかとなった「その国に対する理解の深化」以上のものを明らかにすることができなかった。講師役である留学生に対する教育的有用性だけでなく、受講者側のそれも同様に存在することが分かれば、留学生による出前授業の真価がより明確になるであろう。そのためには、引き続きこのような取り組みを行っていき、受講者側のそれを明らかにしていくべきであろう。

また、本取り組みの課題として、出前授業を実施する講師役の留学生が多国籍となってしまった場合の対応があげられる。この場合、「自国についての紹介」という留学生にとって比較的進行しやすいテーマを採用できなくなるため、授業内容の決定過程で多くの時間を要する可能性がある。また、恒松（2019）にもあるように、留学生が多国籍である場合、文化的背景の相違や言語障壁により留学生間の相互理解が円滑に行われず、連携や協働がうまくいかないケースも想定される。したがって、教員には状況に応じて合意形成を促すためのある程度のファシリテーションスキルが求められよう。

なお、残念ながら本学は、2025年度以降の学生募集を停止することが決定し、城西短期大学の留学生教育の一環としてこの取り組みを続けていくことはできなくなった（2024年度入学生に留学生がいなければ、短期大学としての本取り組みは今年度限りとなる。）。しかし、本稿で明らかにしたように、留学生が講師役となって出前授業を実施することの教育的有用性は高い。したがって、機会があれば、どこかでまたこのような取り組みを続け、留学生の成長を促していきたいと考えている。そして、その成果として今回の2名の留学生が懸念していた特定の国やその国の人々に対する過度な悪印象を解消し、我が国の共生社会の発展の一助となれば本望である。

5 なお、今年度入学した留学生は既出のとおり2名だけであったため、本学のMSOffice等を学ぶ演習科目である「コンピュータ演習」の留学生クラス（例年筆者担当科目）を開講できなかった。そのため、準備段階において、WordやPPT等の基本的なテクニックについて、本格的な演習にならぬよう、さり気なく教えながら作業を進めさせていた。その結果として、彼らがPPT技術の成長を感じているのであればしめたものである。

参考文献

- 1) 木谷真紀子・高岸雅子 (2019) 「留学生の「京都」への貢献－交流、連携からの発展－」『同志社大学日本語・日本文化研究』(15), 43－56.
- 2) キャサリン・シンプソン (2020) 「島根大学留学生と地域との交流－その10年間の取り組みと成果－」『留学交流』(114), 1－6.
- 3) 岸田由美 (2022) 『外国人留学生と地域住民の交流の実態と大学・地域特性に関する調査研究』(20018－2021年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書 課題番号 18K02722).
- 4) 村越純子 (2021) 「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育－留学生対象「日本文化研修 I」における学外授業」『地域と大学』(1), 28－38.
- 5) 木谷真紀子 (2019) 「留学生による「高大連携」と「地域貢献」－京都府立鴨沂高等学校の授業への留学生参加の試み－」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(10), 41－53.
- 6) 恒松直美 (2019) 「多国籍留学生が体験学習から捉えた日本社会との接触における課題」『留学生教育』(24), 11－21.

A Study of Educational Usefulness of Visiting Lectures by International Students

- A Case Study of Kirameki Citizen's College -

TABUCHI Takaaki

Key words : International Students, Visiting Lectures, Kirameki Citizen's College, Educational Usefulness

Abstract

In this paper, we use a case study of a delivery class in which international students acted as instructors to clarify what abilities international students developed through contact between them and local residents and through preparation for such contact. In addition, the educational usefulness of the delivery class by international students was examined by comparing the relationship between the delivery class by international students and their previous experiences with the local community and local residents. As a result, it was found that the delivery class by international students has educational usefulness as well as cross-cultural mutual understanding.

【地域教育実践報告】

健康イベントでの活動

——ロコモを知ろう——

石倉恵介*・塚崎杏**・山田晃也**・矢嶋涼**・勝見大也**・川上優翔**
小野澤樹**・和智弦汰**・富徳**

キーワード：産学連携、ゼミナール活動、ロコモティブシンドローム

1. はじめに

ロコモティブシンドローム (locomotive syndrome：運動器症候群) とは、「運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態」のことを表し、平成19年に日本整形外科学会によって新しく提唱された概念である^{1),2)}。令和元年において、要介護度別にみた介護が必要になった原因は、要支援者では、第1位が「関節疾患」、第2位が「高齢による衰弱」、第3位が「骨折・転倒」で、これらを運動器の障害としてまとめると全体の36.1%を占め、要介護者では第3位が「骨折・転倒」が12.0%であった³⁾。これらのことから、運動器の障害をきっかけに日常生活の自立度が下がりやすいことが推察される。平均寿命が延伸する中、健康寿命も伸ばすことが求められ、運動器の機能を長く保ち続けることが重要である。しかしながら、厚生労働省の健康日本21 (第2次) において、ロコモティブシンドロームを認知している国民の割合の目標は、80% (令和4年時点) を掲げたものの、平成27年44.4%、令和元年度44.4%であり、目標に大きく届いていない⁴⁾。これらの統計は全国的なものであるが、我々の居住する埼玉県の状態について、更に、その属性についての認知度の割合は十分に明らかになっているわけではない。実際に健康管理概論などの講義で、ロコモティブシンドロームを知っているか尋ねても、この言葉を認知している学生はほとんどいない。

一方、このロコモティブシンドロームの状況、つまり身体の移動機能を確認するための指標として、ロコモ度テストが開発された⁵⁾。Yoshimura et. al (2017) は、山村、漁村在住の一般住民にロコモ度テストを実施した。1,575人を解析対象として、ロコモ度1、2それぞれの該当者を推定した⁶⁾。ロコモ度2に該当する割合は、女性で26.3%、男性で22.1%で、80歳以上では、女性76%、男性の62%であった。しかしながら、この研究は山村、漁村在住者を対象としており、我々の居住する埼玉県の都市部においても同様の数値が適応できるかについては不明であった。

さいたま市にある大型ショッピングモール「イオンモール浦和美園店」で2022年10月7日～16日にかけて、健康イベントが開催された。城西大学・城西短期大学は、産学連携として協力することになった。他の3団体に加えて、経営学部石倉ゼミナールも「ロコモを知ろう」というコンテンツで2日間、参加することになった。本ゼミナールでは、健康を題材として、調査・実験を実施する卒業研究

* 城西大学経営学部マネジメント総合学科教授

** 城西大学経営学部マネジメント総合学科3年生

を課している。上述の通り、ロコモティブシンドロームは新しい概念であり、実際のフィールドで認知度や市民の状況を調査する良い機会であると考え、卒業研究の調査も含め、この健康イベントに参加することにした。参加の目的として、①イベント参加者自身が移動機能の低下（ロコモティブシンドローム）に対する認識を高めること、移動機能に支障をきたしている場合、それを抑制するためのトレーニングを理解してもらい、移動機能の低下がなくても、各自が対策を講じることによって、ロコモティブシンドローム発症の予防方法を理解すること、②日本の健康課題の一端をゼミ生が実際に調査を実施することで、課題を肌身で感じてもらい、世代を超えた人々と交流すること、③卒業研究の一環として、埼玉県内の都市部の市民の男女、各年代におけるロコモティブシンドロームの認知度およびロコモ度Ⅰ、Ⅱの割合など明らかにするための調査をすること、であった。翌年の2023年5月20日、21日にも同じ場所で健康イベントが開催され、引き続き参加した。これらのイベントに参加した活動状況と2023年度に参加した学生の感想などを報告する。尚、調査したロコモ度などのデータは、卒業論文としてまとめており、別な機会に報告したい。

2. 健康イベントでの活動ーロコモを知ろうー

2.1 活動概要

【日時】2022年10月7日（金）、8日（土） 2023年5月20日（土）、21日（日）、10：00～17：00

【場所】イオンモール浦和美園

【内容】健康イベントへの参加、タイトル：ロコモを知ろう

【実施者数】2022年：石倉ゼミナールⅠ生3名（2024年度卒業予定）

石倉基礎ゼミⅡ生1名（2025年度卒業予定）

2023年：石倉ゼミナールⅠ生9名（2025年度卒業予定）

【イベント参加者】2022年：10月7日 58名、8日 138名

2023年：5月20日 116名、21日 115名

【具体的内容】

- i). ロコモティブシンドロームの認知度などについてのアンケートの実施
- ii). ロコモ度テストの実施
 - ① 立ち上がりテスト、② 2ステップテスト、③ ロコモ25
- iii). ロコモ度のフィードバック
- iv). ロコモ予防トレーニング
 - ① 片脚立ち、② スクワット

2.2 活動の様子

イオンモール来場者に対して、イベント内容を簡潔に説明し、興味を持っていただいた方に性別、年代、身長、運動の実施状況などのアンケートとロコモ25に回答いただいた。ロコモ25は、この1か月間に身体の痛みや日常生活で困難なことがあったかを25項目の質問に5段階で回答いただくもので、ネガティブな回答から4点、3点、2点、1点、0点とし、合計点を算出した。合計点（y）が7≦



図2.1 アンケート風景

$y < 16$ であるとロコモ度1、 $16 \leq y < 24$ であるとロコモ度2、 $y \geq 24$ であるとロコモ度3となる(図2.1)。

その後、立ち上がりテストを実施した(図2.2、2.3、2.4、2.5)。このテストは、下肢の筋力を判断するもので、下肢の筋力が減弱すると移動機能の低下、すなわちロコモティブシンドロームの可能性があると考えられている。10cm、20cm、30cm、40cmの台を事前に自作して準備した。イベント参加者に40cmの台に座って足は肩幅に開いて少し後ろに引いていただく(脛の角度が70度になるようにする)(図2.2)。反動をつけないように胸の前で腕を交差させ片脚で立ち上がっていただいた(図2.3、2.4、2.5)。片脚で立ち上がれば、30cm、20cm、10cmと高さを下げて挑戦してもらった。40cmを片脚で立ち上がれな

ければ、両脚で立ち上がっていただき、30cm、20cm、10cmと高さを下げて挑戦していただいた。難易度は、40cm両脚<両脚30cm<両脚20cm<両脚10cm<片脚40cm<片脚30cm<片脚20cm<片脚10cmであり、片脚40cmで立ち上がれないとロコモ度1、両脚20cmで立ち上がれないとロコモ度2、両脚30cmで立ち



図2.2 立ち上がりテストの実際1



図2.3 立ち上がりテストの実際2



図2.4 立ち上がりテストの実際3



図2.5 立ち上がりテストの実際4

れば、両脚で立ち上がっていただき、30cm、20cm、10cmと高さを下げて挑戦していただいた。難易度は、40cm両脚<両脚30cm<両脚20cm<両脚10cm<片脚40cm<片脚30cm<片脚20cm<片脚10cmであり、片脚40cmで立ち上がれないとロコモ度1、両脚20cmで立ち上がれないとロコモ度2、両脚30cmで立ち

上がれないとロコモ度3となる。

続いて、2ステップテストを実施した（図2.6、2.7）。歩幅を測定することで、下肢の筋力・バランス能力・柔軟性などを含めた歩行能力を総合的に評価するものである。事前にラインテープを4m程度引き、10cm毎に印を付けておいた。スタートラインで両足のつま先を合わせていただき、できる限り大股で2歩歩き、両足を揃えていただき、その場とスタート位置からの距離を読み取った。2回実施していただき、良かった方の記録を採用した。2歩幅（cm）÷身長（cm）＝2ステップ値（x）とし、 $1.1 \leq x < 1.3$ であるとロコモ度1、 $10.9 \leq x < 1.1x < 0.9$ であるとロコモ度2、 $x < 0.9$ であるとロコモ度3となる。



図2.6 2ステップテストの実際1



図2.7 2ステップテストの実際2

ロコモ25、立ち上がりテスト、2ステップテストを終えたらそれぞれのテスト結果を基にロコモ度を判定した（図2.8）。最も悪いロコモ度がイベント参加者のロコモ度となる。現在のロコモ度をイベント参加者にフィードバックして（図2.9）、ロコモティブシンドロームに該当する場合、その改善策として、簡単な筋力トレーニングとして、①片脚立ち、②スクワット、を紹介した。片脚立ちは、テーブルなどにつかまって、片脚を上げ、1分間保持することを左右で1分間として、1日3セットを目安に実施することである。スクワットは、お尻を後ろに引くようにして、ゆっくりと膝を曲げ、ゆっくりと元に戻る動作を5～6回を1セットとして、1日3セットを目安に実施することである。



図2.8 ロコモ度の判定



図2.9 フィードバックの実際

3. 参加学生の感想

3.1 経営学部マネジメント総合学科3年 塚崎杏

私は健康イベントに参加して、生涯に亘って運動をすることの大切さを感じた。なぜなら、身体を動かすことができれば、自分のやりたいことを好きにだけすることができ、身体も心も幸せになれるからだ。ロコモ度を診断する項目の一つに立ち上がりテストというものがある。日々の生活の中で座ったり立ったりする場面は必ずあるため、誰でもできると思っていた。しかし、実際にイベントで行ってみると、想像していたよりも立ち上がることができない人が多かった。運動器の障害により、移動が制限され日々の活動範囲が狭くなってしまふことは、生活の質を低下させる1つの要因になってしまうと思う。その結果、人や地域とコミュニケーションを取る機会も減ってしまい、精神面での幸せも欠けてしまう。これらは、ロコモティブシンドロームなどの言葉を知ったり、運動の大切さを実感したりすることで、改善することができる。しかし、障害のある人やヤングケアラーなど運動をしたくてもできない人や、ロコモティブシンドロームという言葉自体を知らない人もたくさんいる。今後は、そのような人たちへ向けて、運動する環境を整えたり、発信したりしていきたい。そして、誰もが生涯に亘って運動を実施し、健康寿命を延ばすことや、誰もが幸せを感じることができる社会の実現へとつなげたい。

3.2 経営学部マネジメント総合学科3年 山田晃也

この健康イベントには、ロコモティブシンドロームの認知度ってどのくらいなのだろうか、運動不足の人ってどのくらいいるのだろうかというのを数値ではなく、実際に自分の目で確認してみたいという気持ちと、多くの人に運動の重要性を伝えるって面白そうというシンプルな興味本位で参加しました。実際に参加してみて、まず、呼び込みが大変だと感じました。普通に生活している人に「ロコモティブシンドロームについての簡単な診断をしています」と言っても、意味がわからなくてスルーしていく人が多く、そもそも受けて貰えないという状況が続きました。そこで、「5分で終わる簡単な運動不足についての調査をしています」などわかりやすい言葉に変えて、興味を持ってもらえるように工夫をしました。それから人手が足らなくなるほど多くの人に参加してもらうことができ、達成感を得られました。健康イベントを通して、意外と運動不足の人が多くいることがわかったため、自分の関わる範囲の人だけでもロコモティブシンドロームにならないように、運動の意識向上を図ろうと思いました。

3.3 経営学部マネジメント総合学科3年 矢嶋涼

まずこのイベントに参加した動機は、イベントの流れが明確でロコモティブシンドロームについて色々ゼミで教わったので実際に参加してみたいと興味を持ったから。イベントでは、ロコモ運動の流れを説明したり、参加者との交流があったがコミュニケーションをとるのは得意だったのでとても有意義にイベントを進行することができたと思う。当日は朝から夕方程度まで活動していた。朝はイオンに買い物等をしに目的を持ったお客さんが多かったため参加率が悪かったが、昼前くらいになると

ブースに寄ってくれる方が増えてきて、時間帯によっては少し待ち時間が出るくらいには賑わっていた。参加して大変だったことは、一度の説明で理解することが難しい方に対して丁寧にかつ、後がつかえないよう迅速に対応することが少しばかり大変だったと思う。バイトでも同じように接客業をしているが、今回のイベントに参加してより接客とはなにかを学べたような気もする。他にもロコモ運動が見た目に反してとても良くできているような方がいたり、動けそうなお父さんが実は全然ダメだったりして、今回のイベントをすることには意味があるということがわかった。

3.4 経営学部マネジメント総合学科3年 勝見大也

まず参加した動機として、石倉先生が研究しているロコモティブシンドロームを深く知りたいと思ったのと、一般の方がロコモティブシンドロームのトレーニングをやって、どんな反応をしてくれるのか知りたかったからです。

実際に参加してみて、頭でわかっているでもそれを正確に誰でも理解できるような言葉で伝えるのが難しかったです。言語化は様々な場面で重要なので、健康イベントを通して難しかったけど、少しずつ身についたかなと思います。またコミュニケーション能力も身につきました。一般の方達とただ関わるだけでなく、楽しくコミュニケーションを取れたので良かったと思います。

そこから見えた自分の課題もありました。どう伝えれば伝わりやすいかや楽しんでくれるかを人によって変えるべきだったと思います。全員に同じような説明をしていたので、今後イベントだけでなく普段の生活から気をつけていきたいと思います。

最後に、感想としてロコモティブシンドロームについて石倉先生の授業やイベントをするまであまり知らなかったのが、深く知れてよかったです。また、この活動を今後活かして行ければいいなと思いました。

3.5 経営学部マネジメント総合学科3年 川上優翔

健康イベントに参加して様々な学びを得ることができた。私がこのイベントに参加しようと思ったきっかけは普段関われないような人たちとかかわり自分を成長させたいと考えたからだ。普段の生活では関われない年齢層の人と関わることで将来社会に出たときのコミュニケーションが取りやすくなるのではないかと考えこのイベントに参加をした。大変だったこととして幼稚園の代から高齢者まで幅広い年齢層を相手にするに当たってその人に合ったコミュニケーションを取ることが大変だったと考える。また自分の頭ではわかっているでも他人に教える難しさも実感した。教えるに当たってもっと深い知識が大切でアウトプットの練習が必要であるなと考えた。身についたこととしては接客をする時にはやはり笑顔や声のトーンが大切であると言ったところだ。この一日を通し将来に向けてさらにコミュニケーション能力を磨かなければならないなと感じたためアルバイトやイベントを通し様々な人と関わっていきたく考える。

3.6 経営学部マネジメント総合学科3年 小野澤樹

今回の健康イベント活動に私が参加した動機は、卒業論文で使うデータの収集と、このような健康イベントに興味があったので参加しました。私が2日間参加してみて大変だったことは、1日目にど

う動いたら参加者に伝わりやすいか考えることと、思ったよりも参加してくださる方が多く、休んでいる暇がないくらい大変だったのですが、参加してくださった方々との会話やロコモ度テストの結果などを見ることができてとても楽しかったです。私は人前で説明したりすることが苦手だったのですが、今回の健康イベントを通して人前で話すことに慣れた気がするのと、コミュニケーション能力が身に付いたと思います。

今回のイベントを通しての課題としては、人と話すときに相手の目を見て話すことと、緊張すると話すスピードが早くなってしまふのが課題だと感じました。今後は自分の課題を解決できるようにするのと、ロコモティブシンドロームについて調べ、イベントで収集したデータを元に卒業論文を進めていくのを頑張りたいです。

3.7 経営学部マネジメント総合学科3年 和智弦汰

事前に石倉ゼミで、ロコモ診断を行い、私たち大学生は、ロコモ診断は、いい結果が出たが、イオンとかに買い物に来ている人たちのロコモ診断がどのくらいか気になり、参加しました。

私は、人前であまりは、話すのは苦手で午前中とても苦勞したが、だんだんと慣れていき、午後には、地域の方と話せるようになっていった。実際に行い人と話すこと以外にも、診断結果を計算するのが、とても難しく、何回か間違え計算を最初からになったりして、とても大変でした。ただ人と話したりして、今コロナで、運動をしていなかった人がロコモ診断で悪い傾向があり、自分も最近運動する傾向が減ってしまったので、運動をしていかないとと思いました。とてもいい経験になったので、またそういった機会があったら参加したいです。

3.8 経営学部マネジメント総合学科3年 富徳

很荣幸能在石倉老师的带领下参加这次活动，实践方面给了我很大的启发，第一次接触这样的调查让我从中汲取到了经验，原来一次活动需要准备这么多步骤才能完成。以前都是作为旁观者或者体验者不知准备的不容易。以及动员大家，需要准备很长时间，我从中学到的一定对我以后的工作有帮助。我是一名留学生，因为日语不同于其他日本同学流利，老师给了我鼓励，同学给予了我帮助。我感受到团队协作的重要性，也感受到了日本同学的友好。这这次的活动，让我受益匪浅。也会成为我人生中难忘的实践经历。

石倉先生の指導のもと、このイベントに参加させていただきラッキーに思います。実践的な面で多くのヒントを得ました。このような調査に初めて触れて大変勉強になりました。イベントを完了するには非常に多くの手順が必要です。以前は、傍観者または経験者として準備を整えるのは簡単ではありませんでした。全員を動員するだけでなく準備にも時間がかかりますが、そこで学んだことは今後の仕事に必ず役立ちます。私は留学生ですが、他の日本人学生と違って日本語が上手ではないので、先生が励ましてくれたり、クラスメートが助けてくれたりしました。チームワークの大切さと日本人クラスメートのフレンドリーさを感じました。この活動は私にとってとても役に立ちました。それは私の人生において忘れられない実践的な経験となるでしょう。

4. おわりに

イベント参加者のロコモティブシンドロームに対する認識の向上については、統計を取得していなかったものの、下記のような感想などが多く聞かれ、ロコモティブシンドロームの認識向上や運動・身体活動の必要性についての理解向上に寄与したものと推察される。

- ・簡単そうに見えたけど、意外と片脚で立ち上がるのが難しかった。
- ・体力の衰えを感じた。
- ・運動しなくちゃ！
- ・ロコモって知らなかったけど、気を付けようと思った。
- ・家族で挑戦しました。お父さん、頑張っ！(子供)
- ・昨年に引き続き来ました。

超高齢社会の課題であるロコモティブシンドローム、また運動や身体活動の重要性について、ゼミ生がこの健康イベントのフィールドワークを通して深い理解を得たことを実感している。実際に高齢者のみならず、中年世代のイベント参加者の中でも、低い台から立ち上がることができない参加者も散見され、中高年者の体力が低下している様子を目の当たりにし、日頃からの運動・身体活動の重要性を再認識していたようである。また、イベントに参加してもらうためには、ただ座って待っていても集客できず、どのようにしたら参加していただけるかについて、ゼミ生達が声掛けや説明方法などを工夫しながら、参加者を引きこみ、参加者数を増加させることができるようになっていった。多くのゼミ生が、この様にコミュニケーションを1日の中で向上させ、コミュニケーションスキルの重要性に気づき成長を実感していた。

今後もゼミ活動の中で、このような産学連携や地域連携を通じて、社会人基礎力を養成しながら、地域住民の健康を増進するWin-Winな関係を築く場を創出していくことが求められる。



図4.1 イベント後の集合写真1



図4.2 イベント後の集合写真2

謝辞

本イベントにご参加いただき、ご協力いただいた皆様に感謝の意を表します。また、本イベントを企画立案から全日に渡りサポートいただいた城西大学広報課の鈴木課長、堀江様、平井様に深謝申し上げます。

参考文献

- 1) 中村耕三 (2008) 「超高齢社会とロコモティブシンドローム」『日整会誌』 82 (1), 1-2.
- 2) 中村耕三 (2012) 「ロコモティブシンドローム (運動器症候群)」『日老医誌』 49, 393-401.
- 3) 厚生労働省 『2019年国民生活基礎調査の概況』 (<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/06.pdf>) (2024年1月12日).
- 4) 厚生労働省 『健康日本21 (第2次) 目標項目一覧』 (<https://www.nibiohn.go.jp/eiken/kenkounippon21/kenkounippon21/mokuhyou.html>) (2024年1月12日).
- 5) 日本整形外科学会 (2013) 「「ロコモ度テスト」を発表」『日本整形外科学会』 1-6.
- 6) Noriko Yoshimura, Shigeyuki Muraki, Kozo Nakamura, Sakae Tanaka (2017) Epidemiology of the locomotive syndrome: The research on osteoarthritis/osteoporosis against disability study 2005-2015. *Mod Rheumatol.*, 27, 1-7.

【地域教育実践報告】

2023年における城西大学経営学部石井ゼミナールの活動

相川達哉*・新井優也*・荒川大介*・蘭晃人*・岩田佳佑*・倉田魁人*
 高星悠斗*・中村祐葵*・萩原康陽*・畠山大地*・平井翔太*・野口祐貴*
 石井龍太**

キーワード：ローカルヒーロー、アクティブラーニング

1. はじめに

本稿で取り上げるのは、石井ゼミ第8世代ヒーローとなる『ディフロンターJ』の、ゼミ生から見た運営録である。ローカルヒーローを用いたゼミ運営も、2023年で9年目となった。2022年度来在籍している学生たちは、過去の石井ゼミの中で最多の17名を数え、しかもその半数近くが2年次以前に石井ゼミを経験していた。それだけ手練れたメンバーで運営できた上、コロナ禍に対する社会の反応も（良し悪しは兎も角として）低減し、ヒーローショーの主たる場である地域の祭事は2019年以前の状況にほぼ戻って来た。加えてコロナ禍で祭事が減少した際に、城西大学の施設「北坂戸にぎわいサロン」を活用した自主イベントも継続出来、ポストコロナ禍のヒーローショーを作り上げていく時期ともなった。なお本稿のタイトルは2023年の活動となっているが、実際には『ディフロンターJ』が始動した2022年末の活動も一部含んで報告する。コロナ5類移行の前に当たることから、コロナ禍前にキックオフステージとしていた祭事は中止となり、どうするかは苦勞することとなった。本稿はイベント運営からみたコロナ禍の推移を映す内容ともなっている。

例年、過去にない挑戦を学生たちに要求して来たが、今回は地球環境を悪化させる強力な宇宙人という「個」の悪に対し、地球防衛のため立ち上がった若者たちという「群」が対峙する構図となった。これはメジャー・ローカル含めていわゆるヒーローものの典型とは逆となり、本作品の根幹をなす特色となっている。また弱い人間が協力して強敵に挑むドラマあり、他の天体に流れ着いた宇宙人の悲哀あり、戦いに巻き込まれた結果ヒーローの敵となる地球人のドラマあり、といった具合に、単純な善悪で片づけられない生存競争を思わせる雰囲気となり、全10話とも重厚に展開することとなった。子供には分からないのではないかと不安になりもしたが、実際の反応を見る限りそれは杞憂であった。子供は子供向けに作られたものを見せられるより、大人が本気になったものを見せた方が食いつく、というのが本作を通じて改めて抱いた結論である。

また2022年から新たな試みとして、指導教員の宮古島発掘調査とセットにした、学年を超えた出張ショーを実施した。前号では2022年度生の所見が述べられているので、比べてお読み頂くとイベント

* 城西大学経営学部4年生

** 城西大学経営学部非常勤講師

の様子が複数の視点から立体的に再現できるであろう。更に指導教官の本務校である武蔵大学の学生とのコラボイベントも実施した。地域を超えた活動や、世代間、大学間交流といった試みには手ごたえがあり、今後も継続する予定である。

なお具体的な執筆分担は、文章の末尾に () で記載した。(石井)

2. 活動内容

2-1. 狩俣子供会 (2022年9月17日 沖縄県宮古島市 狩俣集落センター)

我々が運営しているローカルヒーロー『ディフロンターJ』は、地元である坂戸市や坂戸市の近隣など埼玉県を中心に活動している。しかしながらさらに遠方の地域で活動する場合もあり、今回は沖縄県の宮古島市で行った狩俣地区の子供会のコラボヒーローショーについて報告する。

2022年9月13日から9月20日の8日間、石井先生とゼミ生の有志が沖縄県宮古島市にあるクバカ城跡で調査を行いつつヒーローショーを行った。通常は各学年での活動が多いが今回は石井ゼミナールに所属している二年生から四年生が有志として一名ずつ参加し、学年を越えて活動を行った。遺跡の調査は測量や測量を円滑に行うための除草作業を数日にかけて実施した。宮古島市の暑さや不慣れな遺跡調査など普段と異なる点も多かったが問題なく、作業を行った。今回の遺跡の調査により宮古島で形成された独自の文化や風土を直接、肌で感じることができ、学際的な学びを得ることができた。

日中はクバカ城跡の調査を行ったが夕方は合間を縫い、ヒーローショーの練習を行った。今回のヒーローショーは学年や人数など普段と異なることが多く、入念な練習を行った。そして9月17日の狩俣集落の子供会で大勢の子供たちの前でヒーローショーを披露した。熱烈な視線や声援を受けながらヒーローショーを上演し、終了後は握手や写真を求められることもあり、子供たちの思い出に残ったようで非常にやり甲斐を感じた。また3年次の夏まで活動に参加していた『高麗戦士トライ』はキャラクターの配役が持ち回りのため、各自が専門に担当するヒーローはなかったが、今回のコラボヒーローショーから各自で担当する自前のヒーローとなった。加えて私たちが一から作品の概要やキャラクターを企画した『ディフロンターJ』として記念すべき初ステージでもあったため、非常に印象深い。

さらに宮古島市の新聞社から取材を受け、翌朝の新聞の一面となった。今回のコラボヒーロ



図2.1 狩俣子供会でのヒーローショー

ーショーでは地域活性化の選択肢としてローカルヒーローのコンテンツ力や発信力を改めて認識し、年齢や性別を超え、子供たちの交流の一助としての役割を無事に果たすことができた。(野口)

2-2. 北坂戸団地祭 (2022年11月3日 北坂戸団地)

2022年11月3日、北坂戸団地祭に参加し、4年生のヒーロー『ディフロンターJ』全体の初披露目となるヒーローショー第1話を上演した。第1話の公演を成功させるため、初めてのレコーディングに戸惑い苦戦したり、殺陣を自分達で考えたりする事も難しかったが、通し稽古や練習をして、準備を入念に行って臨む最初の公演は、キャラを演じるゼミメンバーも裏方のゼミメンバーもとても緊張していて、不安混じりの実施となった。

本番が始まり、各自練習してきた成果を出し、トラブルも少々起きるも無事に終わることができた。公演後は、地域の子供達だけでなく、大人の方々とも写真撮影を行うなどの交流も行った。反省点は残ったものの、子供達を楽しませる事が出来ていたことは地域貢献に繋がったのではないだろうか。ゼミメンバーとしても、初の自分達の公演を終えて、次に繋がるものを得て、成長できた1日となった。(畠山)



図2.2 北坂戸団地祭でのヒーローショー
1. 集合写真の様子 2. チラシ配りの様子

2-3. 華麗なるカレー博 (2022年11月19日 イオンタウンふじみ野)

2022年11月19日、埼玉県ふじみ野市のイオンタウンふじみ野にて、「華麗なるカレー博」が開催された。日本全国のご当地カレーが一堂に会する一大イベントに、多くの来場者が訪れており、カレー博はとても楽しげな雰囲気であった。そんな中、イベントの一環として、城西大学石井ゼミナールの制作したローカルヒーロー『ディフロンターJ』第2話「狂気の侵略者と孤高の戦士」を上演させていただいた。我々のショーの前には、先輩ヒーローである『レベルJ』の第8話「嘘と真実の境目」が上演された。我々も観覧し、先輩方のハイクオリティなショーを観覧し、自身のショーの向上に役立つ貴重な機会となった。

観客は、先輩方のショーに引き続き見てくれていた子供達が多く、最前列に座り、真剣な眼差しでショーを観覧してくれた。第2話では、『ディフロンターJ』内の部隊である、「輪廻部隊」のヒーロー 輪廻・チェム・フェルコンの三名の初舞台となった。ローカルヒーローショーという慣れない活

動ながらも、リハーサルを重ね、よい舞台に出来たと感じる。反省点としては、まだ感覚を掴んでおらず、動きが少ない、決めシーンでバランスを崩してしまった、等が挙げられる。老若男女問わず、地域の人々に喜んでいただけて、ゼミナールのメインの目的である「地域貢献」と呼べる活動をおこなうことができた。反省点を見直し、改善するといった行動は、社会人となっても重要であると言える。そういったことが学べたという点からみても、実りのあるゼミナール活動にできたと言えるであろう。(萩原)



図2.3 「華麗なるカレー博」でのステージショー

2-4. 城西大学ローカルヒーローステージ (2023年2月11日 北坂戸にぎわいサロン)

2023年2月11日、北坂戸にぎわいサロンにてヒーローショーが行われた。北坂戸駅から徒歩4分にある城西大学管轄の建物にて、石井ゼミは2年生の『高麗戦士トライ』、4年生の『レベルJ』等のショー後に我々3年生による『ディフロンターJ』の第3話を披露した。まだ2023年に出来て日が浅



いヒーローであるが、会場内には子供大人ともに集まり、最後の写真撮影会にも子供達が集まる大成功を収めることができた。

まだショーが始まって間もなく、予期せぬトラブルが起こった。殺陣中に演者が転倒してしまったり (図2.4.1)、ベルトがはずれてしまったりした (図2.4.2)。着ぐるみの着こなしチェックや実際のステージを歩



図2.4 城西大学ローカルヒーローステージでのヒーローショー
1. 2. ヒーローショー中のアクシデントの様子 3. 集合写真

いて床質を調べるべきだったという反省点があるが、まだ最初期の段階でのトラブルに対しても冷静にアドリブを挟んでショーを続けることができた。これから先地球の未来を守る『ディフロンターJ』の活躍が期待される演技であった。

ショーの後には写真撮影会がおこなわれた(図2.4.3)。まだ始まって1年にも満たない新しいヒーローであったが子供達は写真を撮りに集まってきて、今後の活躍に期待と自信を持つことができる結果となった。(岩田)

2-5. 城西大学ローカルヒーローステージ(2023年5月27日 北坂戸にぎわいサロン)

2023年5月27日、埼玉県坂戸市の城西大学北坂戸にぎわいサロンにて「ローカルヒーローステージ」が開催された。このイベントには我々城西大学経営学部4年生が運営する「ディフロンターJ」と3年生が運営する「神霊戦士ゴーバ」の2つのヒーローが登場し、さらに城西大学水田美術館も参加して、会場に訪れた多くの子どもたちを楽しませることができた。



1



2



3

図2.5 城西大学ローカルヒーローステージでのヒーローショー
1. ステージショーの様子 2. ゲーム大会の様子
3. 水田美術館による浮世絵クイズ大会の様子

当日は、まず3年生が「神霊戦士ゴーバ」第3話『新たな敵、新たな仲間』を上演、その後4年生および城西大学水田美術館によるゲーム大会、次に4年生による「ディフロンターJ」第4話『追憶、そして清算～後編～』を上演、最後に水田美術館による浮世絵版画の摺り体験という流れだった。ゲーム大会にはゲストとして埼玉のローカルヒーロー『英雄収集ツインジャー』さんが駆けつけてくださり、ととにもぎやかに行われた。

今回のイベントから、我々4年生がタイムスケジュールを自主的に組み行動することとなり、イベント開催中出番が無い時に、自分達でアイデアを出したグッズ販売や、ヒーローとのチェキ撮影などを行った。様々な課題も出たので次回以降に繋げる良い機会にもなった。本題のヒーローショーではステージと客席がとても近かったが、大きなトラブルや事故が無く終わり、観客の皆様も楽しんで下さったのでとても良かった。(倉田)

2-6. 坂戸七夕まつり (2023年7月15日 坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場)

2023年7月15日、坂戸七夕まつりが坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場にて開催された。坂戸七夕まつりは、数々の屋台やダンス、よさこい、ショーなど沢山のイベントがあり、幅広い年代の方が楽しめるビッグイベントだ。夏休みということもあり、多くの子供達がイベントを楽しんでいた。

この坂戸七夕まつりで私たちは『ディフロンターJ』の第5話を公演した。この日は酷暑でコンディション不良だったことや、普段より多くの観客がいる中での公演だったためより緊張感が感じられたが、練習の成果を存分に発揮し、集まっていた多くのの方の前で無事にショーを遂行することができた。

このイベントでは、大人の方は勿論のこと、子供達が多く集まっていて、私たちの公演によって子供たちをワクワクさせ、楽しませることができたことが、この坂戸七夕まつりに参加して良かったと思える点である。控室から会場に行く際、お客さんのすぐ近くを通過して移動するのだが、そこで注目を一斉に集め、盛り上げることができたのが良かったと感じる。

また、酷暑の影響で体調不良で一人が公演に出られなくなるなどのアクシデントがあったが、このことから、何が起きてもその場で瞬時に判断し、協力して物事を進めていくことの重要性を学ぶことができた。

このイベントを通して、観に来ていただいた方々を楽しませ、喜んでいただけたことで自分たちの活動にやりがいを感じることができ、地域に貢献できたことに充実感を感じることができた。(荒川)



1



2

図2.6 坂戸七夕まつりでのヒーローショー

2-7. 北坂戸イーストフェスin 芦山公園 (2023年7月29日 坂戸市芦山公園)

2023年7月29日に、埼玉県坂戸市芦山町にある芦山公園で「北坂戸イーストフェスin 芦山公園」が開催された。「北坂戸イーストフェスin 芦山公園」は、北坂戸けやき通り商栄会や芦山町町内会の主催で開催された人気グルメ20店以上が集結したフェスである。私たち『ディフロンターJ』だけで

なく、地元のバンドやダンスグループ、よさこいなどのステージショーが行われた。

私たち4年生の作品である『ディフロンターJ』は第6話を公演した。また、3年生の作品である『神霊戦士ゴバ』の第4話の公演も行われた。この日は真夏の炎天下の中、出演者全員の体力と忍耐を消耗したと思われる。しかし、そうした状況でも最後までヒーローショーをやり遂げ、子供連れのご家族や地元住民の方楽しんでいただけたと思う。

良かった点は、暑い中でも演者は最後まで子供たちや地元住民に対して対応をしっかりやれていたことである。写真撮影などの公演以外での対応が出来ていた。公演も大切だがショーを楽しんでくれた子供たちや地元住民の方との接することが最も大事なことだと思う。また、殺陣のシーンでは練習を重ね、ゼミ生で話し合いをしてきたので本番ではミスが目立たなかったことも良かったと思われる。



1



2



3

図2.7 北坂戸イーストフェスでのヒーローショー
1. ステージショーの様子 2. 写真撮影とグッズ販売の様子 3. グリーティングの様子

反省点としては、練習していたときのテントからステージまでの距離が違い、登場シーンのところで遅くなってしまったことである。どんな状況でも全てが練習通りとは限らず、臨機応変に対応しなくてはならないことが反省点だと感じた。

「北坂戸イーストフェスin 芦山公園」でのヒーローショーでは、コロナが明けてチームが一丸となって祭りを盛り上げるための団結力を学ぶことができた。また、私たちだけでなく、他の団体やグループによる特設ステージによる公演もあり地域のため貢献されていた。ゼミナールを超えた団体と

の協力によって地域貢献活動に携われたことが自分たちにとって良い体験になった。社会人になっても外部と協力をしていくことは、将来大切なことであり学ぶべきことであると感じた。(相川)

2-8. 第61回日本SF大会 (2023年8月5日埼玉県さいたま市浦和区 コムナーレ10F 浦和コミュニティセンター)

第61回日本SF大会は2023年8月5日(土)、埼玉県さいたま市浦和区の公共施設コムナーレ10階にある浦和コミュニティセンターにて開催された。日本SF大会は1962年より長く続く企画であり、年に1回開催される。大会という名目ではあるがその実態はSFファンが集まるお祭りのようなものであり、様々な分野の企画持ち込みからなる。



図2.8 日本SF大会でのヒーローショー
1. 2. ステージショーの様子 3. グッズ販売の様子

我々は石井ゼミナールで「ローカルヒーロー」を通じた地域貢献と活性化を目指しており、本大会もローカルヒーローとしての企画参加となった。本企画の参加者は総監督者の石井先生と4年生と3年生、そして武蔵大学からサポート要員となり、学年どころか異なる大学との共同かつ少数人数での参加となった。ステージが公共施設のために本番と同じ環境での練習ができず、ステージの確認が大会当日となったものの、ステージショーはつつがなく終えることができた。物販コーナーも開いており我々石井ゼミもオリジナルグッズの販売を行った。

日本SF大会に参加してよかったと思う点は、今回のシナリオは本大会のためのものであるため、普段ゼミで演じているキャラとは異なるキャラを演じられたことである。私は普段ヒーローを演じて

いるために、純粋な悪役を演じるのは存外楽しいものであった。他にもローカルヒーローの主要ターゲットは子供のため、大人を相手にやる活動というのは新鮮味もありつつ、身を引き締められる体験になったのだと考える。(中村)

2-9. 坂戸竹灯の夕べin泉町桜堤公園 (2023年10月8日 埼玉県坂戸市泉町)

2023年10月8日に、埼玉県坂戸市泉町にある泉町桜堤公園で「坂戸竹灯の夕べ」が開催された。本イベントは、2020年から新型コロナウイルス感染症の影響で延期を余儀なくされ、3年ぶりに開催できたということで、運営スタッフやその他の関係者も相当気合が入っていた。当日も多くの人で賑わっており、スタッフの方々も一安心しただろう。

私たちが本イベントに参加させていただき、『ディフロンターJ』第7話を公演した。初秋ということもあり、過ごしやすい気温だったため、老若男女問わず、とても多くのお客さんが観に来てくれた。

会場はステージが広く、地面も動きやすい芝生だったので、演者一人一人がのびのびと自分の演技をすることができたと思う。また、『ディフロンターJ』のストーリーも佳境であり、1話や2話と比べてみても、演者の動きにより磨きがかかっていた回だった。ただ、待機場所とステージまでの距離がかなり離れていたため、登場シーンが遅れてしまっていた演者が何人かいたことが反省点である。登場が遅くてもダメ、早くてもダメ、この登場のタイミングが今年1年、私たちを苦しめたもののひとつであった。

このイベントを通し、自分たちの苦手な部分を知ることができ、最終回に向けてより一層練度を高めていかなければならないと感じる回だった。(高星)

2-10. 毛呂山産業まつり (2023年11月19日 毛呂山町毛呂山総合公園)

埼玉県毛呂山町にある毛呂山総合公園にて行われた、第30回毛呂山産業まつりに私たち石井ゼミは参加をした。大型トラックの荷台が利用された本イベントでは様々な団体が参加しており、特設ステージでの催し物や屋台が出展されていた。石井ゼミでは4年生の作品である『ディフロンターJ』第8話を特設ステージで披露した。



1



2

図2.9 坂戸竹灯の夕べでのヒーローショー
1. ステージショーの様子
2. 会場の様子

このイベントでうまくいった点は、事前にチラシ配りをしたことでありと考える。普段は坂戸市を中心に活動をしている為、私たち石井ゼミのヒーローを知らない現地の方々に向け、ショーが始まる前と終わった後にグリーティング（練り歩き）を行った。そして会場に疎らにいた子供たちを中心にチラシを配り、観覧してもらえようとお声掛けを行った。結果、ショーが始まる時には大人も子供も関係なくたくさんの方が観客席を埋め尽くしてくれた。

ショーの中で特に盛り上がりを見せた所は殺陣のシーンであった。チラシを見ながらお気に入りのヒーローたちの名前を応援する子供たちの声が会場を大いに盛り上げたのだと感じた。ショーが始まる前にヒーロー達の詳細が書かれたチラシを配ることで、子供たちが推しのヒーローを探ることができ、応援に力を入れることができた為盛り上がりを見せたのではないかと私は感じた。ショーが終わった後の写真撮影でも多くの人に撮っていただき、集合写真撮影後に個人で撮影をしに来てくれた方々の中にも、ヒーローの名前を覚えてくれていた方がおり、ショーとして成功を取めたのではないかとと言える。私たち一同もとても達成感の得られたイベントであったと思える。

反省すべき点は三段あったステージをあまり活用できなかったことである。練習時にステージの1番下を利用することを意識していなかった為、本番当日に急遽各々の登場するシーンや移動する時などを変更して行った。緊急で変更したこともあり、三段あるステージという特徴をあまり生かせずに終わらせてしまったという反省点があった。

最後に本イベント又ゼミ活動を通して、チームで一つの大きな作品を作り上げることの大変さやショーが終わった後の達成感を体験することができ、また自分達で考えて行動する自主性を身につけられたのではないかと考える。(蘭)

2-11. 坂戸イルミネーション点灯式 (2023年12月3日 坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場)

坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場で行われる坂戸市毎年恒例のクリスマスのイルミネーション点灯式で、私たち4年生は『ディフロンターJ』の第9話を披露した。最終回の前の話であって内容も加速しており、初見の方には理解しにくい部分が多かったが、殺陣の迫力や演技力のクオリティが高かったため、会場は大きな声援と共に盛り上がりを見せていた。



1



2

図2.10 毛呂山産業まつりでのヒーローショー

1. ステージショーの様子

2. 集合写真の様子

良かった点は、練習の期間が2週間ほどしかなく、殺陣や演技の修正点がいくつかあり、良いステージショーになるか不安だったが、当日は大きなミスもなく良いステージショーになったと思えた。また、子どもから大人まで色々な層のお客さんたちが観覧をしにきてくれて、多くの人たちを楽しませることができ、大盛り上がりなイベントとなった。

反省すべき点は、点灯式というのもあって、ショーの時間帯が遅く、暗い中でのステージショーとなった。視界も悪く、細かなミスが多く感じた。どんなイレギュラーな場面でも対応できるように対策をしていきたいと思った。

ゼミ活動を通して、チームでひとつのことを成し遂げる大変さや成し遂げたことで得られる達成感を体験することができた。この経験したことをバネに社会に出て活躍できる人間になりたい。(平井)



1



2

図2.11 坂戸市イルミネーション点灯式でのヒーローショー
1. ステージショーの様子 2. 集合写真の様子

2-12. 坂戸児童センタークリスマス会 (2023年12月22日 坂戸児童センター)

2023年12月22日、坂戸児童センターのクリスマス会が行われた。我々、石井ゼミナールは他の団体とともに当イベントに参加し、『ディフロンターJ』第10話「諦めない心」(最終話)』を披露した。このイベントには昨年も参加させていただいており、事前に石井先生から伺っていた通り、会場は楽しみにしてくれているお客さんで埋め尽くされていた。児童センターということで、客席は子どもたちが多く、過去最高とも言える集客であったと思われる。

ステージショーにおいては苦勞した点や反省点も多くあった。第9話の公演を12月頭に行ったことにより、第10話に向けての練習時間を十分に確保することができず、その短い期間の中でレコーディングから殺陣作り、練習までを行わなくてはならなかった。そのため演者の演技に不安が残ったままでのステージであったが、本番では目立ったミスは無く無事に公演を終えることができた。これはいままでのヒーローショーでの経験を活かしたもので、ここまで自分たちが成長できたことに喜びを感じた。

ステージの後には、お菓子やクリスマスカードのプレゼント配りと、来場者の方々との写真撮影会が行われた。チラシやカードは盛況で全て配り終えることができた。プレゼントを貰ったり、一緒に

写真を撮ったりしてくれた方々の中には笑顔で嬉しそうの方も多く、子供たちに少しでも喜んでもらえる活動ができたことを感じたことで、3年次から行ってきた自分たちの活動に自信を持つことができた。今回のイベントに限ったことではなく、石井ゼミナールでの活動で経験したことは自分自身の成長に確かに繋がっていると思う。(新井)



1



2

図2.12 坂戸児童センタークリスマス会でのヒーローショー
1. ステージショーの様子 2. 集合写真の様子

【地域教育実践報告】

紀尾井町キャンパス周辺環境を活用した英語教育の試み

——地域と関わりながら「協創力」を養う——

三國信夫*

キーワード：地域連携、協創力、デザイン

1. はじめに

本稿は、短期大学の前期科目「接客英語Ⅰ」および後期科目「接客英語Ⅱ」における、地域と連携した英語教育活動について報告するものである。

「接客英語Ⅰ」および「接客英語Ⅱ」は、坂戸キャンパスと紀尾井町キャンパスのそれぞれで開講されているが、本稿では特に紀尾井町キャンパスにおける英語教育活動に着目して報告する。それは、短期大学において、坂戸キャンパス周辺地域の資源を活用した授業は多く見られているものの、一方で、紀尾井町キャンパス周辺地域の資源についてはその活用の報告も少なく、また活用そのものがまだ十分ではないと考えられるからである。

そもそも英語教育と地域連携というテーマでの報告や研究も、多くは存在しない。地域の文化を英語で紹介する活動はあっても、地域と関わりながら英語を学ぼうとする試みはまだマイナーであるといえよう。したがって、この授業報告が今後の短期大学のみならず城西大学全体での英語教育の広がりにわずかでも貢献できれば嬉しいと考えている。

また、本稿では、地域と連携した英語教育を目指すことと並行して、城西大学および城西短期大学の教育目標の大きな柱となった「協創力」をいかに育てていくかということへの試みも併せて記録しておきたいと考えている。

2. 地域と関わる英語教育

英語教育を地域との関わりで実施することは、大学や短期大学よりも小学校や中学校での授業実践が豊富に存在する。今年度の授業を開講するにあたり、地域資源を活用した英語教育にどのような取り組みがなされてきたのかを整理し、それらの取り組みを参考に紀尾井町キャンパスでどのような実践が可能かを模索した。

2.1 英語教育と地域資源の活用

地域資源を活用した英語教育の例として、小学校・中学校で活用されている「地域教材」が挙げられる。

* 短期大学准教授

従来の英語教材であると、学習指導要領の内容に即して編集されるという制限がある以上、どうしても内容が一般的・汎用的になってしまい、学習者の関心をひくことが難しい側面もあった。そこで、学習者の身近な地域的话题を英語教材に取り組みことによって学習者の関心を高め、効果的な英語学習に繋げようとする狙いで地域教材が活用され始めたのであった。また、地域教材を活用することは、学習者の地域に対する関心を高めるという効果も期待された。

具体的な例としては、例えば“Precious Stories of Saitama-ken”は埼玉県を代表する人物や地域の伝統文化、自然等を紹介した地域教材であり、190ページに86の物語が収録されている。また、「おらが群馬のおもてなし英語」は、最近群馬県において増加する外国人観光客に対応するための英語コミュニケーションを紹介する地域教材である。

このように、地域の偉人を紹介したりその魅力を発信したりする地域教材は、主に小学校・中学校の初学者向けの教材として少しずつ数を増やしていると言えよう。

ただ、こうした地域教材を使用した英語学習も、地域の情報を英語で学んだり発信したりすることが中心で、地域と関わるなかで英語を活用するという授業例はまだあまりないと言える。

2.2 紀尾井町キャンパスと英語教育



図2.1 紀尾井町周辺図（パンフレットより）

では、地域の情報を発信すること以上の英語教育をどのように展開できるだろうか。英語を使ってどのように地域と関わっていただけるだろうか。

前述した地域教材は、主に英語教員が作成したものであり、地域のことをその教材を通して生徒が学ぶ、という構成であった。身近な地域のテーマで英語を学び、さらに地域の理解を深めるといふ点では、それももちろん効果があると言えよう。

しかし、生徒（学生）がもっと自ら積極的に地域と関わることはできないだろうか。紀尾井町という地域に対して行動を起こすことで主体的に英語を学ぶことはできないだろうか。それが今年度の「接客英語」で考えた授業テーマであった。与えられた教材で地域について学ぶのではなく、自ら地域に出向いて行ってむしろ自分たちで教材を創り出すことができないだろうか、という狙い

であった。

紀尾井町キャンパスは、恵まれたことに、学生が自ら出かけて行くようなスポットは豊富にある。国会議事堂、最高裁判所、国会図書館、国立劇場、迎賓館などの国の主要施設だけでなく、企業や店舗もたくさんある。また、東京の中心部であることから、訪日外国人旅行者も多く街を歩いており、英語を使うチャンスの多さは坂戸キャンパスの比ではない。したがって、このような資源を学生が積極的に活用しながら英語を主体的に学ぶ機会を作ることができれば、受け身ではない新しい英語教育を生み出せるのではないかと考えた。

3. 英語教育×「協創力」×ディプロマポリシー

地域と関わりながら英語を学ぶことと並行して、短期大学の教育目標でもある「協創力」およびディプロマポリシーとの関係についても授業の狙いとして検討した。以下にその観点について整理したい。

3.1 英語教育と「協創力」の養成

「協創力」は、「周りの人と協力ができ、新しいものを創発できる力」として、城西大学・城西短期大学では、その力を育むことが大事な教育目標であるとされている。

紀尾井町キャンパス周辺の資源を活用しながら英語の教材を創り出す作業を、学生同士が協力しながら達成できれば、地域英語教育を通して「協創力」も養うことができるであろうと考えた。

どのようなモノを創り出せるかは、前期と後期のそれぞれの授業で、参加している学生同士が話し合うなかで決めてもらうこととし、協創の過程で自然と英語についても学んでいくことができるようにすることも授業の狙いと考えた。

3.2 英語教育とディプロマポリシーの達成

「協創力」の養成と共に、ディプロマポリシーの達成も授業に求められる大事な要素である。

城西短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシーでは、自立した社会人として求められる「人間力」を育むことが基本的学習成果とされている。この「人間力」は「前に踏み出す力」「考える力」「協力する力」で構成されているが、これらは2006年に経済産業省により提唱された「社会人基礎力」における「前に踏み出す力（Action）」「考え抜く力（Thinking）」「チームで働く力（Team Work）」に対応している。ここでいう社会人基礎力とは、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を指し、上記の「3つの能力」と「12の能力要素」で体系されたものである。

短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに掲げられた「人間力」を育てることが、そのまま社会人として求められる能力を身につけることになると言えるであろう。そこで大切になるのが、学生が実際に受講する授業においてこの「人間力」を構成する「3つの力」を具体的にどのように身につけるべきかということであり、筆者が担当する「接客英語Ⅰ」「接客英語Ⅱ」においてもその成果が求められるのである。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）】

ビジネス総合学科は、「自立した社会人として求められる人間力」を基本的学習成果と定めています。「人間力」とは、具体的には①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力です。

また本学科は、専門的学習成果を「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」と定めています。ビジネス総合学科は、学科の所定の単位を修得した人が、以下の能力を身につけていると判断し、短期大学士（ビジネス総

合)の学位を授与します。

- 前に踏み出す力
- 考える力
- 協力する力
- 職業人として活躍できる幅広い教養
- ビジネススキル

表3.1 城西短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシー

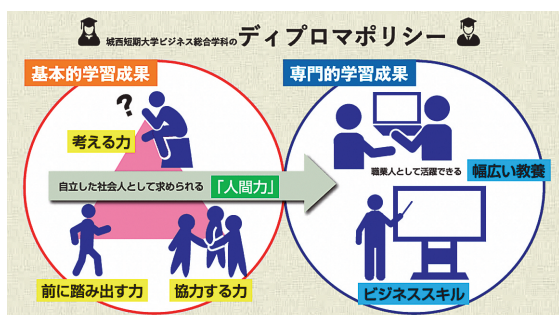


図3.1 城西短期大学ディプロマポリシー
(パンフレットより)

地域に飛び込んで英語を学んでいく過程で、学生同士が、それぞれの考えに基づいた自分の意見を伝え合いながら(考える力)、お互いの意見に耳を傾けながらも協力して(協力する力)、地域の人々と積極的に交流し(前に踏み出す力)、新しい価値を創造する力(協創力)を、この授業を通して育ててもらおうことを目指した。

以上の複数の視点を踏まえて、紀尾井町キャンパスで展開された2023年度の「接客英語Ⅰ」「接客英語Ⅱ」では、英語教育の新たな試みがなされた。

4. 2023年度前期「接客英語Ⅰ」

ここからは、実際に実施された授業を紹介したい。2023年度前期「接客英語Ⅰ」では、「キッチンカーの英語メニュー」を受講生全員で「協創」することを目指した。以下にその概要を説明したい。

4.1 授業の目標

前期シラバスは以下の通りであった。「接客英語」という名称からもわかるように、レストランや店舗での外国人客を相手にする英語表現を学ぶことが授業の主目的であった。

(1) 授業の概要

語学・基礎

(2) 授業の目的

訪日外国人観光客が急増する昨今、接客業においても外国人観光客への対応が迫られています。

この授業では、実際の接客場面でどのような英語表現を使用したら良いのか、具体的なシーンを想定しながら重要な英語表現を学んでいきます。

(3) 学習成果

就職後にも役に立つ英語が身につきます。

英語を通してコミュニケーション力が身につきます(①前に踏み出す力、③協力する力)。

接客英語を学ぶことで、就職活動の準備もできます（⑤ビジネススキル）。

（４）授業の到達目標

広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力（短大ディプロマポリシーの①）。

社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力（短大ディプロマポリシーの③）。

表4.1 前期「接客英語Ⅰ」シラバス

もともと「接客英語Ⅰ/Ⅱ」では、「英語を使うアクティビティ」を通して、社会に出てからも英語を使えるようにすることを目標にし、さまざまな英語活動に取り組んできたが、しかし、シラバス作成後に地域と関わる授業を展開すること、協創することの必要性を一層感じただため、授業の目標をシラバスから修正（加筆）し、①地域資源を活用して英語を学ぶこと、②受講生全員で「協創」すること、も目指すこととした。

シラバスに加えて地域との関わりや協創について目標を加えたことについては、最初の授業でその必要性とともに受講生に説明し、了承を得た。

4.2 授業の展開

授業は、下表のように実施された。順番に振り返ってみたい。なお、表中の◎は特に重視したもの、○は重視したものを示している。

	接客英語Ⅰ 授業内容	前	考	協
第1回	授業目標の提示、自己紹介	◎		
第2回	アイスブレイキングアクティビティ			◎
第3回	「協創力」を活かしたアクティビティについての話し合いと決定		○	◎
第4回	キッチンカーの店主との交渉とテーマの決定	◎	○	
第5回	英語メニューのデザイン		◎	○
第6回	デザインに基づいた撮影と取材		◎	○
第7回	プロトタイプver.1の完成		◎	○
第8回	プロトタイプをキッチンカーの店主に提示して意見を求める	◎		○
第9回	店主からのフィードバックをもとにポスター&チラシの修正	◎		○
第10回	プロトタイプver.2の完成		◎	○
第11回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第12回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第13回	英語メニューの完成、授業の振り返り		○	◎

表4.2 前期「接客英語Ⅰ」授業展開

4.2.1 授業のはじまり

授業は、「協創」作業を進めるためにも、グループワークを中心に実施した。そして、そのグルー

プワークを活発にするためにも、アイスブレイクとしてカードゲームを活用して、学生同士の距離を縮めることを最初の目標とした。第1回、第2回の授業は、そのために十分な時間を使い、第3回以降の活動が活発に行われる下地を作ることができた。



図4.1 アイスブレイク活動

4.2.2 協創—英語メニューのデザイナー



図4.2 キッチンカー初訪問

第3回の授業からは、地域と関わりながら、どのようにして協創力を発揮していくかをグループに分かれて話し合った。教室でアイデアを出し続けるグループもあれば、キャンパスの外に出てまち歩きをしながら何が創り出せるかについて話し合っているグループもあった。

紀尾井町キャンパス1号棟を出て道路を渡った場所では、日替わりでキッチンカーが出店している。「接客英語I」の実施曜日である火曜日には、焼肉弁当のキッチンカー（暖樂亭）が営業している。一方で、紀尾井町キャンパス周辺は、新型コロナウイルスの感染が収束してきたこともあり、インバウンド客が増加している。ランチの時間帯には、外国人で賑わっているレストランもたくさん見られる。

この状況について着目して、大学周辺地域で、英語を使って①地域と関わり②協創力を発揮できるようなアクティビティを考えている過程で、「地域を賑わせているキッチンカーと増えている訪日外国人旅行者を、英語を使って結びつけるような活動ができないか」というテーマに取り組むこととなった。

第4回の授業では、実際にキッチンカーを訪ねて、英語を使って自分たち学生が何か役に立つことができないかを尋ねてみることにした。

授業が始まって間もなく、みんなで教室の外に出て、キッチンカーを訪ねた。店舗で45年間焼肉屋を経営されていたご夫婦がコロナ禍で店舗を閉めてキッチンカーを始めたこと、東京3か所・神奈川2か所で毎日場所を変えて営業していること、弁当で使用している肉の質には自信があることなど、たくさんのお話を伺った。



図4.3 グループ調査

学生の側から、自分たちが英語を使って役に立てることはないかと質問したところ、「インバウンド客が増えてきたこともあって、英語のメニューを作ってくれれば助かります」というお二人の希望を伺った。

教室に戻った学生は、さっそく、一般的なレストラン等の飲食店の英語メニューについて調べ、メニューにはどのような情報が必要かなどチェックした。

インバウンド客を対象にすると、宗教上の理由で食べられない肉があることもわかり、したがって鶏肉・豚肉・牛肉等の区分をわかりやすく伝える方法などもメンバーで議論した。

第5回の授業からは、実際にデザインをする作業に取り組み始めた。メニューのデザインをする作業は、グループに分かれて進めた。グループでそれぞれの役割を決めて、授業時間だけでなくそれ以

外の時間も使って取り組んだ。焼肉弁当のあたたかいイメージから、メニュー全体のデザインも暖色系でまとめることにした。



図4.5 再検討

第6回、第7回の授業では、メニューに必要な情報の整理もした。原材料から気をつけるべきアレルギー源についての情報をあげるようにするなど、みんなの話し合いによって修正と改善を繰り返していった。メニューを手にする外国人の目線を常に忘れないように心がけた。ここで、プロトタイプver.1が完成した。

第8回授業の際に、デザインしたメニュー（プロトタイプver.1）を、暖樂亭のご夫婦に一度チェックをお願いした。デザインの希望もお聞きした。また、英語の得意な人に英語のスペルや文法の間違いを指摘してもらった。第9回の授業ではそうしたことをすべて修正して、第10回の授業ではまた新しいバージョンのメニューが出来上がった。

どの作業も、グループのメンバーが集まり、確認し合いながら進めた。メンバーと協力しながら作業をすると、自分ひとりでは気が付かなかった視点が得られたり、おもしろいアイデアが浮かんだり、みんなで創造する楽しさを感じることができた。



図4.4 プロトタイプの贈呈



図4.6 デザイン作業

4.2.3 外国人インタビューを経て完成へ



図4.7 インタビュー

数回の修正を加えたメニューを、第11回と第12回の授業で、外国人に実際に見てもらいアドバイスをもらうことにした。4人グループで、紀尾井町周辺を歩いている外国人に英語で声をかけ、メニューの英語の意味が通じるか、もっと良い表現はないか、と質問した。緊張していた学生たちも「前に踏み出す力」を発揮し、最後には全員が声をかけていた。

「Japanese beefではなく wagyuの方がいいよ」など、具体的なアドバイスをたくさん得ることができた。学生たちも英語でコミュニケーションがとれたこと



図4.8 インタビュー

で自信も生まれ、英語に対する学習意欲も高まっているようだった。

「外国人はみんな優しかった」と嬉しそうに話してくれた学生の笑顔が印象的だった。

第13回の授業では、外国人に英語表記についてアドバイスをもらった点について、さっそく修正し、英語メニューを完成させた。

メニュー表面は、暖樂亭の歴史や営業時間や場所についての説明、メニュー裏面は、4種類の焼肉弁当について、名称・材料・値段・特徴が書かれている。日本語や英語がわからない外国人のために、



図4.9、図4.10 インタビュー

イラストでも情報を伝えている。

こうして、すべて学生の手による「英語メニュー」が完成した。



図4.11 英語メニューの贈呈

DANRANTEI
Delicious Yakiniku Lunch Box

DAN RAN TEI
暖樂亭

follow me!

Weekly Schedule
Monday : Setagaya City
Tuesday : Chiyoda City
Wednesday: Yokohama City
Thursday : Yokohama City
Friday : Minatoku City

図4.12 英語メニュー（表）

The most popular! Mixed Yakiniku lunch box 900yen
• A5 best Wagyu + Daisen chicken
• Taste that melts when baked

Black porks seaweed lunch box 800yen
• Black pork ribs+Korean seaweed
• Recommended soft boiled egg + 50yen
• toasty taste and refreshing taste

A5 Japanese beef simmering lunch box 1000 yen
• Soy sauce-based sause cost performance is the best.
• Uses A5 rank, the highest grade of Japanese beef.

Daisen chicken thigh bento 750yen
• Soy sauce based sause.
• Recommended for people who don't eat beef.
• Well-balanced and juicy meat.

Side dish
• Macaroni salad
• Cucumber ham coleslaw
• Daikon radish, carrot
The side dish is a menu that has these three.

Topping all+100yen
• homemade kimchi
• seasoned Ramen egg
• a big serving of rice
• Korean namul

図4.13 英語メニュー（裏）

5. 2023年度後期「接客英語Ⅱ」

「接客英語Ⅱ」も、短期大学の坂戸と紀尾井町の両キャンパスで、後期に開講されている科目である。前期に引き続き、どのようにしたら紀尾井町キャンパス周辺の環境を活用できるか、学生が興味を持って主体的に活動に参加できるか、を模索した。

5.1 授業の目標

授業の目標は、前期と同様、①地域資源を活用して英語を学ぶこと、②受講生全員で「協創」すること、を目指した。

2023年度のシラバスに記載されている授業の目標は、下表の通りである。接客場面を想定した英語表現の学習がシラバス作成時の授業計画であったが、より地域との繋がりを深め、「協創力」を育てる目的を重視した結果、シラバスとは異なる授業計画を組み直した。この点については初回の授業の

際に学生に説明し、全員の理解を得た。

<p>(1) 授業の概要 語学・基礎</p> <p>(2) 授業の目的 訪日外国人観光客が急増する昨今、接客業においても外国人観光客への対応が迫られています。 この授業では、実際の接客場面でどのような英語表現を使用したら良いのか、具体的なシーンを想定しながら重要な英語表現を学んでいきます。</p> <p>(3) 学習成果 就職後にも役に立つ英語が身につきます。 英語を通してコミュニケーション力が身につきます (①前に踏み出す力、③協力する力)。接客英語を学ぶことで、就職活動の準備もできます (⑤ビジネススキル)。</p> <p>(4) 授業の到達目標 広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力 (短大ディプロマポリシーの①)。 社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力 (短大ディプロマポリシーの③)。</p>

表5.1. 後期「接客英語Ⅱ」シラバス

5.2 授業の展開

授業は、下表のように実施された。順番に振り返ってみたい。

	接客英語Ⅱ 授業内容	前	考	協
第1回	授業目標の提示、自己紹介	◎		
第2回	アイスブレイキングアクティビティ			◎
第3回	「協創力」を活かしたアクティビティについての話し合いと決定		○	◎
第4回	「紀尾井町まち歩き観光マップ」作成手順の計画	○	◎	
第5回	まち歩きの実施と調査		○	◎
第6回	まち歩きの実施と調査		○	◎
第7回	プロトタイプ ver.1の完成		◎	○
第8回	英語ナレーションの原稿作成		◎	○
第9回	まち歩きの実施と動画撮影		○	◎
第10回	プロトタイプ ver.2の完成		◎	○
第11回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第12回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第13回	「紀尾井町まち歩き英語観光マップ」の完成、授業の振り返り		◎	◎

表5.2 後期「接客英語Ⅱ」授業展開

5.2.1 授業のはじまり

前期「接客英語Ⅰ」と同様に、後期「接客英語Ⅱ」でも「協創」作業に取り組むために、グループワーク中心の授業展開とした。男子学生、女子学生、1年生、2年生がほぼ同数で構成されているクラスでもあり、普段からあまり交流している学生同士ではなかったことから、前期同様、第1回、第2回の授業では、カードゲーム等を活用して、お互いにコミュニケーションをとりやすくなるような環境づくりに専念した。

お互いの名前と顔を覚えたタイミングで、この授業を通して協創力を発揮し、みんなで訪日外国人旅行者の役に立つものを創り出そうという目標を掲げた。その際に、紀尾井町キャンパス周辺の資源を有効に活用することを条件に掲げた。

全受講生10人が5名のグループ2つに分かれて、グループでどんなことを創り出すことが可能かを話し合った。紀尾井町キャンパス周辺には、国会議事堂、最高裁判所、国立劇場、国会図書館、迎賓館等のスポットがあることから、観光案内に関するものが作れるのではないかという意見が両グループとも多くを占めた。

5.2.2 協創一地図づくりのためのまち歩きー



図5.1 自動販売機の説明



図5.2 大手出版社の説明

前期の授業を通して「キッチンカーの英語メニュー」という協創作業の成果物を得る経験をしていたメンバーがいたこともあり、どのように協力すればよいのか、どのようにしてプロダクトを創り上げていけばよいのか、などについて受講生の完成イメージの共有は前期よりも速やかにできていたようであった。第3回の授業では、後期授業において協創作業で取り組むテーマについて議論がなされた。さまざまなアイデアが出された結果、「接客英語Ⅱ」では、キャンパス周辺の「地域観光マップ」作りに取り組むこととなった。まち歩きをすることで、紀尾井町キャンパス周辺の魅力を発見し、その魅力を英語で発信することを目指した。グループで「協創」し、調べ、学ぶだけでなく、モノとして創り出すことを目指した。

第4回の授業では、「地域観光マップ」に掲載する情報や地図の範囲などについて話し合いがなされ、続く第5回、第6回の授業では、実際に紀尾井町キャンパス周辺を散策して、「訪日外国人旅行者が興味を持つようなスポット」を探した。通常の観光マップに掲載されるような場所ではなく、外国人から見て珍しいとか不思議だとか感じられるような場所やモノの情報を中心に地図に記載していくこととした。



図5.3 各スポットと説明文

第7回の授業では、紀尾井町周辺の地図に、グループごとに、観光名所として紹介するスポットを書き込んで、全体を整えるデザインを行なった。ここでプロ

トタイプver.1が完成した。

第8回の授業では、10箇所の観光名所スポットを紹介する英文を考えた。そして第9回の授業では、それぞれのスポットの前に立ってその英文を読み上げて説明する様子を動画として撮影した。第10回の授業では、その動画をYouTube等にアップロードして、そのリンクをQRコード化して、そのQRコードを地図上に貼り付けた。こうしてプロトタイプver.2が完成した。

5.2.3 外国人インタビューを経て完成へ



図5.4 インタビュー

第11回、第12回の授業では、プロトタイプver.2を持って、前期と同様に、外国人に実際にマップを見てもらいアドバイスをもらうことにした。4人グループで、紀尾井町周辺を歩いている外国人に英語で声をかけ、QRコードから動画を見ることができるか、動画の内容を理解できるか（英語が通じるか）、質問した。前期でインタビューを経験していた学生は大して緊張することもなく、「前に踏み出す力」を発揮して声をかけていた。初めての学生も、アクティビティの後半には勇気を持って声をかけることができた。

マップ上の字が小さくて読みづらいこと、動画の音声小さくてよく聞き取れないことなどの改善点を指摘してくれる人もいる一方、地図からQRコードで動画を見られる仕組みが面白いと肯定的な感想を伝えてくれる外国人もいた。

第13回の授業では、インタビューで得られたアドバイスをプロトタイプver.2に反映させて、観光マップを完成させた。



図5.5 QRコードを記載したマップ

6. おわりに

前期と後期に実施された「接客英語Ⅰ」と「接客英語Ⅱ」において、地域と関わる英語教育の試み、英語教育を通して協創力を養う試み、ディプロマポリシーを達成する試み、を以上のように実践した。

どの試みにも改善すべきことが山ほどあるので、こうした課題は来年度以降の授業において少しずつ改善・改良していく必要があると考えている。特に、履修生からのフィードバックがまだ十分にされていないので、この点からまず取り組んでいきたい。

ただ、学生が自ら周囲と協力して新しい価値を創り出そうとする活動（「協創」）を通して英語を学んでいくという試みには、学生のリアクションから感じる印象に過ぎないものの、非常に効果がある試みであると実感している。

参考文献

- 1) 賛田悠 (2019) 「英語で発信埼玉県の魅力」『英語教育』増刊号, 16-17.
- 2) 渡邊美代子 (2019) 「おもてなし英語で地元・群馬県を再発見」『英語教育』増刊号, 24-25.

【地域教育実践報告】

「第25期ひ・まわり探検隊」事業に参加して

——化学を楽しもう☆城西実験クラブ☆——

森田勇人*・阪田知巳**

キーワード：ひ・まわり探検隊、スライム、酵母、化学、城西実験クラブ

1. はじめに

私たちは、日高市の小学生対象に夏休み中に様々な体験をさせる「ひ・まわり探検隊」事業への参加要望が日高市よりあったことの地域連携センターからの連絡に応える形で、日高市の小学生10名に対し、「化学」をテーマとして小学生に理解しやすい内容で体験実験を行いました。

今回の「ひ・まわり探検隊」事業には、城西大学全体として私たちのグループも含め、合計3つのグループが参加し、以下の3つの教室が異なる日程で開催されました。

- 1) 教室名「世界にひとつだけのうちわを作ろう！！」 令和5年7月26日（水）
柴村、金子先生（城西大学水田美術館）
- 2) 教室名「JOSAI美術館・博物館ワークショップ」 令和5年7月28日（金）
宮田先生（城西大学水田美術館・城西大学水田記念博物館共催）
- 3) 教室名「化学を楽しもう☆城西実験クラブ☆」 令和5年7月31日（月）
阪田、森田（理学部化学科）

本報告では、私たちが主催いたしました3)の教室の実施内容、参加した小学生の皆様の反応、実施に当たり協力していただいた研究室の大学生・大学院生の皆様の感想などにつきまして包括的に報告させていただきます。

2. 実施内容

今回私たちが実施した「化学を楽しもう☆城西実験クラブ☆」では、「1）動くスライムを作ろう」と、「2）酵母の働きを観察しよう」の2つの実験を行いました。

「1）動くスライムを作ろう」では、阪田先生の指導のもと、洗濯のりとほう砂を使ってスライムを作る実験を行いました。さらに、スライムは食塩を混ぜることでスライムの中の水分が抜けていくことで硬さが増してくるとともに、跳ね



図1 スライムの作製の様子

* 理学部化学科分子分光学研究室・教授

** 理学部化学科機能材料分析研究室・教授

返る力が強くなってスーパーボールのようになることを体験しました。また、スライムに細かくしたスチールウールを混ぜて磁石を近づけると、磁石にスチールウール（鉄粉）が引きつけられるときスチールウールの周りのスライムが一緒に引っ張られることを利用して、磁石に引っ張られて“動くスライム”を作りました。

一方、「2）酵母の働きを観察しよう」では、森田の指導のもと、酵母の働きに関する実験を行いました。乾燥酵母をショ糖溶液に加えたものをキューネ発酵管（図2）と呼ばれる発酵の過程で発生するガスの体積を図ることのできる容器に入れ、氷水で冷やした場合と、37℃の温浴に浸した場合とでの発酵の進む速度を、発生する気体の体積を測定することで比較しました。その結果、氷水で冷やした酵母よりお湯で温めた酵母のほうが、発酵が早く進むことが分かりました。このことから、酵母による発酵の働きを調整することは、ビールやパンなどの発酵食品加工のプロセスで重要であり、古代より様々な食品加工技術として文明とともに発展してきたことを学びました。



図2 キューネ発酵管に酵母を加えたショ糖溶液を入れる様子

3. 小学生とTAの感想

実験終了後に行ったアンケート結果を見ますと、参加した10名の小学生の皆さんが今回の実験を全体として楽しかったと感じて頂けたことがわかりました。一方で、スライムの作製が今回の実験に参加していただいた小学生のどの学年にも好評であったのに対し、酵母の発酵実験は、条件を変えて比較するという小学生でも中～高学年での実験の要素があったため、スライム作製より興味を持てたという回答が得られた小学生が2割程度という結果になりました。このことから、酵母による発酵実験のような、理科の実験を通して、理科だけでなく社会科で学ぶ内容などとの連携を考えることを目標とした実験を行う場合は、参加者の学年（特に低学年層）を考慮して、もう少し日々の生活と直結した感覚的に理解しやすい内容に実験の実施方法を工夫するとともに、実験を実施する前に行う説明の際に、この実験を通して何を理解してほしいかを端的に示したポンチ絵の導入等が必要であると感じました。

一方、今回の2つの実験の実施に当たっては、阪田先生と私の研究室の4年生並びに大学院生がTA（Teaching Assistant）として積極的に参加していただけました。彼らは、実験実施当日のみならず、数日前から進めてきた実験準備などにも積極的に協力をしていただけました。実験終了後彼らの意見を聞いてみたところ、参加した学生全員が、通常の化学科2年生、3年生の学生実験でのTAと異なり、年齢差が大きい小学生に対する指導を行うことが斬新で大変興味深かったという意見を述べていました。さらに、教職課程を履修している学生からは、中高生とは異なるものの、実験実習の実施方法を体験できたことは、卒業後教員として現場で教育指導を行っていくうえで大変良い経験になったとの意見もございました。



図3 ひ・まわり探検隊参加者の集合写真

4. 総括

以上まとめますと、今回の「ひ・まわり探検隊」への参加を通して、城西大学が地域（特に小学1～6年生の低学年層）の实地教育に関してどのような形で貢献していくことができるかということを考える機会を得たと感じました。今回のように、大学で行っている教育研究内容あるいはその基礎となる内容を小学生が理解できるようにかみ砕いて説明することは、大学の活動内容を社会へ公開する場合においても十二分に考慮されるべき点であり、今後とも引き続き「ひ・まわり探検隊」事業だけでなく、城西大学周辺地域で行われる様々な体験型実習プログラムへ積極的に参加していくことで、城西大学がこの地域における幅広い年齢層に対する「知の拠点」としての役割を果たすことにつながるのではないかと考えます。

【地域教育実践報告】

とかがわ町における高齢者世代に向けた魚食推進食育活動

——健康食生活教室「1日1品は魚料理！」——

中里見真紀*・深谷睦*・内田博之**・松本明世***・真野博**

キーワード：とかがわ町、健康増進、魚食、食育、管理栄養士

1. はじめに

埼玉県とかがわ町は埼玉県の中央部に位置し、西から東に都幾川が流れ、町の7割が山林で覆われた自然豊かな地域である。しかし、我が国全体で進む少子高齢化が、医療・介護などの様々な分野で課題となっており、とかがわ町も高齢化率が40.0%と、埼玉県全体の26.7%を大きく上回り、少子高齢化が進んでいる^{1),2)}。

城西大学薬学部医療栄養学科では、2019年から埼玉県とかがわ町の住民に対してBDHQ（簡易型自記式食事歴法：brief-type self-administered diet history questionnaire）を用いた食事調査を継続的に行っている。この調査からとかがわ町では特に心疾患の死亡が多く、その原因として食塩や飽和脂肪酸の摂取過剰が示された。これまでに、食事調査実施後に飽和脂肪酸や食塩の摂取を控える対策に関する栄養講座を定期的開催していたが、顕著な効果はみられていない。今回はこの問題を解決するために、特に飽和脂肪酸の過剰摂取に注目し、その摂取を減らす方策として、動脈硬化や心疾患予防に効果がある^{3),4)}n-3系多価不飽和脂肪酸の豊富な魚食を推進していくこととした。本稿では、とかがわ町で行った健康食生活教室「1日1品は魚料理！」の魚食推進食育活動についての内容とアンケート結果を報告する。

2. 健康食生活教室「1日1品は魚料理！」の概要

2.1 健康食生活教室「1日1品は魚料理！」の実施内容

健康食生活教室は2023年4月～9月にかけて4回開催し、とかがわ町の住人計66名が参加した（表2.1）。参加者は、健康食生活教室のチラシを配布し興味を持って参加した健康意識が比較的高い層であると考えられる。

第1、2、4回の健康食生活教室では前半に講義、後半に試食を実施した。第3回健康食生活教室では栄養講座との同時開催のため、前半講義、後半は個別栄養相談を実施した。健康食生活教室の講義では、『「魚食」と健康についての話』と『意外と簡単にできる魚の処理とお手軽料理法の紹介』の内容をレクチャー形式で行った（図2.1）。

* 城西大学薬学部医療栄養学科 助手

** 城西大学薬学部医療栄養学科 教授

*** 城西大学

『「魚食」と健康についての話』では、としがわ町の健康・栄養問題である心疾患と飽和脂肪酸の関係について、n-3系多価不飽和脂肪酸の豊富な魚食の動脈硬化や心疾患予防効果について、としがわ町の魚摂取状況と毎日魚プラス50gを推進する内容を説明した。『意外と簡単にできる魚の処理とお手軽料理法の紹介』では、魚のよいところ・悪いところや魚の処理の方法、簡単に調理できる工夫や便利グッズ、医療栄養学科学生が考えた簡単魚レシピの紹介をした。

第1回の試食では、保健センターの調理室が使用できたため、揚げたてのなまずの天ぷらととしがわの槻川の鮎を使用したあゆ飯を提供した。第2回は、子育て中の母親を支援する団体の愛育班向けの健康食生活教室で、小さなお子さんが食べやすいように白身魚（埼玉県産のなまず）のすり身で作ったしんじょやいわしの味噌煮缶で簡単に作れるおさかなバーグを事前に調理し提供した。第4回では便利グッズを使用して手軽に調理したあゆの一夜干しと、初回で好評であったあゆ飯を事前に調理し提供した。

表2.1 健康食生活教室「1日1品は魚料理！」の開催概要

回	開催日	講座名	参加者人数	試食内容
1	2023年4月	TOKIGAWAストレッチ 健康食生活教室	15名	なまずの天ぷら、としがわ産あゆ飯
2	2023年5月	愛育班員研修会 健康食生活教室	16名	白身魚（なまず）もしんじょ、おさかなバーグ（イワシ味噌煮缶使用）
3	2023年8月	としがわ町栄養講座2023 健康食生活教室	17名	試食なし
4	2023年9月	健康かわせみ会 健康食生活教室	18名	あゆの一夜干し、あゆ飯



図2.1 健康食生活教室「1日1品は魚料理！」の開催様子
 上：TOKIGAWAストレッチの講義と試食の様子
 下：健康かわせみ会の講義と試食の様子

2.2 健康食生活教室「1日1品は魚料理！」のアンケート調査の実施

第1回、第2回の健康食生活教室の参加者（31名）へ、終了後にアンケートを配布した。アンケート内容（図2.2）は、無記名自記式の計4問である。

令和5年4月17日

TOKIGAWA ストレッチ
健康食生活教室 ～さかなを食べよう～ アンケート

本日は、ご参加いただきありがとうございました。
恐れ入りますが、以下のアンケートのご協力をお願いいたします。

1. 今日の健康食生活教室はいかがでしたか。当てはまるものに○をつけてください。
とてもよかった ・ よかった ・ あまりよくなかった ・ よくなかった

2. 今日の健康食生活教室のご感想やご意見をご自由にお書きください。

3. 今日の健康食生活教室に参加して、魚をもっと食べようと思いましたが、当てはまるものに○をつけてください。
とてもそう思う ・ ややそう思う ・ あまり思わない ・ 思わない

4. 今後、魚食に関してどのような講演・イベントがあったら参加したいですか。

～ ご協力いただきありがとうございました ～

図2.2 参加者へ配布したアンケート用紙

3. 参加者のアンケート結果

参加者のアンケート結果から、今回実施した「今日の健康食生活教室」は、回答者全員が「よかった」及び「とてもよかった」と回答し（図3.1）、非常に好評であったことが示された。さらに、「今回の教室に参加して魚をもっと食べようと思いました」のアンケートにおいても、回答者の95%以上が「ややそう思う」および「とてもそう思う」と回答した（図3.2）。これにより、今後の食生活において魚を積極的に取り入れていく意思が高まっていると考えられる。

アンケートの感想（自由記載：表3.1）では、「今まで知らなかった魚の良さ、体にいいことがわかりました」や「使ったことないキッチングッズを知ることができてよかった。魚料理も挑戦したいと思いました」、「思った以上に美味しかったです。特にナマズの天ぷらは臭みがなく大変美味しい魚だと思いました」、「魚50gがよくわかってこれから参考にします。普段、なまず、あゆは食べないので今日はいい経験をしました」、「魚を毎日食べるということは、ハードルが高いと感じていましたが、気軽に取れる方法を教えてもらい、実践してみようと思いました」、「意外と1日の量も、それほど多くないと思いました」など健康食生活教室の内容を実践してみようという前向きな意見が多く見られた。

また、今後の魚食に関する講演・イベントの希望（自由記述：表3.1）では、「いろいろな簡単な魚料理」、「調理実習」、「加工品の料理紹介」などの意見が多く、魚料理に悩んでいることがわかった。

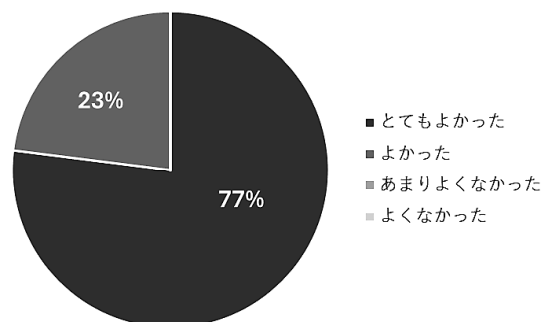


図3.1 「Q1. 今日の健康食生活教室はいかがでしたか」結果

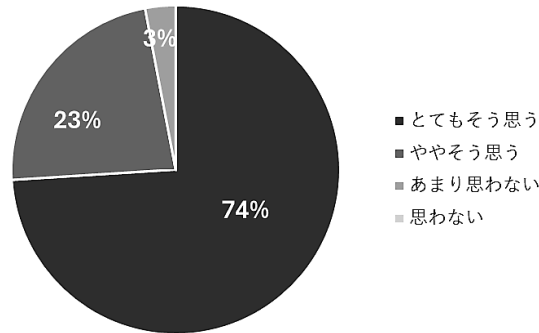


図3.2 「Q3. 今日の健康食生活教室に参加して、魚をもっと食べようと思いましたか」結果

表3.1 アンケート結果

Q.2 今日の健康食生活教室のご感想やご意見をご自由にお書きください。（自由記述）

- ・今まで知らなかった魚の良さ、体にいいことがわかりました
- ・思った以上に美味しかったです。特にナマズの天ぶらは臭みがなく大変美味しい魚だと思いました。
- ・使ったことないキッチングッズを知ることができてよかった。魚料理も挑戦したいと思いました。
- ・魚50gがよくわかってこれから参考にします。普段、なまず、あゆは食べないので今日はいい経験をしました。
- ・毎日1食は魚を食べるようにしています。青魚のほうがいいと思いますが、白身魚が多くなってしまいます。同じような魚になってしまいます。
- ・知らなかった事とか料理が食べられてよかった。なかなか自分ではしない
- ・とても良いお話をありがとうございました
- ・いい話をありがとうございました。これからはバランスよく元気ですごします。
- ・「魚を毎日食べる」ということは、ハードルが高いと感じていましたが、気軽に取れる方法を教えてもらい、実践してみようと思いました。意外と量も、それほど多くないんだなと思いました（1日の量）
- ・魚食が魚がどのようなものか、長年疑問に感じていたことが解決（缶詰や練り製品などでも良い）。塩分等に気をつける。わかりやすい説明でよかったです。
- ・魚の油の重要性を感じ、日々の生活の中に魚を食べる習慣をつけたいと思いました。
- ・コレステロールが高いのが最近続いているので、下げたいのだが、魚を食べるのが少ないので、そのためだと考えるようになった。
- ・初めてなまずを食べさせていただいて、やわらかくておいしかったです。天ぶらが家でできない方のために、他の料理法もあるといいです。
- ・生の魚をもっと食べたほうが良いと思った。なまずの天ぶらは軽くて美味しかったです。ひもの利用が多く、塩分量が気になっていた。サバ缶使用のうどん作ってみたいです。
- ・魚食は良いとわかっていましたが、栄養士の方のデータを使って1日100gとは知りませんでした。今後の食事に気をつけて今日参加できたお陰で勉強になりました。
- ・魚についてののはなしは、よく理解できました。好き嫌いなど配慮した指導方法を考えていただけると良いと思います。まず前提に好き嫌いが入っていないのは不思議でした
- ・毎日魚料理を出すことはなかったのですが、缶詰の利用も手軽であることに気づきました。我が家ではジャコを必ず味噌汁にたっぷり入れています。
- ・試食までご用意いただきありがとうございました。ハンバーグはくさみが口に残りました。
- ・魚はロースターで焼くことが多いのですが、つい焼きすぎてしまいます。ちょうどよいところで火をとめるのが難しいです。ほわっとしたいいい出来上がりで食べたいです。
- ・魚油の取り方がよくわかりました。魚そのものだけでなく、かまぼこや缶詰でも良いことがわかり、気が楽になりました。
- ・なかなかこういう健康食生活に関する機会がなかったので良かったです。
- ・魚料理をしようと思いました。
- ・意識して魚料理を家族の健康のため、自分の健康のため作っていきたいと思いました。かまぼこでもいいと聞き、取り入れてみたいと思いました。
- ・試食もあり、調理法も載っていたので、家で作ってみようと思います。肉がダメということではなく、魚と両輪で食べると良いことがわかり、これから食卓に魚を多く並べようと思います。
- ・魚の大切さがとても良くわかって良かったと思います。カマボコやサツマアゲも同じ効果があると聞き、利用していきたいと思います。
- ・私は九州出身ですが帰郷してみたらかまぼこ屋さんがつぶれていました。食生活が変わったのだと実感しました。
- ・缶詰を使ったハンバーグ、とてもよかったです。お店の物は添加物が気になり食べられません。けれど生の魚から作るのは大変そうではできませんでした。手軽に作れて栄養もあるので作ってみます。
- ・魚を食べることで不飽和脂肪酸が体に与える影響が良いことが改めてわかりました。魚を食べることにこれからは意識したいと思います。
- ・なまずは初めて食べましたが、魚のにおいが強く感じました。1匹丸ごと買うことがほぼないので、切り身の保管方法などもあったと良いと思いました。うどんのメニューが斬新で良かったです。
- ・ときがわ町の住民は、魚を余りっていないことに驚きました。マウスの実験で脂肪肝が魚の油（EPA・DHA）で良くなることも知れて良かったです。これからは、毎日魚を食べたいと思いました。

Q4. 今後、魚食に関してどのような講演・イベントがあったら参加したいですか。（自由記述）

- ・体にいいことがわかったので、いろいろな魚の料理も教わりたいと思います。
- ・やはり加工してある物の方が取り入れやすいので加工品の料理の紹介があると助かります。
- ・今回のように試食会ができると嬉しい。
- ・魚を簡単に取れる方法（食生活に活用する方法）
- ・魚を使った料理実習
- ・使う方法を教えてもらいたい
- ・川魚は臭い感じがしましたが、とてもかるいさかなでおいしかったです
- ・なまずの天ぷらは、美味しくてびっくりしました。びっくりする魚を食べるイベントや、かんたんに魚をとれるレシピを知りたいです。
- ・なまずの天ぷら、初めて食べました。試食があるなんてすごいです。ありがとうございました。
- ・参加したい
- ・焼き魚が多いので魚を1本買うことがない
- ・魚の料理
- ・一人暮らしの方、料理をあまりしたくない方に肴を食べていただくにはどのような方法が良いか教えていただきたいです。
- ・手軽に作りやすい方法など知りたいです。魚の骨も食べられるメニューなどもっと知りたいです。
- ・食生活が生きる上で一番大切なことだと思うので、今あふれる調味料がある中でいろいろ知りたいです。なまずの天ぷらはじめていただき美味しかったです。あゆのご飯も美味しかったです。ありがとうございました。
- ・食生活に関することについては知識として知るが、実施は難しいかもです
- ・小学校等保護者に講演して欲しい
- ・家族に病人がいるので病気との関連について深く勉強できればと思います。
- ・なるべく参加して意識していきたいと思います。血管がつまりさざらっと流れると思うと少しでも毎日食べられればとは思っています。
- ・今後もこのようなイベントが有りましたら参加してみたいと思っています。今日はありがとうございました。
- ・「小さなフライパンを用いて少量の油」どのくらいの小ささなのかわかるようなイベントがあったら良いと思います。
- ・朝食はほぼ毎日魚類を食べていますので、また機会があったら参加させていただきます。
- ・講演があったら参加したいです。
- ・魚のさばき方。実際に料理をしてみたい。2～3歳の子供用の魚料理。美味しいと感じないと食べてくれないので、薄味にしても醤油をかけられてしまい困っています。
- ・今日のように実際に試食があると、より魚料理を作ってみようと思うので、こんなイベントを増やして欲しいです。
- ・かまぼこ作り
- ・今日のような身近なお話が聞きたいです。わかりやすく復習になります。ありがとうございました。
- ・魚を使った料理

4. 今後の展望

ときがわ町で行った健康食生活教室は、アンケート結果から見て概ね良好な反応であった。しかし、参加者を集客して行うレクチャー型の教室では、参加人数が限られ住民全体に十分な影響を与えるのは難しいという課題がある。このため、住民の健康意識向上や魚食食育推進には、他にもさまざまな施策が必要である。2023年度は健康食生活教室の他に、ときがわ町の広報誌『広報ときがわ』において、食や健康に関するコラム「食は体をつくる～城西大学通信～」を通じて魚食推進のコラムの執筆や、若年層への魚食推進のためときがわ町の小中学校の給食と協力して魚給食も実現した。今後もこれらの活動を継続し、他方面からの新しいアプローチを模索し、ときがわ町における魚食推進食育活動を発展させ、多くの住民の健康増進に努めていきたい。

謝辞

本事業は、ときがわ町保健センターと共に行ったものであり、所長 吉澤真理子様を初め、ときがわ町保健センター職員の皆様、ときがわ町の住民の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 埼玉県 保健医療部 衛生研究所 (2023) 『2022年度版 地域別健康情報 埼玉県』
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/21062/saitamaken4.pdf>) (2024年1月13日).
- 2) 埼玉県 保健医療部 衛生研究所 (2023) 『2022年度版 地域別健康情報 ときがわ町』
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/21062/32tokigawa4.pdf>) (2024年1月13日).
- 3) M. Nakasatomi, et al. (2018). Fish oil and fenofibrate inhibit pancreatic islet hypertrophy, and improve glucose and lipid metabolic dysfunctions with different ways in diabetic KK mice. *Obesity Research & Clinical Practice* 12 (1S1), 29-38.
- 4) K. Maruyama, et al. (2022). Association of Fish and Omega-3 Fatty Acid Intake with Carotid Intima-Media Thickness in Middle-Aged to Elderly Japanese Men and Women: The Toon Health Study. *Nutrients* 3;14(17): 3644.

【地域教育実践報告】

食育に貢献する小規模ぶどう農園をめざして

——リーフレットの作成——

平岡翔太*・堀由美子**・内田博之***

キーワード：小規模ぶどう農園、食育、リーフレット、茨城県小美玉市、健康日本21

1. はじめに

日本の農業経営は、家族単位あるいは一人で営む小規模農業の割合が非常に高い。小規模農業は、日本を含め他の先進国においても、食料生産の主要な農業形態となっており、経済効果や特産品の生産のみならず地域の雇用の創出といった側面でも重要な役割を担っている。近年、日本の小規模農業は、健康や食へのこだわりを持つ人々の増加により注目されている。健康日本21（第二次）の最終評価によると日本の果物摂取量は依然として低く、果物摂取量の増加を促す食育活動が必要である。そこで、茨城県小美玉市に位置する小規模ぶどう農園『グレープガーデンやま』のリーフレットを作成し、その取り組みを通して「食育に貢献する小規模ぶどう農園」の活動について考察した。

2. 活動方法

2.1 農園の特徴

山健二氏を代表とする『グレープガーデンやま』は、茨城県小美玉市に位置する小規模ぶどう農園である。当農園は、年間を通じて、信念を持って丁寧にぶどうを栽培し、直売および宅配で販売している。農地は、約2反3畝、1,380坪であり、ビニールハウスが10棟設置されている。シャインマスカットを主として、他に5種類のぶどうを栽培し、毎年8月中旬から9月にかけて出荷している。

2.2 リーフレットの作成と配布

山氏と対面およびZoomアプリケーションによるオンライン面談により、複数回の聞き取り調査を行い、「食育に貢献する小規模ぶどう農園」をコンセプトとするリーフレットを作成した。リーフレットには、生産者情報として生産者の紹介、栽培エリア、こだわりの栽培方法、ぶどうの美味しい食べ方、保存方法および購入方法について明記することとした。作成したリーフレットは直売時に配布し、購入者から直接リーフレットの内容について感想を聞いた。

* 城西大学薬学部医療栄養学科予防栄養学研究室配属4年生

** 活水女子大学健康生活学部食生活健康学科教授（元 城西大学薬学部医療栄養学科予防栄養学研究室准教授）

*** 城西大学薬学部医療栄養学科予防栄養学研究室教授

3. 活動結果

3.1 リーフレットの作成

リーフレットに掲載した情報とその根拠は以下の通りである（図1）。

- (1) 生産者情報：屋号、代表者氏名、自宅兼オフィスおよび農園の住所、FAX 番号を記載した。なお、電話番号（タイミングのよい対応が難しい）と二次元コード（作成・情報集約が不慣れ）等の情報は、山氏の希望により記載しなかった。
- (2) 栽培エリア：茨城県内の小美玉市の位置関係がわかりやすいように、住所および地図を記載した。農場で栽培状況を見学しながら購入したいというニーズを視野に入れた。
- (3) こだわりの栽培方法：十分な甘味と適度の酸味が得られるように、根域制限と畝立て栽培を行っていることを記載した。また、栽培状況がイメージできるよう、木に実ったぶどうとビニールハウス、圃場の写真をレイアウトした。
- (4) 美味しい食べ方・保存方法：購入者にわかりやすいように、次の①～④を記載した。
 - ① 喫食者の年齢を考慮して、ぶどうをナイフで四等分に切ってから食べること
 - ② 日光に当たりやすい枝元の方が甘いことから、房の先から枝元にかけて順番に味の変化を楽しみながら食べること
 - ③ 冷蔵庫で保存中、だんだん酸味が弱くなり、甘味が増すことから、7日ぐらいかけて少しずつ味の変化を楽しみながら食べること
 - ④ ぶどうを保存するときは、枝を2ミリ程度残してキッチンばさみで切って房から外し、ジッパー付き保存袋に入れ、冷蔵庫の野菜室に保存すること
- (5) 購入方法：山氏は、甘味や酸味、完熟度など購入者の好みをヒヤリングし、希望にマッチしたぶどうを販売することが理想とのことで、対面販売を基本にしているが、購入者情報をFAXで受けた後、宅配便で配送する場合もあることから、FAX 番号を記載した。

3.2 リーフレットの評価

作成したリーフレットは直売時に配布し、対面販売による購入者6名から直接リーフレットの内容について感想を聞くことができた。リーフレットに対する感想を表1に示した。

表1 リーフレットに対する感想

購入者	感想
A様	こだわりの栽培方法が写真で見ることができるとともに、栽培状況のイメージが付きやすい。ぶどうを食べることに安心感がある。
B様	高齢の自分と孫と一緒に食べることが多いので、四等分に切ることの記載は、優しさを感じる。
C様	房を意識した食べ方、保存中の甘味と酸味の変化は、ぶどうを食べることに興味がわいた。
D様	今までぶどうをむしって冷蔵庫に保存していたが、今後は、枝を2ミリ程度残して保存するようにしたい。
E様	糖尿病なので、一回当たりどのくらい食べても大丈夫か目安が書いてあると良いです。
F様	実際に味見をして、甘味と酸味の違いが確認できた。

4. 活動のまとめ

本研究は、現代の管理栄養士の職能教育の多様性や広範にわたる栄養ケア活動の状況を踏まえ、城西大学薬学部医療栄養学科（管理栄養士養成施設）予防栄養学研究室の卒業研究テーマとして企画・実施した。

日本の農業経営は、全経営のうち団体経営が3.6%、個人経営が96.4%であり、家族単位あるいは一人で営む小規模農業の割合が非常に高い¹⁾。小規模農業は、日本を含め他の先進国においても、食料生産の主要な農業形態となっており、経済効果や特産品の生産、地域の雇用の創出といった側面で重要な役割を担っている。国際連合は、2019年に「家族農業の10年（2019年～2028年）」を定め、飢餓の撲滅や健康状態の改善、食料安全保障の確保などの役割を有する家族農業の推進を促している²⁾。近年、日本の小規模農業は、健康や食へのこだわりを持つ人達のSocial Networking Serviceなどの媒体を介した情報発信がトリガーとなって、生産履歴（生産者の名前や顔・栽培方法・育成履歴）や生産者の想い、こだわり等の提示によって関心を集めている³⁾。一方、健康日本21（第二次）の最終評価によると、日本の果物摂取量は1日あたり100g未満の者の割合が約60%、0gの者の割合が約40%であり、依然として低いままである⁴⁾。生活習慣病の予防の観点からは、果物の摂取量は1日あたり200gが推奨されており、果物摂取量の増加を促す食育活動が必要である。そこで本活動では、茨城県小美玉市に位置する小規模ぶどう農園の『グレープガーデンやま』の「食育に貢献する小規模ぶどう農園」をめざしたリーフレットの作成を通して、食育に貢献する小規模ぶどう農園の活動について考察した。

リーフレットには、農園代表者の希望を考慮し、生産者の情報、栽培エリア、こだわりの栽培方法、美味しい食べ方、保存方法および購入方法について明記した。今回は直売時にこのリーフレットを配布し、リーフレットに対する感想をその場で得たが、いずれも高評価であった。また、糖尿病等で食事療法を行っている人向けの情報を含める必要があるという課題を見出すことができた。今回は直売・宅配購入の両者に対して、より詳細なアンケート調査ができなかったため、次のシーズンには実施したいと考えている。

大規模農園に比べて小規模農園のメリットは直売方式で利益率が高く、生産者の信念に基づいて、適切な栽培管理のもと、味覚にこだわった品種を選び、美味しさがピークの状態タイミングよく顧客に届けられることである⁵⁾。一方、小規模農園のデメリットは栽培面積当たりの労働者数が非常に少ないために、長時間労働になりやすく生産効率が抑制されることである。特に、定期的な散水、追肥、温度管理（ビニールハウスの開閉）をはじめ、剪定、芽かき、摘心、摘粒、カサかけ・袋掛け、収穫の各時点と出荷準備時の労働負担が非常に大きいことが課題とされる。例えば、散水、追肥、温度管理だけでも自動で環境制御できると理想的だが、小規模農園にとっては設備投資が大きく導入しにくい⁶⁾。これらのことから、農繁期の農園に農業体験として購入者に参加してもらう体制が整えられれば、自然体験や食農教育としての機会だけでなく生産者の労働量低減にも効果的であると考えられた⁷⁾。今後、食育に貢献する小規模ぶどう農園『グレープガーデンやま』には、食を支える根本である農業や地域に関わる自然体験や食農教育に加え生産者の労働量低減が期待できる購入者参加型の

「ぶどうの樹の食農教育オーナー制度」の取組が望まれる。

本活動にあたり、始終丁寧にご対応いただいた『グレープガーデンやま』代表の山健二氏に深く感謝申し上げます。

図1 『グレープガーデンやま』のリーフレット

<p>美味しい食べ方-1</p> <p>① 小さなお子様、高齢の方は、ぶどうをナイフで四等分に切ってから食べてください。</p> <p>② 房の先から枝元にかけて順番にたべます。(枝元の方が日光に当たりやすいので甘い。)</p>  <p>③ 冷蔵庫で保存しながら、7日ぐらいかけて少しずつ食べます。(だんだん酸味が弱くなり、甘味が増す。)</p> <p>④ ぶどうを房から外すときは、枝を2ミリ程度残して、キッチンばさみで切ってください。ジッパー付き保存袋に入れて、冷蔵庫の野菜室に保存します。</p>	  <p>グレープガーデンやま Grape Garden Yama 〒319-0121茨城県小美玉市***</p>	 <p>グレープガーデンやま Grape Garden Yama 代表 山健二 (やまけんじ) 城西大学薬学部医療栄養学科 やまさんプロジェクト 平岡翔太</p>
<p>美味しい食べ方-2</p> <p>① ぶどうの皮にも、栄養が詰まっています。もし、よかったら、皮ごと食べるのがおすすめです。(ぶどうには、身体を酸化から守るポリフェノール、便秘を予防する食物繊維、むくみを予防するカリウム、目や肌を元気にするβ-カロテンが含まれる。)</p> <p>② ぶどうは房状の果物です。一粒一粒味の違いを楽しみましょう。</p>	<p>グレープガーデンやまでは、こだわりの根域制限と畝立て栽培をしています。</p> <p>十分な甘味と適度の酸味があり、食べる と自然と笑顔になります。</p> <p>小さなお子様から高齢の方まで、楽しく 食べることができます。</p> <p>小美玉の大地が育んだぶどうを、自分好 みの食べ方でお召し上がりください。</p> <p>美味しい時にお届けします</p>	 <p>ぶどうのお求め方 〒319-0121茨城県小美玉市*** グレープガーデンやま 山健二 FAX: ****-**-****</p>

参考資料

- 1) 農林水産省. 農林業センサス (2020) 『第2巻農林業経営体調査報告書-総括編- 農業経営体』.
- 2) 国際連合 (2019) 『国連「家族農業の10年 (2019-2028)」世界行動計画』.
- 3) 青山郁子、朱驊、小山慎一、和田有史、日比野治雄 (2016) 「生産者情報の「見える化」が食品の心理的安全評価・品質の評価に与える効果」『消費者行動研究』23 (1), 47-60.
- 4) 厚生労働省. 健康局健康課栄養指導室 (2023) 『健康日本21 (第三次) について~栄養・食生活関連を中心に~』.
- 5) 竹村仁量 (2017) 「ブドウについて」『果樹』71 (10), 24-27.
- 6) 本間貴司 (2022) 「スマート農業技術の現地実証と社会実装 (II) 直売イチゴ経営におけるスマート農業技術を活用したデータ駆動型高収益経営体系の実証」『JATAFFジャーナル』10 (11), 34-37.
- 7) 松本航大、奥山洋一郎、枚田邦宏 (2019) 「タケノコ生産における担い手確保の課題: 鹿児島県さつま町の事例から」『鹿児島大学農学部演習林研究報告』44, 17-22.

【地域教育実践報告】

管理栄養士養成課程に在籍する学生および管理栄養士有資格 大学院生による埼玉県民への魚食推進食育活動

——アトレマルヒロ2023アカデミックフェスティバルにおける実践報告——

深谷睦*・中里見真紀*・立花千聖**・真野博***・内田博之***

キーワード：魚食推進、食育、管理栄養士、埼玉県、健康増進

1. はじめに

埼玉県は、海に面していない内陸県、いわゆる「海なし県」であり、海あり県と比較すると県民の魚への関心が低いように感じる。我々が以前、比企郡ときがわ町の小中学生を対象に実施した給食アンケートでは、きれいな食べ物として「魚」が最も多く挙げられた^{1,2)}。

魚には、EPA（エイコサペンタエン酸）やDHA（ドコサヘキサエン酸）などの他の食品には含まれない良質なアブラが多く含まれる。これらのアブラは健康リスクを軽減すると報告されていることから^{3,4)}、医療栄養学科では、地域住民の方々に魚をたくさん（毎日、現在の摂取量にプラス50g）食べてもらうことを目指した「魚食推進活動」に取り組んでいる。

今回、埼玉県民への魚食推進を目的とした食育活動の一環として、アトレマルヒロ（川越市）において開催された「アカデミックフェスティバル」に参加したので報告する。

2. 埼玉県民への魚食推進食育活動

2.1 「おさかなレシピ」の考案

埼玉県民をはじめとする多くの方々に魚料理に対する親しみを持っていただくことを目指した「魚のレシピ集」の配布を考え、魚を用いたオリジナルレシピを考案することとした。また、今回はアトレマルヒロで配布することから、店内の鮮魚専門店「魚力」に日常的に取り扱いの多い魚種を事前に伺い、レシピ考案の際の参考にした。

レシピを考案するにあたり、薬学部医療栄養学科の3年生を中心に学生を募集したところ、3年生9人（3グループ）、4年生2人が参加した。これらのメンバーで考案、試作、写真撮影、試食をし、完成したレシピは「かつおの和風ハンバーグ」、「こまつなとしらすの炊き込みご飯」、「ホタルイカとそら豆のペペロンチーノ」、「かれいのごまダレかけ」、「銀だらの梅ホイル焼き」、「サバのさっぱりサラサラ冷しうどん」、「しらすチーズスティック」、「あゆ飯」、「メヒカリの煮つけ」、「ぶりのみそ照

* 城西大学薬学部医療栄養学科 助手

** 城西大学薬学部医療栄養学科 3年

*** 城西大学薬学部医療栄養学科 教授

り」の計10種となった(図2.1)。考案したレシピの中には、アトレマルヒロ「魚力」での取り扱いの多い魚種を用いたもののほか、手軽に調理できるような詰を用いたもの、加熱工程のないものもあり、多くの工夫が感じられる仕上がりとなった。



図2.1 学生が考案したレシピ(一部)
 上段 左:「こまつなとしらすの炊き込みご飯」 中央:「ホタルイカとそら豆のペペロンチーノ」 右:「かれいのごまダレかけ」
 下段 左:「銀だらの梅オイル焼き」 中央:「サバのさっぱりサラサラ冷しうどん」 右:「しらすチーズスティック」

各レシピには、「作り方」のみならず、「ポイント」や「栄養価」を記載した。栄養価は栄養計算ソフトを用いて算出し、「エネルギー」、「炭水化物」、「たんぱく質」、「脂質」、「食塩相当量」のほか、魚に特異的な有用成分である「n-3系脂肪酸」、「EPA」、「DHA」の計8項目について掲載した。また、レシピ集の前半には「魚の有用性」についての項を加えた。

2.2 イベント当日の魚食推進食育活動

川越市にある百貨店のアトレマルヒロにおいて、2023年4月29日～5月7日まで「アカデミックフェスティバル」が開催された。「アカデミックフェスティバル」は、東武東上線沿線上を中心とする埼玉県内の大学や短期大学・専門学校など計10校が参加し、各校の学生や生徒が来場者へ日頃の取り組みや研究成果の展示、体験会、ワークショップ等を行うイベントである。

我々、城西大学薬学部医療栄養学科のグループでは、4月29日(土・祝)に「お魚を食べよう」をテーマとした魚食推進食育を行った(図2.2)。イベント当日は、管理栄養士有資格者の大学院生(薬学研究科医療栄養学専攻)5人、医療栄養学科の教員4人がスタッフとして参加し、「魚を使ったレシピ集の配布」、「血管健康チェック」、「魚の好き嫌いアンケート」等を実施した。

図2.2 アカデミックフェスティバルのチラシ

2階駅側入り口が我々のブースであり、お客様の通りが多いエリアであった。魚のパネルや模型、ポスターなどの食育媒体、ぬいぐるみ、ペーパークラフト等を展示し、視覚的に魚への関心が高まるよう工夫した(図2.3)。

ブースの周辺を通行するお客様に声掛けし、「魚を使ったレシピ集の配布」を行った。レシピ集は、昼過ぎに用意していた500部すべての配布

を終えるほど好評だった。「魚を食べようとは思いうけど、どうしたらおいしく食べられるかわからなかったから、こういうレシピ集があると助かる。」や「これを参考に今晚作ってみるわね!」、「どれもおいしそうね!」といった嬉しい声を聞くことができた。

また、魚食習慣には血管の健康(心血管疾患)との関わりがあることから、血圧・血管年齢や体内糖化度の測定、血流の観察ができる「血管健康チェック」コーナーを設けた。「血管健康チェック」コーナーでは、各種測定にとどまらず、測定の結果に基づく「食事のアドバイス」や日常での「食事相談」を管理栄養士有資格者の大学院生を中心に実施し、のべ300名程度の方が来場した。

「魚の好き嫌いアンケート」については200名以上の回答を得ることができた(2.3節参照)。

ブースには医療栄養学科の在學生や卒業生、城西大学の卒業生らの姿も多くみられた。



図2.3 左:ブースの展示
右:用意したペーパークラフト



図2.4 イベント当日の様子

2.3 「おさかなアンケート」について

魚の嗜好調査として「魚の好き嫌い」および「好きな魚」についてのアンケートを実施した。「魚

の好き嫌い」については、「あなたは、お魚好きですか?」と記したボードを準備し、「ダイスキ」、「スキ」、「あまりスキじゃない」、「キライ…」の4段階、および年代（「～中学生」、「高校生～64歳」、「65歳～」の3段階）のあてはまるところにシールを貼ってもら

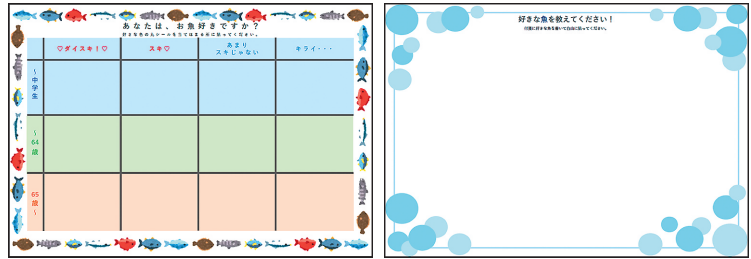


図2.5 作成したおさかなアンケートのボード
左：「魚の好き嫌い」 右：「好きな魚」

う形式とした。一方、「好きな魚」についての調査は、好きな魚（複数回答可）を自身で付箋に記入もしくはスタッフが聞き取り付箋に記入し、ボードに貼付する形式とした（図2.5）。

イベント終了後、医療栄養学科の3年生とともに集計した。「魚の好き嫌い」については289名（有効回答280名）、「好きな魚」については、223名（有効回答117名）からの協力が得られ、どちらも来場者の回答によりボードが埋め尽くされる程であった（図2.6）。



図2.6 イベント終了時の「おさかなアンケート」のボード

「魚の好き嫌い」では、各年代とも「ダイスキ」と回答した人が最も多かった。「スキ」の回答とあわせると、約90%の人が魚を好んでいることが明らかとなった（図2.7）。

「好きな魚」では、「マグロ」を挙げた人が最も多く47人、次いで「サーモン（35人）」、「サケ（35人）」が多く挙げた。「サバ（20人）」、「アジ（17人）」、「サンマ（16人）」、「タイ（12人）」、「ブリ（10人）」、「エビ（9人）」、「カツオ（8人）」が続いた。

あなたは、お魚好きですか？

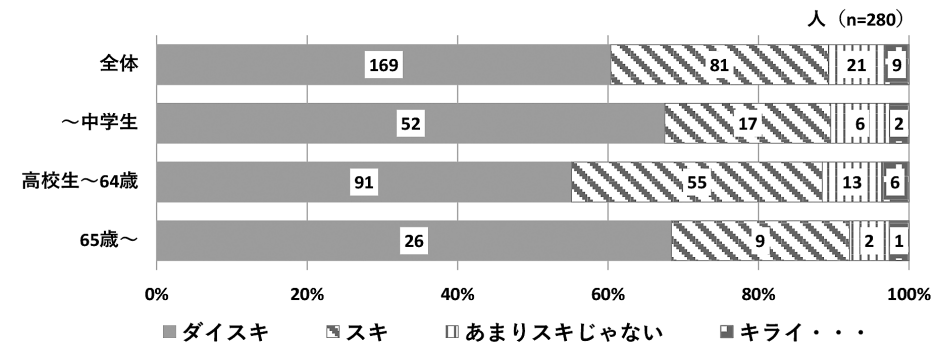


図2.7 「魚の好き嫌い」アンケートの結果

2.4 イベントに参加して

今回のイベント参加は学生にとって、日常の講義や実習での学びをアウトプットする貴重な機会となったことだろう。また、イベント当日のたくさんの参加者の方々との交流もよい経験となったに違いない。

「レシピの考案」と「アンケート集計」に携わった3年生の感想：

「私は幼い頃、お刺身は好きだったが、焼き魚や煮魚はあまり得意ではなかった。しかし、今ではお刺身も焼き魚も煮魚も美味しいと感じるようになった。そんな幼い頃、そして今でも母に作って欲しいと自らお願いをするほど大好きな魚料理「マグロのハンバーグ」をこのイベントを機に知ってもらい、ご家庭で是非作って食べて頂きたいと思い参加した。


今回イベントを行ったアトレマルヒロさんでは「かつお」をよく取り扱っているということで、かつおバージョンにアレンジして試作し、マグロのハンバーグ同様美味しく作ることが出来たため紹介させていただいた(図2.8)。お豆腐を入れることで柔らかく小さい子からお年寄りの方まで食べやすいよう工夫した。また、大葉と大根おろしと共に食べることでさっぱり食べることができるようにした。

他のグループのお魚料理を試食し、初めて食べる料理、とても美味しい料理が、数多くあった。また、魚独特なおいや味を食べやすくする工夫も学ぶことが出来、このようなイベントを機に魚好きの方も苦手な方も新しいレシピに触れ、是非魚を食べるきっかけになって貰えると嬉しいと感じた。(医療栄養学科3年 立花千聖)

「レシピ考案」に参加した3年生(図2.9)からの感想：

「今回のレシピ考案では、様々な案を出し合い、少し変わった味付けに工夫し、学生らしい斬新なアイデアで挑戦し、多くの方が調理しやすいレシピに仕上げることができた。実際に料理を作り、味付けや見栄えなども確認して調整し、栄養価計算でEPAやDHAの量までレシピ集で示せるのは、栄養学を学ぶ医療栄養学科生だからできることだと思った。これらの体験を通して魚を食べることの大切さを学ぶと同時に、グループのみんなと協力して何か一つのものを作り上げることの達成感を感じることができた。普段の大学内での実習とは違い和気あいあいとできたのもとても良い思い出になった。(医療栄養学科3年 西川青海)」

かつおの和風ハンバーグ



【5人分】
 かつお・・・500g
 玉ねぎ・・・1個
 木綿豆腐・・・100g
 味噌・・・1個
 味噌・・・大さじ1
 小麦粉・・・大さじ1
 片栗粉・・・大さじ1
 大葉・大根おろし・味噌・・・お好みで

①かつお、玉ねぎをフードプロセッサーにかける。(フードプロセッサーがない場合はかつお、玉ねぎをみじん切りにする)
 ②1をボールにうつし、水切りした木綿豆腐と味噌を混ぜよく混ぜる。
 ③フライパンに油(分量外)を熱し、ハンバーグ型に成形した餅を煎焼する。
 ④大葉、大根おろしをお好みで味噌ぽんをかけて完成。

まぐろのハンバーグを家で食べており、今回「アトレマルヒロ」さんではかつおを取り扱っているというのを聞いて、かつおバージョンで作ってみました！
 レシピ考案者：
 医療栄養学科3年 立花さん・関さん

エネルギー	炭水化物	たんぱく質	脂質	食塩相当量	n-3系脂肪酸	EPA	DHA
272 kcal	6.3 g	29.5 g	4.8 g	7.6 g	0.17 g	39 mg	120 mg

図2.8 立花らが作成したレシピ



図2.9 レシピ考案に参加した学生(西川：中央)

「イベント当日」に参加した大学院生（図2.10）からの感想：

「少しでも多くの人に栄養について興味を持っていただけるよう、大学での学びや経験を生かし、工夫して説明することができた。また、久々の課外活動でもあり、子どもからお年寄りまでの方々と接することの楽しさを改めて感じ、非常に充実した時間を過ごすことができた。（医療栄養学専攻修士2年 管理栄養士 安部滯音）」

「私にとって、管理栄養士として初めての栄養指導となった。相手の食事に対する好みや考えを汲み取ることに重きを置いて話をすることが出来たと思う。話が盛りあがることもしばしばあった。今回、お話しした方が魚を食べることや食事に興味を持つことに繋がると嬉しい。（医療栄養学専攻修士1年 管理栄養士 石井大成）」

「幅広い年齢の方に、魚を通して食事の楽しさや大切さを知っていただける機会になり良かった。（医療栄養学専攻修士1年 管理栄養士 石島太子郎）」

「毛細血管の観察を担当し、徐々にうまく対応できるようになった。お客様と話の余裕をもって接することができるようになり、学外で良い経験ができた。（医療栄養学専攻修士1年 管理栄養士 石関八風）」

「普段使わないような様々な測定機器に触れることができた。イベントに来てくださった小さい子から90代の方までほぼ全世代の人とお話した際に、考え方や悩みなどに各世代ならではの特色が現れていて、とても面白く、またコミュニケーション能力が飛躍的に上がった。参加してみて良かったと改めて感じた。とても良い経験となった。（医療栄養学専攻修士1年 管理栄養士 吉田怜央）」



図2.10 当日に参加した大学院生ら

3. おわりに

本イベントへの参加により、「魚食推進」を通じて埼玉県民を中心とした人々の健康の維持増進に少しでも貢献できたのであれば嬉しく思う。また、学生の本イベントへの参加は、地域の人々に対する「食育活動」に携わることのできる大変貴重な経験であり、管理栄養士としての将来の活躍に繋がる有意義なものとなったことであろう。

今後も地域住民の健康の維持増進および学生教育に携わっていきたい。

参考文献

- 1) 深谷睦ら (2022) 「ときがわ町立小・中学校における給食の残食調査の解析－学校給食センターの依頼を受けて－」『地域と大学 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』2, 35-46.
- 2) -埼玉県ときがわ町-学校給食等アンケート調査について-埼玉県ときがわ町- (<https://www.town.tokigawa.lg.jp/Info/2225>) (2024年1月15日).
- 3) M Nakasatomi, et al. (2018). Fish oil and fenofibrate inhibit pancreatic islet hypertrophy, and improve glucose and lipid metabolic dysfunctions with different ways in diabetic KK mice. *Obesity Research & Clinical Practice* 12 (1S1), 29-38.
- 4) M Nakasatomi, et al. (2022). Association of Fish and Omega-3 Fatty Acid Intake with Carotid Intima-Media Thickness in Middle-Aged to Elderly Japanese Men and Women: The Toon Health Study. *Nutrients* 3;14 (17): 3644.

【地域連携報告】

がんばれ、小学生。未来の博士を応援！

——水田記念図書館学生アドバイザーの活動報告——

大澤和真¹・清水勇斗²・本間大翔³・松下純也⁴
吉田瀬里菜⁵・渡部拓真⁶・山口直美⁷

キーワード：公共図書館、城西大学水田記念図書館学生アドバイザー、小学生、図書館を使った調べる学習コンクール

1. はじめに

本学には創立者故水田三喜男初代理事長の偉業を顕彰して「水田記念図書館」（以下、「図書館」）と命名された、大学図書館がある。図書館は1978年8月にそれまで分置されていた人文・社会科学系と自然科学系の各図書室を統合し、キャンパスの中央に大学の中枢の象徴として建設された。その後1993年には、蔵書数の増加と情報化時代に対応する機能を備えるための改装を行い、2008年には5階、6階、9階を閲覧席とグループ学習室に改装、2018年には7階、8階をラーニングコモンズに改装し、現在の姿となった。

学生アドバイザー制度は、2012年に学生が自らの経験を生かし、学生に寄り添ったアドバイスをすることを目的に成立された。教員の推薦を受けた学生が図書館長に委嘱され、「図書館学生アドバイザー」（以下「学生アドバイザー」）として、図書館1階、3階、7階の相談席に常駐し、図書館利用や資料検索のサポートを行っている。文理を問わず、様々な学部の上級学生と大学院生が在籍しており、2023年度は18名のメンバーが業務にあたっている。主な業務である学習支援では様々な学生から相談を受け、時には図書館職員と連携を図りながら、学生が図書館を快適に使えるように、また大学生活を不安なく送れるように相談に答えている。その他、毎週行っているアドバイザー会議では、相談内容を共有し対応についての振り返りを図書館員と共に行い、より質の高い相談対応ができるようにしている。

この業務と並行して、イベントの企画や運営も行っていて、季節に合わせて図書館内を装飾したり、おすすめ本を選書しPOPと共に展示したりしている。学生アドバイザーが企画しているイベントのひとつに、ライブラリーラウンジがある。このイベントは「学部・学科を超えた交流を図る」ことを

-
- 1 城西大学大学院理学研究科物質科学専攻2年
 - 2 城西大学経済学部経済学科3年
 - 3 城西大学経済学部経済学科4年
 - 4 城西大学経営学部マネジメント総合学科4年
 - 5 城西大学現代政策学部社会経済システム学科3年
 - 6 城西大学経営学部マネジメント総合学科3年
 - 7 城西大学水田記念図書館事務職員

目的として2014年から始まり、時には図書館を飛び出し、大学構内で多様なジャンルのイベントを計26回（2023年12月現在）にわたり開催してきた。5学部からなる総合大学の強みを生かし、地域の方や学生、教職員に協力いただき、ユニークな企画を実施することで、図書館や学生アドバイザーのことを知ってもらい、図書館をより多くの方に利用してもらう機会になればと取り組んでいる。

2023年7月下旬から8月上旬にかけて地域連携の重要な活動として、坂戸市立図書館における「図書館を使った調べる学習コンクール応援講座」を実施した。本稿ではこの活動の様子を報告するとともに、このイベントを客観的に分析し、今後の学生アドバイザーの活動がより有意義なものとなるようにつなげていく。

2. 図書館を使った調べる学習コンクール応援講座

2.1 経緯とコンクールについて

令和4年度の坂戸市立図書館協議会において、委員である本学図書館職員に「図書館を使った調べる学習コンクールに向けた講座を学生アドバイザーにお願いしたい」と打診が入ったのが始まりだった。

この「図書館を使った調べる学習コンクール」とは、公益財団法人図書館振興財団が主催する学習普及を目的とした取り組みで、「調べる学習部門」、「調べる学習支援・指導部門」があり、小学生や高校生だけでなく、学校や公共図書館に所属する個人や団体も応募することができる。このコンクールは全国コンクールの前に地域コンクールが開催され、自分の住む地域でコンクールが開催される場合は地域コンクールに応募しなければならない。埼玉県坂戸市では坂戸市立図書館主催の「第10回坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」が開催され、今回はこの坂戸市のコンクールへの応募を目指して学習する小学生を対象に応援講座を開講した。坂戸市のコンクールでは「図書館を使った調査・研究（調べる）学習の普及」、「図書館の資料をはじめ様々な情報を調べる学習を通じて、児童・生徒が自ら考え、判断し、表現する力を育む」、「また、その活動を通して坂戸市の公共・学校図書館での調べ方を体得し、有効に活用する力を養う」の4点が開催の目的とされた⁸。2022年もこの講座は開講されたが、その際には坂戸市、あるいは坂戸市近辺に住む異なる大学の学生が講師を務めた。2022年の講座は好評だったそうだが、「所属する大学が異なり、大学生間でのスケジュール調整や準備が困難だった」、「2023年も継続して講師を依頼することが難しい」、「2024年以降も継続して講師をすることができる団体に講師を依頼したい」という坂戸市立図書館の要望が本学の図書館を通じて学生アドバイザーに伝えられた。応援講座を引き受けるかについて学生アドバイザー会議で話し合い、コロナ禍により地域での活動が制限されていた後ということもあり、図書館の学生アドバイザーとして、城西大学の学生として「地域社会に貢献したい、大学の地元で活躍したい」という気持ちがメンバー内で一致し、引き受けることとなった。

8 第10回「坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」募集要項に掲載されていた坂戸市独自のコンクール目的。

2.2 準備

7月22日（土）に財団からの講師による講座初日が決まっていたので、4月28日（金）に本学図書館において坂戸市立図書館との会議を行い、講座の日程、趣旨や目的、学生アドバイザーに求める指導内容の確認などを行った。応募にあたっての作品のテーマは自由であり、「身近での疑問、興味に感じていることをテーマとする小学生が多い」、作品形態も自由だが、「B4サイズまでの大きさの紙に50ページ程の冊子形態の作品が多い」などの情報を頂いた。昨年の講座では、準備が足らず、指導内容の共有が出来ていなかったため、参加者の作品の構成、文言、言い回しが似たものになってしまった。それにより、作品に個性が見いだせなかったことが昨年度の改善点として挙げられた。この課題を踏まえたうえで、昨年の講座の内容は意識せず、我々ならではの方法により小学生の成長につながる思い出にしたいという、今年度の方向性が定まった。

まずは、講座当日に小学生へ配布する資料作りから始めた。参加対象が3年生から6年生と学年の幅が広いことから、漢字や言い回しは理解しやすい言葉を使い、誰が見ても情報が伝わる資料作りを意識した。また、著作権、肖像権、情報の信憑性、情報の引用など作品を作るうえで避けては通れない注意点を小学生にわかりやすく伝えるにはどうすればよいかなど、難しい点について検討した。最終的には、資料に載せる情報は限りなく少なくし、なるべくかみ砕いた言葉遣いを心掛け、資料を作成した。

本講座の最終的な目標は「小学生が自主的に学習できるようにすること」であり、「作品を完成させること」ではないということも学生アドバイザー間で共有した。本講座で小学生が「調べる力、学ぶ力、情報をまとめる力」を育成できるように心掛け、必要に応じて宿題や課題を出し次回へつなげるヒントを与えるなど、講座外での時間で学習できるようにすることも共有した。

小学生と信頼関係を築く、質問に答えやすくするという観点から、4日間を通して学生アドバイザーはできるだけ同じ小学生を担当するようにスケジュールを立てた。担当する学生アドバイザーが変わる場合は事前に引継ぎを行い、小学生に影響が出ないようにすることも共有した。



図2.1 調べる学習コンクール応援講座で配布した冊子の一部

2.3 令和5（2023）年度の実施概要

- 【講座名】 楽しもう！図書館を使った調べる学習コンクール応援講座
- 【日程】 2023年7月22日（土）、7月25日（火）、7月30日（日）、8月4日（金）
- 【時間】 9：30～12：00 但し、7月22日（土）のみ15：15～16：15
- 【場所】 坂戸市立図書館 2階視聴覚室
- 【連携主催】 坂戸市立図書館
- 【対象】 小学3年生～6年生
- 【参加者数】 小学生7名、学生アドバイザー11名、教職員6名（講師、坂戸市、城西大学）

※2023年7月22日（土）の財団からの講師 中村伸子氏による講義後に引き継ぐ形で実施

2.4 講座の実施

講座の日程も決まり、学生アドバイザーの参加メンバーと7人の小学生の参加が決まった。参加する小学生が思っていたより少なかったため、1人の小学生に1人の学生アドバイザーが担当するマンツーマンで計4日間の活動を行なった。

1日目は、財団からの講師による講座を小学生と一緒に受講したのち、応援講座を開始した。はじめに、事前に用意したマインドマップを使い、実際に調べるテーマを決めることから始めた。学生アドバイザーが小学生の興味のあるトピックを引き出せるように積極的にコミュニケーションをとりながら作業を進めたが、普段、接する機会のない小学生と大学生だったため、学生アドバイザー、小学生の両者が緊張していた。そのため、1日目はコミュニケーションをとることで終わり、作業が進まないペアが多くいた。また、3年生から6年生と学年での差があるため作業の進捗に差が生まれてしまった。その日の振り返りでもコミュニケーションや進捗状況の差が2日目以降の課題として挙げられた。



図2.2 財団講師による講座を受講



図2.3 調べる学習コンクール応援講座の様子

2日目は、宿題を設定して進捗に合わせた作業を開始した。1日目の反省を生かし、小学生との積極的なコミュニケーションと学生アドバイザー間での進捗状況の共有を図りながら作業に取り組んだ。多くのペアが1日目のマインドマップを使って決定したテーマをもとに図書館で参考になる資料を探す作業を行った。図書館の限られた資料からテーマに合った資料を見つけることに小学生は苦戦していたが、学生アドバイザーがヒントを与えることで少しずつ資料を見つけられるようになっていった。

中には、資料が十分に見つけられなかったためにテーマを修正するペアもいたが、順調に作業が進行しているペアがほとんどだった。次に資料の内容をまとめ、調べた内容をピックアップする作業を行った。これらの作業は、学生アドバイザーが事前に用意した調査用ワークシートを使いながら行われた。小学生は、このワークシートを使うことで本の基本的な情報だけでなく、本を読んでわかったことや思ったこと、さらに深掘りしたい内容を簡単にまとめることができた。また、コミュニケーションがとれるようになったことでスムーズに作業が進行するようになった。その甲斐もあり、3日目や4日目には実際に内容をまとめてコンクールに出す作品の作成に取り掛かっている小学生もいた。



図2.4 PCで館内の本を検索中



図2.5 本を探している様子

最終日の4日目の講座後には表彰式を行い、4日間頑張った小学生へメダルを贈呈し記念撮影を行った。メダルの裏には、小学生の頑張りを称え、楽しかった思い出となるよう、担当した学生アドバイザーからのメッセージを記した。表彰式後も学生アドバイザーと小学生が楽しそうに談話をし、別れを惜しむペアも見受けられた。この様子から、小学生にとって大学生との活動が学習能力向上以上に対人関係能力、コミュニケーション能力にも影響を与えたと言える。

4日間を終えた時点では、それぞれの小学生の学年や取り組み方により、作品の進捗状況に差が出た。作品が完成間近の人もいれば、本の情報をまとめている途中の人もいた。進捗状況はそれぞれだが、小学生、学生アドバイザーともに充実した4日間を終えることができた。



図2.6 メッセージ入りのメダル



図2.7 メダルのプレゼント

3. 評価

「図書館を使った調べる学習コンクール応援講座」に参加した小学生と学生アドバイザーに対して、後日アンケートを実施した⁹。ここではその結果の一部について報告したい。

3.1 小学生の声（アンケートによる）

表1：小学生アンケート結果

2023年度 楽しもう！図書館を使った調べる学習コンクール 応援講座 アンケート					
1. イベントの感想を教えてね！					
①楽しかったこと	本探し、調べたこと、切ってはったこと。	いろいろな大学生とおしゃべりしたこと。	目的に合った本をさがすこと。	・話してくれたこと。 ・インタビューすること。	文を書いて、どんどん自分の作品になっていく所。
②役に立ったこと	こんどまたこれをやる時のやり方が分かった。	〇〇のことを知れた。	調べる時にはどのような感じで行うかについての手順	・本のさがし方 ・テーマの決め方 ・大学生が話してくれたこと全部	文を書いていくコツ。
③大変だったこと	テーマに合った本をさがすこと。	調べてかきうつすこと。	どこをメモすれば、調べたい事について知れるか考えること。	・まとめること ・〇〇の資料、本探し ・タイトル、テーマを考える。	たくさんの字をかいて文を作ることが大変だった。
2. 大学生との活動はどうだった？					
①わかりやすかったこと	説明がわかりやすかった。	本番にはるとき、どこになにをはればいいのか。	ぎもんに思ったことやわからなかった所をていねいに説明してくれたこと。	大学生のお兄さん、お姉さんたちの説明。 (特に、テーマの決め方)	こうやって書くといいんじゃない、とおしえてくれて、わかりやすかった。
②もっと手伝ってほしかったこと	〇〇のかたちをもっと手伝ってほしかった。	分かりやすくおしえてほしい。	なし	なし	行くかい数をもっと増やしてほしかった。
3. 大学生とどんなイベントをしたい？					
	もっとむずかしいことをしらせられるイベントをしたい。	またこれをしたい。	おすすめの本をしょうかいしあう。	・スポーツ大会 ・お祭り ・楽しいこと	・本こうかんイベント ・本作りをする。
※小学生7名のアンケートを抜粋、一部加工して作成					

上記の表から、様々な苦勞がありながらも、本講座に対し、肯定的な感想をもった小学生が多くいることが確認できた。なかでも、「大学生と話すことが楽しかった」、「大学生が話してくれた全部が役に立った」、「大学生の説明がわかりやすかった」など、大学生との関わりについての肯定的な感想が目立った。さらに、講習回数を増やしてほしいという意見からもわかる通り学習へのモチベーションを引き出し、目的や知りたいことに対する調べ方や知識を得ることの喜びを小学生に理解してもらえたことが本アンケートの結果からも理解できる。また、「大学生とどんなイベントをしたいか」という質問に対しては、今回の講座の継続や新規の別ジャンルのイベントの開催を求める声が多く、

9 アンケートは小学生用と学生アドバイザー用の2種類を用意した。前者には楽しかったことや大変だったことについての項目、後者は小学生との活動で感じたことや会話をする上で工夫した点、改善点などについての項目を設けた。

今後も大学生と交流したいという気持ちを知ることができた。

3.2 学生アドバイザーの声（アンケートによる）

[分かりやすく伝えるために工夫したこと]

- ・伝える際の表現。ゆったりと話した。難しい単語は使わない
- ・小学生目線で話す
- ・話していて楽しいと思えるような話をする
- ・やらなくてはならないことをメモに書いた

[大変だったことや難しいと感じたこと]

- ・興味ややる気を出させること、集中力を維持させること
- ・大学生に委縮し伸び伸び作業できていない子がいた
- ・何のためにこの学習をしているか理解させること
- ・アドバイスの線引き

[講座の必要回数]

- ・4回、5回、6回、8回

[感じたこと・得たこと]

- ・本を読んだ感想や何気ない発言が奇想天外で面白かった
- ・興味を引くことの大変さ
- ・小学生と交流することの楽しさ
- ・感謝の言葉をもらい頑張ってきてよかったと思えたこと

[講座を次年度行う場合の改善点など]

- ・やるべきことをリスト化しそれぞれのペースで作業を進める
- ・回数をもう少し増やす
- ・開始前にコミュニケーションをとる
- ・手助けの範囲を予め考えておく

[その他]

- ・小学生の人数が多い場合はマンツーマン形式ではなくアドバイザーが巡回してその都度対応する形式にする

※学生アドバイザー11人のアンケートから一部抜粋

上記の意見から、小学生のテーマがバラエティに富んでおり、学生アドバイザーもどうサポートし

ていいか、迷いがあった人がいたことがわかった。また、「大学生に委縮し、伸び伸び作業できていない児童が散見した」、「小学生の興味を引くことの大変さを感じた」という声もあった。年齢が離れたなかでのコミュニケーションや手助けの範囲の線引きには苦勞した。それでも、小学生の学習力向上を目指し、懸命にサポートした経験は学生アドバイザー自身の大きな財産となった。小学生同様、全体的には本講座に対し、肯定的な意見が多く、次回以降の講座開催を見据え、多くの有意義な改善点が提示された。

4. 考察

上記で挙げた評価を基に考察を行う。「3. 評価」から2つの問題点が考えられた。

1つ目の問題点は、講座日数が足らなかったことである。参加者へのアンケートを見ても「回数を増やすべき」という意見が小学生と学生アドバイザーの両者に共通して挙げられた。今回は4日間の講座を行い、講座後の時間に小学生が「自らの力で」作品をまとめられるようにすることを目標にしていた。しかし、学年によって集中力が継続できないことや、それぞれの学年にあった本を探ることができず、作品の進捗状況に差が生まれた。それにより、最終日の講座で仕上げに取りかかることができた小学生は数人であった。完成させることが講座の目的ではないが、小学生が少しでも自主的な学習がしやすくなるように、講座回数を増やすなどして、より手厚いサポートが出来ればよかった。ただ、1回当たりの講座時間に関しては今回の時間（1回あたり、2時間半）がちょうどよいという意見が多く、小学生の集中力を考慮して、短時間で学習することが効果的と感じた学生アドバイザーが多かった。また、時間や回数にフォーカスするのではなく、限られた時間の中で小学生が「それぞれに合わせた目標を設置」し、ゴールを明確化することが大事だと感じた。そうすることにより学習意欲を掻き立て、モチベーション維持に繋がっていくと思われる。

2つ目の問題点は、小学生との関わり方である。学生アドバイザーへのアンケートでは、「興味を引くことや働きかけることが大変で、小学校の教職員の方々に対して尊敬の気持ちが芽生えた」、「普段は小学生と接する機会が無いことから言葉選びには苦勞したが、同時に交流することの楽しさを感じることができた」など、小学生との関わりについて苦勞したという回答が挙げられていた。小学生と話す中で、複雑な言葉を使用しないこと、早口にならないこと、話す態度や話し方など、普段あまり気につけないことに気を遣うことが多くあった。また、小学生側も大学生の存在に委縮し、思うように活動ができていない様子の児童もいた。そのため、小学生とのコミュニケーションが難しかったと言う声が多く挙がった。ただ、小学生と学生アドバイザーの両者が「話すことができて楽しかった」という意見を多く挙げており、全体を通して、コミュニケーションに苦戦しながらも、交流を楽しんでいる様子がアンケートからも窺える。コミュニケーションに苦戦しないようにするには、講座前に小学生とレクリエーションなどの交流の時間を作る、講座とは別に交流の機会を作ることなどが挙げられ、小学生と接する機会を増やすことが重要であると感じた。

5. おわりに

事前情報が少なくどのように進めたらよいか分からない中で、何が小学生にとって最善かを学生アドバイザーが一丸となって考えながら臨んだ本講座であった。初めての試みで、勝手が分からない中での準備や、講座での対応は大変だったが、普段交流の少ない小学生への学習支援は、同年代の学生や社会人と関わるだけではできない経験や苦労を味わい、成長できる時間だった。自分たち大学生が当たり前を理解できることを小学生に教える難しさや、小学生の興味関心や個性を引き立てながら適切に介入しサポートすることの難しさを、参加した学生アドバイザー全員が感じた。これらの経験から、相手の目線に立って歩み寄る姿勢や、自分の型にはめず、興味関心を尊重して好奇心を掻き立てる柔軟な考え方を培うことができた。

今回の評価できる点として、最大16歳差がある中で学生アドバイザーが小学生と向かい合い、説明や作業配分を行いスムーズに学習支援を行えるようにしたことが挙げられる。さらに、本講座受講者のうち4名が「第10回坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」（今年は11校の学校から54作品が応募された）において入選を果たすことができた。結果が全てではないが、私たちがサポートした小学生が受賞できたことは大変嬉しく思うと同時に、応援講座の成果があったことを認識することができた。

講座から数か月が経ち、季節が冬へと移り変わった2023年12月某日、坂戸市立図書館のご厚意により、入賞作品のレプリカを拝見する機会を頂いた。参加した小学生全員が講座内で完成させることができなかつたため、学生アドバイザー一同が作品に関心を示していた。レプリカ作品を見て、学生アドバイザーのほとんどがその完成度の高さに驚いた。作品が見やすくまとまっているのはもちろんだが、作品に記載されている学習内容の質も高く、その資料を読んだ学生アドバイザーが知見を得られるほどの作品が多かった。作品の中には、家庭で実験を行ったり、埼玉県内、県外の遠方へ出向き、現地調査を行ったり、調べているテーマに関する人物のもとへ行きインタビューしていた作品があった。これは小学生自身が自分のテーマに対し、主体的に学びを深めている証拠であり、ここまでアクティブに学習を進めていたことに感心した。入賞した小学生を担当した学生アドバイザーからは、「講座終了時の状態とは見違えるほど、作品が仕上がっていて驚いた」、「自分のアドバイスが作品に反映されていて嬉しい」、「調べる情報をまとめる段階で講座が終わってしまい、作品は初めて見たが、講座時に調べた情報を見やすく、わかりやすくまとめられている」などの意見が挙がった。この意見から、小学生の多くが本講座の趣旨であった、「小学生が自主的な学習をできるようにする」ことが体現できたと言える。講座の時間内で学習のコツや仕方を学び、それを講座外の時間で実践するという私たちが理想としていた学習を展開することが出来た。

本講座により実際に坂戸市立図書館を通して地域の小学生との交流ができた点は、学生アドバイザーにとって大変有意義だったと考える。前例のなかった公立図書館との合同企画により学生アドバイザーの活動の幅が広がったことはもちろんであり、私たちの今後の活動についての課題や問題点、次回開催にあたっての改善点も多く発見することができた。

本講座の経験を基に、今後も地域交流できる企画を考案していき、実際に実現させていきたいと考

えている。本稿を過去のデータとして記録しておくだけにとどまらず、今後の学生アドバイザー活動の糧としていきたい。

参考URL

<インターネット>

- 1) 公益財団法人図書館振興財団 『図書館を使った調べる学習コンクール 募集要項』
(<https://concourstoshokan.or.jp/youkou/>) (2024年1月10日).
- 2) 城西大学水田記念図書館 (<https://libopac.josai.ac.jp>) (2024年1月10日).
- 3) 城西大学水田記念図書館 学生アドバイザー
(<https://libopac.josai.ac.jp/apply/adviser.html>) (2024年1月10日).

【地域情報】

戦時の奥武蔵観光

加藤寛之*

キーワード：太平洋戦争、奥武蔵、観光、旅行、ハイキング

1. はじめに

昭和10年代は日中戦争を含む太平洋戦争の時期であるとともに、ハイキング需要が高まった時でもある。戦争遂行のなかでも高いハイキング需要が続いており、この人気は戦況が旅行での鉄道利用を完全に停止させる状況となる太平洋戦争終盤まで続いた。

本稿は、ハイキングを中心とした奥武蔵の観光について、太平洋戦争中、特に対米開戦後についての著述や資料を収録して、それに説明を加えて自由な考察のためのヒントとすることを目的としている。整理した論述にしない理由は「12. どうとらえるのか」に記した。奥武蔵観光の太平洋戦争中の状況をまとめた著述は目にすることがないので、本稿がそれを探求されたい方の参考になれば幸いである。

なお、太平洋戦争中の社会状況と観光との関係を扱った論述や地域の調査事例はいくつかの先例があって、それらは奥武蔵の事例を考察する際の参考になる。本稿の参考にしたものを「13. 関連著作等と地域の調査事例」として末尾に挙げておく。

本稿は、形式にとらわれ展開がしばられないように、読みものとして記述している。時期的には日中戦争に始まり対米開戦後から終戦、地理的な範囲は現飯能市で主に吾野地区周辺と大雑把にとらえているが、出典の詳細情報や年号表記の統一、用語の定義などにこだわっていないこともご容赦いただきたい。戦前出版物からの引用の際は、文字の一部を新字や現代表記にしてある。画像は末尾にまとめ、比較しやすくした。

2. 昭和17年頃のハイキングに対する庶民感覚

逗子八郎「山野逍遥について」『武蔵野随筆』（文林堂双魚房、昭和17年）に、ハイキングと時代の要請との関係を説明した文章があるので抜粋する。昭和17年発行にもかかわらず、ここでは、ハイキングは自己の健康、体力の増進または情操の涵養を目指すものであって、安上がりで健康的と擁護している。そしてそれは国家目的に役立つために練成され、そのようにならねばならないとしているから、つまりハイキングは国の指針にもあう私的行為だと言っているようなものだ。時代背景には個人旅行の制限や鉄道輸送の逼迫があるのだが、個人ではまずいが集団旅行ならばよく、混雑していない

* 元城西大学広報課課長

鉄道支線等ならば鉄道にとっても望ましい、としている。国家レベルの必要とは異なり、幹線でない鉄道を利用したハイキングを擁護し推奨する立場である。

「一口に、登山と健歩（所謂ハイキング）とは、併称され、同じやうに取扱はれる事が多いのであるが、少し立ち入って考へる、この二つは、根本的に異なる要素をもっている事に気づく。健歩乃至山野の逍遥といふようなものは、主として自己の健康、体力の増進または情操の涵養といふことを目指して行はれ、いはば厚生に出発しているが」「登山は、厚生を目的とする所謂体育運動といふやうなものよりも、寧ろ、武道に近い。何となれば、体育運動は自己の生命を充養しようとするものであるに対し、武道は、自己の生命を脅かす不義不正のものあらば」「単に厚生といふやうな観点からいっても、健康運動が国民運動として取上げられてゐる今日、国民の健康を維持し、進んでその体力を増強するに就いて、道具も要らず、金もかからず特別の設備も亦必要としない健歩・山野逍遥程秀れたものはないといつてよい。」「この二三年來、国鉄、私鉄を通じ、激増の一途を辿る貨客のための輸送力は著しく窮屈になってきているから、無駄な旅行を慎むべきことは、国策輸送に協力する立場からも当然であるが、厚生のための、健全な意図をもつた山野逍遥や特に練成のための、真に祖国認識のための集団旅行ならば、行なはれてよい事は勿論であつて特に、それが国鉄私鉄を通じ、混雑しない支線等にコースを求めることは、今は鉄道にとっても望ましい事だらうと思ふ。」「この意味から、例えば東京を中心とした場合、さう大して遠出をせず、都心より乗車一時間乃至二時間位の半径を以つて包摂せらるる處の所謂武蔵野に、自然の幽趣を探るなど、此上なき心身の充養といはねばならない。」「ただ問題は、かくの如く充養された個人の精神と健康と情操が、単に個人のものとして留まってゐてはならないといふことである。今やすべて個人の力は国家目的に役立つために練成され、且そのやうに綜合集結されなければならない。」

登山に対する主張はさておき、ここで重要なことは「健歩・山野逍遥程秀れたものはない」、つまりハイキングは体力を増強すると擁護していることである。「例えば東京を中心とした場合、さう大して遠出をせず、都心より乗車一時間乃至二時間位の半径を以つて包摂せらるる處の所謂武蔵野に、自然の幽趣を探るなど、此上なき心身の充養といはねばならない」との主張は、もはや武蔵野へのハイキング勧誘である。しかも同書には逗子八郎本人による「奥武蔵に就いて」も収録されているのだ。

なお、このころには「徒歩旅行」という範疇もあった。『徒歩旅行』第5巻40号（昭和17年6月1日発行、日本徒歩旅行社）の森本次男「徒歩旅行に就いて」によれば、「徒歩旅行と云ふことは山野を歩くことである。」「我国に於いては一般に、登山と遊山（ピクニック）の中間的なものの様に考へられて居る」とある。このタイトルの雑誌があることそのことがハイキング人気を証明している。以下では、登山、徒歩旅行、ハイキングといった区別は論旨と関係が薄いので、拘らないことにする。

3. 国策を都合よく解釈する庶民感覚

さらに積極的な国策理解を述べた例が、『徒歩旅行』第5巻40号の碓井貫一「巻頭言」にある。該

当部分を転載する。

「この戦時下に当り厚生、文部両省は「先ず歩け」の標語に依り健康保持に登山やハイキングを勧め以って愈々頑強なる身体の養成に努めつつあるは吾等の最も喜ばしき次第である、この意味に於て夏はキャンプ生活もよろし冬のスキーもよろしく、将た其他凡ての運動競技をも此の際加速度にすすめ度いのである、畢竟するところ我皇軍の破竹の勢いも平素登山の訓練よろしきを得た結果であって敢て怪むるに足りない。」

もはや論旨の捻じ曲げに思える。当該誌の巻頭広告は体位向上各種運動用品をうたう日本屋運道具店で、誌面には「戦ひ抜くぞ大東亜戦」「体育に足並揃へ総進軍」とある。これもスポーツと国策が共存している。『徒歩旅行』第5巻39号（昭和17年5月1日発行、日本徒歩旅行社）の巻末広告には武蔵野電車と秩父電車が対向掲載してあり、戦時下であることを感じさせない。当該誌には両鉄道会社だけでなく他の鉄道会社、遊園地、観光バス、温泉旅館、駅弁屋など、旅の関連広告は多彩である。なお、〇〇電車と名乗ることは、動力が汽車でなく電車運行であることを顕示するための広告表現。

（本稿末尾 図3.1『徒歩旅行』5巻39号表3と対向頁の広告 参照）

4. 武蔵野鉄道の輸送実績

太平洋戦争中は、旅行熱が高く、戦争遂行の観点から国が旅行の自粛を要請するほどだった。このことは、白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書1305、1996年）や上田卓彌「戦時下における旅行制限とガイドブックについて」（『星稜論苑』第41号、2013年）が詳しい。

武蔵野鉄道（現：西武鉄道）の貨物量や旅客数等は、飯能市郷土館『西武池袋線飯能池袋間開通100周年記念 特別展 武蔵野鉄道開通』（飯能市郷土館、平成27年）に、武蔵野鉄道の営業報告書から作成したグラフがある。これで昭和10年ころから貨物量や旅客数等が急増していることが分かる。当該営業報告書は飯能市博物館がデータ所蔵している。

旅客について本文に以下の説明がある。

「武蔵野鉄道の営業報告書に、初めて「ハイキング」の言葉が登場するのは、昭和9（1934）年上期（第45回営業報告）のことで、」「これ以後、ハイキングコースを積極的に設定し、昭和11年には正丸峠ドライブウエーも開通し、昭和13年には正丸峠に宿泊施設である厚生道場を設置するなどの営業努力を行っている。昭和12年の日中戦争の勃発以後も国民の「銃後保健」の自覚によりハイキング客は増加を続け、昭和13年には厚生省、鉄道省、東京市観光課とともにハイキング奨励のPRをするなどし、同年にはハイキング熱の勃興とハイカーの未曾有の激増が報告されている。実際旅客収入、旅客数とも急激な増加を示している。ただし、昭和16年以降の異常な旅客数の増大（昭和20年は昭和15年と比較すると収入で2.8倍、旅客数で2.3倍）はそれだけが原因であったのかは不明である。夏季に奥武蔵キャンプ村、冬季にスキー場が設置されたのもこうした時期であった。」

貨物について本文に以下の説明がある。

「昭和12（1937）年には日中戦争が始まったが、戦争の遂行に不可欠でかつ輸入に頼っているガソリンの使用が制限されるようになると、貨物自動車の輸送が鉄道に振り替えられるようになっていった。昭和13年頃から収入、輸送量ともに大きく伸び始め、昭和19年には昭和13年と比較すると収入で2.1倍、貨物量で1.6倍に増加する。」

5. 武蔵野鉄道の天覧山駅開業と休止

「天覧山」駅は、武蔵野鉄道が「東飯能」駅と「高麗」駅の間、天覧山の東方に設けた駅。開業時の「東飯能」駅は市街地から遠い畑の中にある駅だったので、「天覧山」駅は八高線開業にともなう「東飯能」駅利用者の利便性を考えた観光客用の駅だと考えられる。駅は線路の天覧山側にホーム1本と駅舎があり、売店もあった。飯能市史編纂の資料である『八高線・武蔵野鉄道資料』（飯能市立図書館蔵）によれば、使用開始は昭和6年4月1日で昭和20年2月3日使用を休止（廃止は昭和29年10月10日）。飯能市街地の住民は「飯能」駅の使用が便利であり、「天覧山」駅は観光用以外の用途に乏しい。さすがに観光需要がなくなり不要不急の目的のための駅でもあることから使用休止したのだろうが、それでも昭和20年2月3日まで使用している。

6. 逼迫する輸送力と観光の自粛要請

「埼玉新聞」昭和18年12月17日 に、「不急の旅行や小荷物託送の自粛 翼賛県支部で実践事項決定」の記事がある。「年末年始の生活態度」の「自粛運動」として8項目をあげ、その八に

- 「八、年末年始の輸送に協力
- イ、遊樂旅行はもとより不急旅行は一切やめること
- ロ、贈答、買出その他の不急の荷物託送もやめること」

とある。「遊樂旅行はもとより不急旅行」が自粛を呼びかけるほどに行なわれていたことが分かる。だが、これで旅行は止まらない。「埼玉新聞」昭和19年3月30日 に、「必勝輸送力増強期し 旅行の自粛徹底化へ 全県民の卒先協力方を要望」「“決戦だ” この一年は 断然旅行を止めよ」がある。大政翼賛会中央本部と協力し「戦力増強並に防空疎開に必要な輸送を強化するため」「旅行の自粛徹底」「旅行の徹底的制限」を採択し、概ね100kmを超える遠距離旅行を制限している。この時点でも、自粛を強く要請するほどに遠距離旅行が行なわれていたのだ。その5か月後、「埼玉新聞」昭和19年8月14日 に「遠距離旅客を制限 買出部隊の自粛要望」がある。「本当にお墓詣りだけだらうかと疑いたくなる」遠距離旅客があり「殊にかうした連中の防空服装は全然念頭に入れてないかの如く観られる」状況だった。「旅行の自粛自戒を徹底的滲透」を要請するほど旅行熱は冷めていなかった。

この時点での強い制限は100kmを超える遠距離旅客であり、近距離は駅での発券枚数制限だった。

7. 武蔵野鉄道による厚生道場の建設

「厚生道場」は、ハイキング者向けに武蔵野鉄道が正丸峠に近い場所へ開設した休憩宿泊施設。戦後に改称し「ガーデンハウス」となったが「正丸峠」を冠して「正丸峠ガーデンハウス」と称することが普通。当該施設の呼称であるとともに、バンガローも併設された施設全体の呼称でもある。

この施設は昭和11年「正丸売店」の開業がその始まりで、同年11月15日の県道川越－秩父線の開通に合わせたものであろう。開通と同時に武蔵野鉄道によるバス運行が始まっている。武蔵野鉄道は武蔵野を探る会会報『むさしあぶみ』第27号（昭和11年12月1日）で「東京の人は、男でも、女でも老人でも、子供でも苦もなく頂上まで行ける」と紹介している。

「厚生道場」の名がある中心施設の竣工は昭和13年11月。藁葺の日本家屋で、奥武蔵ファンの宿泊所であり、豪華な山小屋だった。『徒歩旅行』第5巻38号（昭和17年4月1日発行、日本徒歩旅行社）の加藤一男「奥武蔵の山々（一）」に「厚生道場」について言及があり、「春と云っても山の早春はまだ寒い。冷い風にかじかんだ手を焙る為に道場の中に飛び込む事にしやう処道場は出来上つてから日の浅い実に其名に恥じない理想的な山小屋である囲炉裏を囲んで昼食を済ませたら」と上質な施設であることを記している。飯能地区の地元紙「文化新聞」昭和29年9月9日によれば、呼称は「真面目な名称をつけないと連れ込み宿のように誤解」されるので「厚生省が発足したのにちなんだ厚生道場と云う至って野暮臭い名称をつけた」のだという。

厚生道場は、坂倉登喜子『奥武蔵』登山地図帳23（山と溪谷社、昭和23年）に「戦後再び復活して」「戦後再び山の根拠地としてハイカーを迎える様になった」とあるので、太平洋戦争中のある期間に休業していたことがわかるが、休業時期は判然としない。なお坂倉登喜子『奥武蔵』には「厚生道場」に「ロック・ガーデン・ハウス」のルビがふられたところがある。戦後の進駐軍対応の呼称であろうか。これが「正丸峠ガーデンハウス」の呼称につながったのだろう。

（本稿末尾 図7.1『むさしあぶみ』第27号 参照）

8. ハイキングの勧誘を続ける武蔵野鉄道

武蔵野鉄道が太平洋戦争中も継続してハイキングの勧誘をしていることは、パンフレットで確認できる。

図8.1・図8.2は同一物の内外面。「厚生道場」とあるので、昭和13年11月以降の製作である。表紙に日の丸掲揚と皇居遥拝の方向を示す写真と、内面に質素な装いの女性の写真を使っているのだが、それ以外の写真は上品な装いでハイキングを楽しむ人たちであり、文章もハイキング情報のみである。つまり、戦時という世相を現しているのは写真2点のみである。

日の丸掲揚と皇居遥拝は、『徒歩旅行』第5巻39号の植松 威「五月の日光」にも山小屋の朝の行事で紹介されている。皇軍の武運長久と戦歿将士の英霊に感謝の祈念とあり、当該パンフレット写真もそれであろう。

このころ、今日でいう山ガールは、険しい山を含めて普通の存在になっていた。女性登山者については、『徒歩旅行』第5巻39号の吉野利三「健母養成と山 集団登山が最適」に次がある。

「近年は山に対する女性の憧れが著しく増してどこの山へ行っても必ず女性の登山者を見受けるやうになりました。」

図8.3・図8.4は同一物の内外面。「厚生道場」とあるので、これも昭和13年11月以降の製作である。表紙写真からうける印象では、図8.1・図8.2以前の製作にみえるが、図8.3・図8.4が後のようだ。「厚生道場」の宿泊料金はともに1泊50銭で同額だが、図8.4には新館が加わっている。交通のハイキング割引「正丸峠ドライブウエー」は図8.1が1円94銭で、図8.4が2円50銭であって、値上げしている。表紙の背景写真には上品な装いでハイキングを楽しむ人たちを使っているが、内面の文は「心身鍛錬」「志操涵養、心身鍛錬への境地へ進む可きではないでせうか、銃後の備へとして体位向上の強調される今日純良なる節操と、規律の下に質実強健なる気風を養ひ三千年の歴史を誇る光輝ある国土を認識してこそ、ハイキング本来の意義を発揚し得るものでありませう」と国策にそった文がある。国策に沿ったその文は昭和17年発行の逗子八郎「山野逍遥について」の論調と同じである。ただしその前後の文は行楽としてのハイキングへ誘うものである。

図8.5は、キャンプ村を増設していると分かるので、図8.3・図8.4よりもさらに後の製作であろう。表紙に色文字で目立つように「体位向上」「心身鍛錬」と入っている。図8.5の内面には、図8.1にある日の丸掲揚と皇居遥拝の方向を示す写真も使われている。

これら図8.1～図8.5の3点のパンフレットから、新館とかキャンプ村といった施設の充実が続いており、太平洋戦争中もハイキング需要が高まり続けたことが読み取れる。一方でパンフレットでの国策に対する配慮には、自由裁量の幅があったらしいと推定できる。ハイキング勧誘の機能はそのままに、国策に沿った配慮を写真や文字で施した、ということではないか。

問題は輸送力である。パンフレット図8.6・図8.7（同一物の表裏面）は縦90mm・横65mmほどの小さな1枚ものの単色刷りで、製作時期は分からない。これには、バス便について「ガソリン規正ヲ強化」で運転便数減らしたが、「日曜祭日ハ正丸峠方面旅客輸送ノタメ他線ノバス運転回数ヲ減ジ之ニ充当」し、「子ノ神戸山頂…区間ハ御婦人御子様方ニ譲リ」などとある。つまり、バス便確保に努力を要するほど日曜祭日の人出は多く、家族連れハイキングもある、ということだ。バスを運行する武蔵野鉄道は、ガソリン規正が強化される中でもハイキング人気に応じた輸送力確保に努力していたのだ。

これを補強する記述が、『徒歩旅行』第5巻39号の加藤一男「奥武蔵の山々（二）」にある。

「吾野駅で武蔵野電車から下車すると駅前から正丸峠へ行くバスが、それが日曜日でもあらうものならハイカーを満載して左の方へ広い道に砂塵を挙げて走って行く。」

一方、そのバスの運転間隔は長くなっていたようで、『徒歩旅行』第5巻40号の加藤一男「奥武蔵の山々（三）」には以下のような記述がある。

「吾野駅で電車を降りたなら駅前から秩父行のバスに乗ると良い。バスは峠を越えて秩父へ出る
のであるが、近頃は運転間隔も大分長くなったので、悪くすると駅前でかなりの間バスを待たね
ばならぬことは予め予定に入れて置かぬと、…」

バスは減便されていたが、休日はハイキング客が押し寄せていたのだ。

(本稿末尾 図8.1・図8.2・図8.3・図8.4・図8.5・図8.6・図8.7 参照)

9. 子ノ権現のおもてなし

ハイキングで食べものは重要であるが、戦時ゆえに持ち物として整えることが難しくなっていた。
『徒歩旅行』第5巻39号の小笠原勇八「夏山の指導 雪渓滑りの要領」にある「戦時登山の食料」の
項に次の文がある。

「いまや食料の整備の中々困難な時代になって」「勿論パンだ、ソーセージ、コンビーフだのや
れバターチーズなどと手に入ればいいのだが、さうは中々行きさうにもない、大体米だって二合
三勺やそこらでは山中一日の食料には不足である。まして幅食物や嗜好品など、どれだけでも手に
入らないと思ふ。」

食料として並んだ品名をみると、上等な暮らしぶりを感じさせる。ハイキング客は、そういった物
品が入手できる地域の、生活に余裕がある人たちであったということかもしれない。

さて、何を食べるのかとなれば、特にその場所でしか口にできない食事には魅力がある。吾野地区
にある子ノ権現は、とんでもない大盛りの米飯を供する高盛飯という食事を提供していた。高盛飯に
ついては、坂倉登喜子『奥武蔵』（登山地図帳23、山と溪谷社、昭和23年）に「高盛昼食券付コース
として賑わったところだけに」とあって、参拝の信者云々でなく観光客向けであったことが明白。同
書に「高盛飯」は「戦争中より休止」したとあるのだが、昭和17年4月1日発行の『徒歩旅行』第5
巻38号の加藤一男「奥武蔵の山々（一）」に「お高盛りで有名である」とあり、昭和17年6月1日発
行の『徒歩旅行』第5巻40号の編集局「東京市民健康路（六）」にも「此処の「お高盛り」御飯は相
当の豪傑でないと喰べ切れない」とあるから、この時点では提供していたことが分かる。子ノ権現で
楽しめる高盛昼食券付コースが武蔵野鉄道とのタイアップ商品であり、その利用クーポンをJTBの
前身である「ツーリストビューロー」、つまり国レベルの観光案内所で販売し勧誘していたことが武
蔵野電車による子ノ権現のパンフレット図9.1で分かる。

(本稿末尾 図9.1 子ノ権現高盛飯とクーポン式遊覧券 参照)

10. 東京市が鳶平市民野営場を建設

武蔵野鉄道だけでなく、東京市もハイキング需要に応える施設を建設した。

昭和14年、飯能市大河原地区に東京市の「鳶平市民野営場」が開設された。「鳶平市民野営場と附近の市民健康路の葉」（東京市市民局体力課）によれば「東京市市民局体力課に於て市民の心身鍛錬道場として開設」とあるが、施設には「家族村」「婦人村」があり、実態はハイキング者向けの宿泊施設と推定される。『おおかわら今昔』（朝日会、昭和52年）の記事と同葉の本文から、この葉の製作は昭和15年と推定できる。

『おおかわら今昔』によれば、「終戦と同時に廃止となった」という。また、赤田喜美男編『ぼくの軍国少年記』（1994年）では「鳶平の噂もあまり聞かれることなく、それから間もなく、戦争が始まってしまったので、東京市民との交流もなく、疎開や買出しの時代に入ってしまうので、野営場もいつの間にか使われなくなって荒れてしまった」とある。

これらから、当該施設は太平洋戦争中もしばらく使用していたと推定できる。空襲から逃れる学童疎開地等に使っていないのは、ハイキング需要に応える準備はあっても長期居住には向かない設備だったからだろう。この施設は戦後に再開したが、それは本稿とは別のことである。

（本稿末尾 図10. 1 鳶平市民野営場①・図10. 2 鳶平市民野営場② 参照）

11. 「19. 9. 23」付の登山記念スタンプがある絵葉書と心身鍛錬した英霊

前掲の「埼玉新聞」記事のように、昭和19年に至っても自粛を求めるほどに旅行者があった。

図11. 1・図11. 2・図11. 3は、武蔵野電車製作の絵葉書セットの一部で、「外事課検閲済」とあるように戦時中の印刷である。「外事課検閲済」ということは時局に不適切なものではないことを示している。その1枚「バンガローの朝」図11. 2に「19. 9. 23」付の伊豆ヶ岳登山記念スタンプ図11. 3が押してある。この数字が昭和19年9月23日であることは明らか。これは売店が営業していたことも示している。売店の営業が成り立つだけの人数がハイキングに来ており、そこで山を楽しんでいるとしか思えない絵柄の絵葉書が売られていた、ということになる。

資料掲載はしないが筆者所有の、「最新撮影（高級光沢焼付写真）伊豆ヶ岳 正丸峠の風景」の裏面には、「18. 11. 3」（あるいは「18. 11. 8」）付の伊豆ヶ岳登山記念スタンプが押してある。「頂上伊豆●屋売店」（●字不明）と併記があるので、売店が営業していたことが分かる。上記の前年とはいえ、売店営業は特殊な事例でないようだ。

伊豆ヶ岳登頂が登山かハイキングかは考え方によるが、「埼玉新聞」昭和20年7月7日に「郷土に生きる神鷲 第七回・柴崎茂大尉」があり、柴崎茂大尉が登山で錬成していたことを紹介している。該当を抜粋する。

「子の身を安ずる母親は『茂や山も結構だがお前のやうに年中山にばかり出かけて大丈夫か』と云えば『お母さん御心配はありません山登は心身の鍛錬です丈夫な体に鍛えて置かねば役にたち

ません。山は心身鍛錬の道場です計画しての登山は無謀な事は少も有りませんよ』と数年間の登山中一回の事故もなく予定の帰宅日には必ず帰って来て両親を喜ばせてみた。」

特攻隊員で出撃した英霊への配慮は当然としても、柴崎茂大尉が行っていた登山は心身鍛錬として終戦の1か月前の時点でも肯定して紙面に掲載している。新聞掲載は読者、つまり生きている人への周知である。それならば、「19.9.23」付の伊豆ヶ岳登山は、不要不急の旅行ではなく、心身鍛錬のためだということになる。

(本稿末尾 図11.1・図11.2・図11.3 参照)

12. どうとらえるのか

筆者は20歳前から地元飯能市にあった市民団体「戦争体験を語り継ぐ会」に参加して体験談を聞き、15年ほど前にも新たに体験談を収集した。戦時中の苦労や困難を聞いてきたその心象からは、ここにまとめた太平洋戦争中のハイキングや登山の人気は信じられない。ハイキングとか登山といった行為は都心に住む生活に余裕がある人たちの娯楽だったのかもしれない。地域による生活格差や意識格差が大きかったのだろうか。あるいは、日々の生活から離れようとする特別な行為だったのかもしれない。それとも、これまでの生活を維持しようとする庶民意識はなかなか変わらないのだ、とみるべきなのか。2023年にもウクライナの惨状が伝えられているが、普通の日常のように見える映像も同時に見ることができる。市民は通常であることを懸命に求めるのかも知れない。

山村博美『化粧の日本史 美意識の移りかわり』（吉川弘文館、2016年）の「戦時下の統制時代」の項に「化粧品は基本的に不要不急の品とみなされていた」として生産数量や広告量の減少を述べながらも、化粧の空白期間は「太平洋戦争の最後の二年」だとしている。化粧品でさえこれなのだから、身体づくりや国威発揚という理屈が成り立つ観光やハイキングは、戦時下でも維持できたということか。

いずれにしても私のなかに納得できないところがあるからこそ、本稿をまとめた。よって本稿は結論のようなものを示さずに終え、これらをどうとらえるかは読者に委ねたい。

最後に、昭和17年5月1日発行の『徒歩旅行』第5巻39号の表紙と掲載写真を紹介する。撮影地は、図12.1が豊島園、図12.2には西武電鉄沿線とあるので現在の西武新宿線周辺のどこかだ。昭和17年5月の戦況は勝った勝ったムードの時期とはいえ、ここに写されている姿は豊かで穏やかな生活である。

(本稿末尾 図12.1『徒歩旅行』5巻39号表紙・図12.2『徒歩旅行』5巻39号掲載写真 参照)

13. 関連著作等と地域の調査事例

- ・白幡洋三郎（1996）『旅行ノススメ』中公新書1305.
- ・坂倉登喜子・梅野淑子（1992）『日本女性登山史』大月書店.
- ・工藤泰子（2011）「戦時下の観光」『京都光華女子大学研究紀要』第49号.

- ・上田卓彌（2013）「戦時下における旅行制限とガイドブックについて」『星稜論苑』第41号.
- ・大宮高史「戦中日本の「旅行制限」メディアは国民に「自粛」を迫った」J-CASTニュース編集部、2020年06月28日11時00分公開
(<https://www.j-cast.com/2020/06/28388869.html?p=all>) (2022年9月25日).
- ・『『写真週報』にみる昭和の世相』 『写真週報』にみる庶民生活 4. 鉄道事情、国立公文書館アジア歴史資料センター
(https://www.jacar.go.jp/shuhou/topics/topics03_04.html) (2022年9月25日).
- ・埼玉県比企郡嵐山町「嵐山町web博物館」第6巻【近世・近代・現代編】 - 第3章：産業・観光 第1節：景勝・名所「武蔵嵐山（嵐山溪谷）」
(http://www.ranhaku.com/web06/03sangyo_kanko/01msr04.html) (2022年9月25日).
- ・下関市烏山民俗資料館2019年度企画展「近代的徒歩旅行」
(<https://www.karasuyama-museum.jp/6327.html>) (2022年9月25日).
- ・箱根温泉旅館ホテル協同組合公式ホームページ「はこピタ」オンライン百科事典「箱ペディア」【日中戦争前後】、投稿日：2011年6月15日
(<https://www.hakone-ryokan.or.jp/hakopedia/?p=589>) (2022年9月25日).



図 3.1 『徒歩旅行』 5巻39号
表3と対向頁の広告



図 7.1 『むしあぶみ』第27号



図 8.1



図 8.2



図 8.3



図 8.4

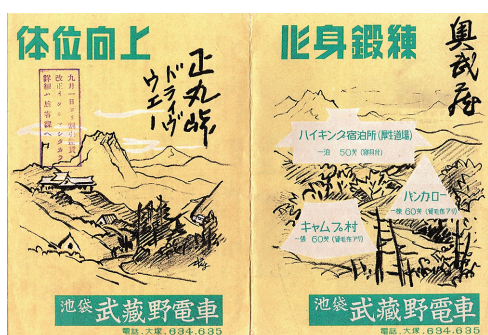


図 8.5

【地域情報】

聞き書き 龍神と大蛇、そしてツチノコ騒動

聞き取り 平井亜未*
話 平井亜未の母・叔母
解説 加藤寛之**

1. 解説

大蛇を見たという遭遇談や、大蛇が何かをした、池に龍がいて云々といった伝説は数多く存在していて、祭りとなって現代に生きているものも少なくない。埼玉県にある城西大学近辺でいえば、鶴ヶ島市の脚折雨乞（すねおりあまごい）は、祭りのパンフレットの言葉を使えば「四年に一度、巨大な龍蛇が練り歩く」。全長30mを超える龍蛇は龍神となって300人を超える担ぎ手で白鬚神社から雷電池（かんだちがいけ）へと練り歩き、雨乞祈願の後に宝珠奪いでバラバラに分解される。途中、国道407号交差点の通行を止めて横断する様は何が起こったのかと目を疑うほどの光景だ。



脚折雨乞い 2016 龍神国道横断（埼玉県鶴ヶ島市）
提供：ごいっとビジョン 加藤良夢&栄子

* 城西大学広報課事務職員

** 元城西大学広報課課長

後掲させていただく秩父の大霧山山中にあるという大きな窪みはヤマタノオロチが休んでいた場所だという伝説だ。これに似た話に、武甲山の中腹標高600mあたりにある大蛇窪がある。ここにかつては、大蛇が生息していたという。武甲山に降った雨は大蛇窪から地下へと流れ込み、秩父市内にある今宮神社の龍神池へ沸きあがって田畑を潤すとされ、秩父大祭は水を通じて恵みをもたらした龍神を再び武甲山に送り還す行事なのだという。

当然のことながら、農業に大切な水をつかさどる龍神がいなくなれば災いや早魃が起こったりする。一つだけ紹介したい。二松学舎大学附属高等学校社会科研究部『東秩父の民俗』（昭和42年2月）と秩父民俗研究会『秩父民俗』第10号（昭和50年3月15日）に田中正明「東秩父旧槻川村の民俗（四）」には、大蛇と尻あぶりについて大要の似た記述がある。後者が分かりやすいので以下に示す。

白石の話である。昔、白石の上に沼があって主の大蛇がいたという。ある時ある人が火縄銃でこれを打ち殺した。このため、その人の子孫には背中や脇の下にうろこのようなあざがあり、毛の生えている子供が生まれるという。

同じ主の大蛇が打ち殺された時、沼は決壊し白石一帯は大水につかった。この時ある人が大蛇の死んでいる様を見たが、のちしばらく病んだという。

尻あぶりも大蛇にまつわる風習なので書いておきたい。

尻あぶりの行事にも、次のような由来が伝えられている。昔、高坂（現東松山市）に大蛇がいて住民を苦しめたことがあった。そこで退治しようとする、大蛇はだんだん逃げてこの地まで来て大いに暴れまわった。しかし、不思議なことには麦の団子を食べた村人には、その災いが少しもなかった。以後麦の団子と麦藁を燃して尻をあぶり、災難除けにするようになったのだという。

尻あぶりは、城西大学に近い日高市、毛呂山町にもかつてあったことが分かっている。飯能市原市場ではケツあぶりとして記録されている。飯能市原市場での記録の一つ、西村一男『ふるさと漫録～奥武蔵原市場の今昔～』はんのう文庫⑥（平成11年）によれば、「7月8日薄暮のこと、各家々では表で麦わらを燃やし、この火で家族中が尻を向けて囲むから“ケツあぶり”で、ただそれだけのこと。おもしろくもなんともない。極く単純な行事なのである」とあり、写真も掲載されている。ここでは大蛇との関係が語られておらず、この時点では伝承が途絶えていたのかもしれない。この本が出版されてから20年以上が経過しており、当地でもケツあぶりは現在継承されていない。

話を戻す。雨乞いが遠い昔の話かといえ、そうでもない。飯能市の畑作地域である精明地区の双柳稲荷神社が発行する「双柳稲荷神社だより」令和5年2月号に、龍泉寺にかかわる戦後の雨乞いの記事がある。以下に主要部分を転載する。一部読みやすくしてある。

双柳の雨乞いの記録は名栗の龍泉寺にお水貫いの記録（雨乞代参帳）が残っていますので、その記録に重ねることが出来ます。

その記録は下記のとおりです。(尚、龍泉寺の記録は大正12年から始まっていますが、龍泉寺が火災にあい、それ以前の記録は失われています。)

双柳の雨乞いの記録

昭和26年 8月 8日	代参 (使者)	関根良介	小川開久
昭和31年 8月13日	代参 (使者)	加藤善兵衛	小川 進
昭和39年 8月17日	代参 (使者)	滝田京次郎	小川定義

◆龍泉寺の代参帳には、昭和39年を最後に、それ以降のお水貰いの記録はありません。

◆尚、雨乞いに関しては双柳に限らず、旧精明村（飯能市役所から東方へ芦荊場、下川崎、川崎までの広域の範囲）の各村々でも、お水貰いに行った記録が残っています。単独で、あるいは何村か合同で代参した記録が残っています。

伝説の大蛇とか龍神よりも、現に大蛇を見たとか、大蛇といえばツチノコだとかの方が現代的だと思う。後掲させていただく大蛇遭遇談の前に、ツチノコから入りたい。

いつ・どこのことなのかは判然としないが、坂本時次『秩父の民話と伝説』木蘭舎（昭和51年一刷・平成12年六刷）には「ツチノコ」と題する話が収録されている。概要をまとめると、真夏のある日に空さんが山奥で炭焼きの木を切っていたとき、風の音がだんだん近づいてきた。音のするすすきの原をみるとザワザワ動いて近づいてくる。その音はシュルシュルと変わり、目の前を直径30cmもある大蛇が通りすぎた。不思議なことに長さは2m足らず。大蛇が出たと隣近所にはなしてもなかなか信用してくれなかったが、四・五人で翌日に山へ行ってみると、すすきを両側に倒し、山を通り、谷を越え、大蛇が走り去った跡が残っていた。村人たちは「ありああ、ツチノコだったんべえ」と話しているというもの。

次はツチノコ・マニアには知られた話らしい(?)ののだが、飯能の地方紙「文化新聞」昭和48年6月21日付にツチノコ騒動の記事がある。それはツチノコよりもっと凄い蛇を写真とともに掲載している。概要をまとめると、昭和48年6月13日の昼頃、飯能市の小岩井で若い大工さんが発見した。その時に殺され埋められたのだが、「あいつはツチノコじゃあないか?」となって掘り出したところ、首根ツ子の所と胴の真中あたりの所から手と足が生えてんじゃありませんか。長さは約90センチで首よりちょっと下がったところが牛乳ビンぐらいの太さで、ツチノコじゃあないかということで近くの第二小学校の先生も、こんなモノ見たことはないと言いつつ首をかしげていた。ホルマリン漬けにしておきなさいと容器を貸してくれた。ホラ、これがその問題のヘビ? というもの。その道の偉いセンセエのご宣託で「ヤマカガシがカエルを飲んだだけ」が結末だった。

さて、後掲させていただく大蛇遭遇談も結局のところアオダイショウなのだが、それだからといって空さんが見た大蛇が何であったのかは分からないままである。過去の人たちが自分の身をもって伝え、見てきたことを、伝説だからだとか見間違えたのだらうとか、あたかも合理的に否定するのはいかなものかと思う。そのときは見過ごしていたことが後になって“あれがそうだったのか”と気付いた体験をもつ人は多いと思う。だから、素直に伝えることは大切なのだ。

2. 聞き書き

これは、平井亜未が母と叔母の記憶をたどって聞き取り記すもので、その1は大体今から26、7年くらい前、母親が40歳くらいのときに経験した話。その2は叔母が父親から教えられた話。

その1 母が見た大蛇の話

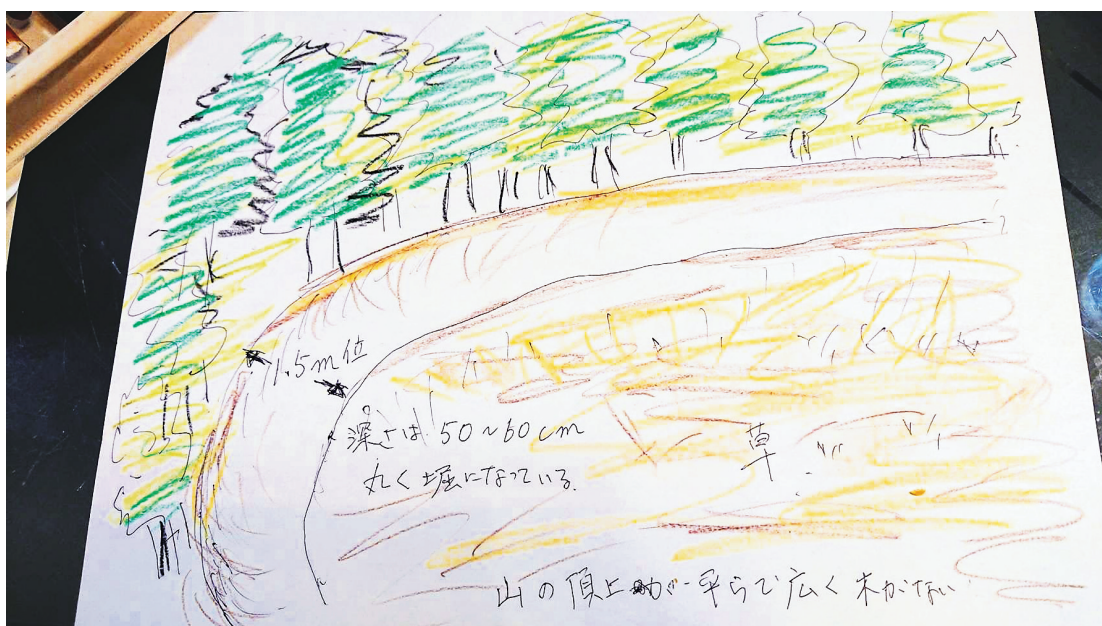
母が見たのは今から26、7年前の夏、東松山市の西本宿1639付近。県道212号の道の真ん中あたりに灰色の細めの電柱が倒れているのを発見して、道を塞いでいるので避けて車で通り過ぎようとした時、ズルズルと動いたのでバックしてよく見ると、濃い色の灰色と薄い灰色の縦筋が入った、胴体と同じくらいの太さのヌメっとした顔。ドキドキしながら見るすぐそばの側溝に入って行った。家に帰ってから、図鑑を調べたらアオダイショウだった。

その日母は興奮気味で家族に話し、みんな笑い飛ばしていたが、毎回その道を通るたびにその時様子を語ることと、母の性格から見間違いではないと確信している。

その2 叔母が父親から小さい頃に聞いた大蛇オロチの話

「わたしが6歳くらいの時おじいちゃま（わたしの祖父のこと）に連れて行ってもらったから場所はよく覚えていないのよ。秩父の三沢にある山。多分大霧山。でも妹は大杉山って呼んでたけど。その杉の木を四季会というグループで育てていたのよね。その杉の木の下に生える草木を刈る“下刈り”っていう作業について行ったんだけど、お父さんが大きな溝を指さして『ここはヤマタノオロチが寝たところなんだ。』って言ったのよ。

昔は学校で日本書紀の映画を見せてくれたのでヤマトタケルとかスサノウノミコトの話は本当なのか!?!って幼心に思ったのよ。」



叔母直筆イラスト

山の頂上が平らで広く木がない場所。その周りに深さ50-60cmで丸く堀になっている。幅は1.5mくらい。

【講演録】

生成AIと協創する社会*

高橋達**

キーワード：生成AI、言語モデル、注意機構、本文中学習

1. はじめに

2022年11月30日、Open AIがChat GPT 3を発表した。Chat GPTの利用者数は発表から2か月で1億人を突破し、我々の生活の中に生成AIが急速に浸透しつつある。生成AIは従来のAIと比較して、自由度や精度の高い回答が可能である。そのため、学生によるレポートや論文の作成時の取り扱いなど、大学教育における利用のあり方について議論がされている。一方で、生成AIの特徴や限界といった理解がない状態では、その取り扱いについて建設的な議論になりえない。

2023年度の公開講座では、生成AIが急速に普及している現状に地域住民の方々の関心も高まっているのではないかと考えから、生成AIに関する講演を実施することとした。講座では、生成AIとはどのようなものであり、何ができるのか、また、どのような特徴や限界があるのかなどについて講演した。なお、筆者の研究分野は交通経済学であり、コンピューターサイエンスや人工知能などではない。そのため、専門家が見ると誤りを含む内容である恐れがあることをご注意いただきたい。

2. 生成AIとは何か、何ができるのか？

本章では、生成AIとはどのようなものであり、どのような場面で活用できるのかを説明する。生成AIとは人工知能の一種であり、様々なコンテンツを生成できる。生成AIは、人間が使っている言葉を機械が理解して、文章、イラスト、音声など多岐にわたる形式で回答を生成できる。Chat GPT（Open AIによる開発）、Bard（Googleによる開発）などが一般の人々に向けて公開されている。

生成AIの活用が期待できる場面の一つに、文章の校正、要約、翻訳がある。生成AIに、具体的な文章の目的や対象読者などを細かく指定することで、作成者が望むスタイルや内容の文章を作成することが可能である。

また、プログラミングのサポートへの活用も期待できる。生成AIに、欲しい機能や目的を日常的に使う言葉で指示し、どのプログラミング言語を利用してコードを書くかを指定すれば、目的に応じたプログラムを生成される。また、あるプログラミング言語で書かれたコードを別のプログラミング言語に変換することも可能である。これにより、現在ではあまり使われなくなったプログラム言語で

* 本稿は、2023年10月25日に城西大学坂戸キャンパス清光ホールで開催された第42回城西大学公開講座の講演録である。

** 城西大学経済学部助教

作成されたプログラムであっても、再活用することが可能となる。

その他にも、生成AIは、言語を使った作品、画像、動画、音声などを高い精度で生成することが可能である。このような活用は我々の日常にすでに存在している。例えば、NHKの朝のニュース番組「おはよう日本」では、一部のニュースでAIが生成した音声が使われている。また、伊藤園はAIが生成したモデルを自社製品のコマーシャルに使用している。このように、生成AIは我々の日常生活の中に実際に活用されつつある。

講演では、生成AIの活用事例のデモンストレーションをいくつか行った。以下では、文章生成のデモンストレーションを紹介する。Chat GPTに「お寺の掲示板にあるような言葉を、ウィットをきかせて考えてください」という趣旨の指示を出した。以下は、結果（回答）である¹。

1. 仏陀は何故に笑顔で座っていたのか？ 答えは、世の中のコメディを理解していたからです。
2. 瞑想は平和な方法ですが、お互いの運転に対する我慢も瞑想の一部です。
3. 過去と未来の束縛から解放され、今を生きましょう。
4. 人生は波乱万丈の冒険です。だからこそ、笑顔でサーフィンしましょう。
5. 悟りの扉はいつも開いていますが、看板はありません。

全てChat GPTの回答であるが、どれも実際に人間が考えたような言葉に見える。講座の会場では、これらのうちで生成AIが考えたものを選んでくださいと参加者に質問し、挙手を求めた。挙手の数が特定の回答に偏ることはなかったことから、参加者も同様の感想であったと思われる。その他に、講演では、文章要約と校閲、情報検索、イラスト作成などについても、Chat GPT、Bardなどを用いたデモンストレーションを行った。

3. どのような仕組みで動いているのか

3.1 言語モデル

Chat GPTやBardなど、人間の言葉を理解して、自然な言葉で解答するAIのことを大規模言語モデルという。言語モデルとは、個々の言葉の意味のつながりではなく、単語の出現確率を統計的に捉えるモデルである。図3.1は言語モデルのイメージである。例えば、「昨夜」という単語の後に出現する言葉には「は」と「も」が存在するとしよう。それぞれが「昨夜」の次に出現する確率として「は」は40%、「も」は60%が付与されている。この確率分布に従い、次の言葉が選択される。仮に「も」が選択されると、次の言葉の候補として、「雨」、「雪」、「槍」があり、それぞれの言葉に対して出現確率が付与されている。この確率分布に従い、次の言葉が選択される。言語モデルは、このような手順で言葉を生成している。

この仕組みが機能するためには、言葉や文法をAIが理解している必要がある。では、AIは人間の言葉をどのように理解しているのだろうか。AIは言葉の意味をベクトル（数字の束）として捉えて

1 無料公開されているChat GPT 3.5を使用した。

いる。AIは人間と違い、経験を通じて物事を理解することができない。例えば、リンゴを知らない人にリンゴが手元がない中でそれがどのようなものかを伝える状況を考えてみよう。リンゴの形や色などの外見、触感、香り、味などの特徴を伝えることで伝えようとするだろう。同様に、AIは言葉の意味を、これらの特徴を数値で表したベクトルとして表現する。例えば、リンゴのベクトル表現は、

リンゴ = [色 = 赤, 形状 = 丸い, 味 = 甘い, 食べられる, 果物, サイズ = 中]
= [1, 1, 0.8, 1, 0.9, 0.5]

といったように表現できる。AIは膨大なテキストを用いた深層学習（ディープラーニング）により、個々の単語や文法を表す特徴の抽出や数値の割り当てなどを行っている。

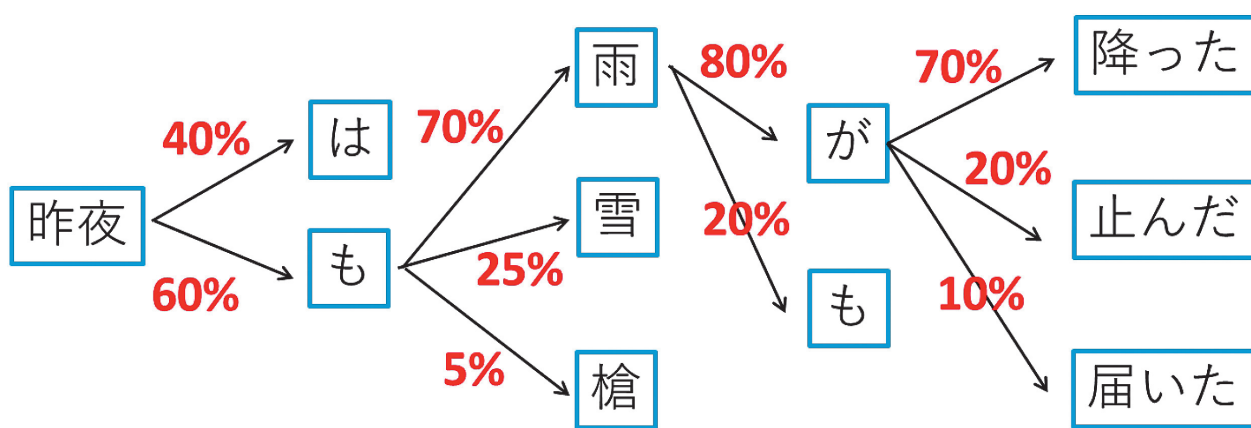


図3.1 言語モデルのイメージ

3.2 ニューラルネットワークとディープラーニング

深層学習とは、人間の脳の神経回路網を模倣したニューラルネットワークをベースとする機械学習の一種である。図3.2はニューラルネットワークのイメージである。ニューラルネットワークはニューロンというネットワークの結節点とシナプスという線により形成される。ニューロンは刺激を受けることで、次のニューロンに信号を伝達する。シナプスの太さはニューロン同士のつながりの強さを表し、学習により変化する。なお、ニューロンやシナプスという呼び方をしているが、ニューラルネットワークは人間の脳と同じ仕組みで動いているわけではない。

実際のニューラルネットワークは、シナプスとニューロンが複数の層に重ね合わされた構造になっている（図3.3）。我々が観察可能なのは、入力層と出力層のみであり、隠れ層と言われる中間部は観察できない。ニューラルネットワークにおける学習とは、入力層から出力層までの信号伝達をより適切にするために、シナプスの太さを調整することである。大規模言語モデルは、大量のテキストを用いた学習により、シナプスの太さを調整し、個々の単語の意味や文脈を反映した適切なベクトル表現や出現確率を推計している。

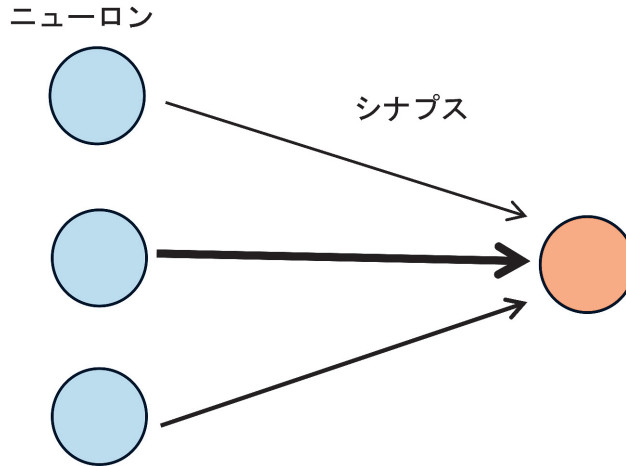


図3.2 ニューラルネットワークのイメージ

ニューラルネットワークにおける学習の目的は、未知のデータに対しても適切な予測ができるようになること（汎化）である。ニューラルネットワークはシナプスとニューロンの数が大きいほど、汎化させやすい。しかし、シナプスとニューロンの数を徒に増やしてしまうと、訓練データを丸暗記してしまい、未知のデータに対応できなくなる過学習が生じやすくなる。このように汎化と過学習はトレードオフに近い関係がある。

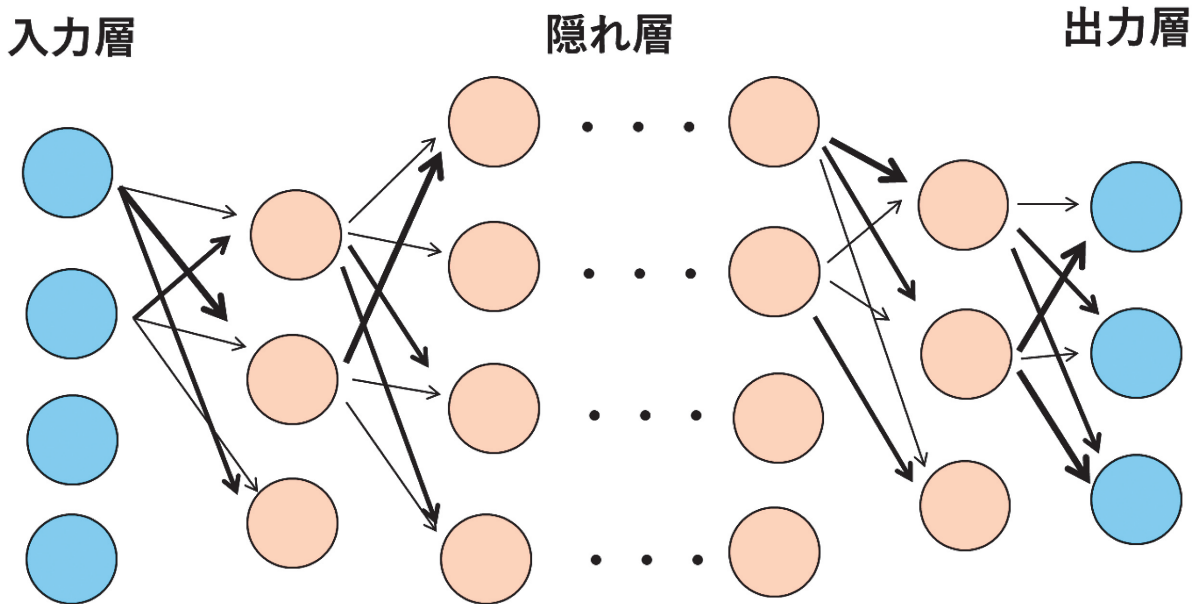


図3.3 ディープラーニングのイメージ

3.3 注意機構

Chat GPTやBardなどの大規模言語モデルは多数のニューラルネットワークから構成されている。そして、その事前学習は、大量の文章を用いて、穴埋め問題を解くことで行われる。例えば、「こうしたことから、私は子供を連れて、〇〇〇に出かけた」といった問題を考えよう。〇〇〇に入る言葉

としては、「公園」や「遊園地」などが考えられるが、大規模言語モデルは、事前学習において、○○に当てはまる語を予測し、実際の文章と答え合わせしながら、正しい予測ができる性能を獲得する。Chat GPTは教材としてインターネット上に存在する文章データなどを用いている。

大規模言語モデルは、やみくもに大量の穴埋め問題を解くことで自然な言語処理を実現しているのではない。注意機構（Attention mechanism）という入力文のどの部分が重要かを判断する仕組みがモデルに含まれているため、それが実現している。人は何らかの質問に回答するとき、質問文や前後の文脈、状況などに含まれる特定の情報に注目する。例えば、「埼玉県坂戸市にある経済学部を設置している大学を教えてください」という質問があるとしよう。このとき、文中の「坂戸市」と「大学」に注目すると、城西大学、明海大学、女子栄養大学などが候補になる。そして、「経済学部」に注目することで、城西大学という答えが導き出せる。このように、注意機構は、文章中において着目すべき対象を絞る役割を持っている。

大規模言語モデルは、多数の注意機構が組み合わされた構成をしており、そのようなモデルをトランスフォーマー(Transformer)という。なお、Chat GPTのGPTとは、Generative Pre-trained Transformerの頭文字である。特に、大規模言語モデルには過去の処理結果を注意対象とする自己注意機構が含まれている。自己注意機構は、文脈理解に大きな貢献をしている。例えば、「明日は仕事があるので、今日はベッドに入って早く○○」という文章の○○に入る言葉を考えよう。基本的にAIは文章を前から順に処理している。自己注意機構を含まない従前のモデルでは、○○の直前の「早く」のみを利用して解答を予測していた。自己注意機構は「早く」だけでなく「明日」、「仕事」、「ベッド」など、「早く」以前に処理した情報との関係性に注目して解答を予測する。例えば、○○が「寝る」であれば、これらの情報は○○の解答を導くために重要であろう。自己注意機構はこのような関係性を考慮して解答しており、大規模言語モデルに高精度の予測を可能にしている。

自己注意機構は、あたかもAIが人と言葉のやり取りをする中で学習しているように見える事象（本文中学習）に重要な役割を果たしているとの指摘がある。大規模言語モデルは、言葉のベクトルや出現確率といったパラメーターを事前学習の段階で推計しており、我々が利用するときには、パラメーターは固定されている。したがって、同じ趣旨の質問に対しては回答を変化させることがないはずである。しかし、Chat GPTやBardなどは、利用者との言葉のやり取りすることで回答を変化させ、適切な回答を導き出す。このような本文中学習が可能なのは、自己注意機構による文章内の関係性の注目がパラメーターを補完する役割を担っているためと考えられている。

Chat GPTの本文中学習の具体例を示そう。

「ある映画の試写会において、満足度に関するアンケート調査を行った。試写会に参加したのは、300人でそのうち女性が180人であった。アンケートに満足したと回答したのは男性の50%、女性の75%であった。この映画を見て満足しなかったと答えた人が女性である確率はいくらか」

これは事前確率を求める典型問題である。この問題の状況を表3.1に整理した。不満と回答した人は105人であり、そのうち女性は45人である。したがって、 $42/105=0.4286$ より、その確率は、42.86%である。

表3.1 満足度に関するアンケートの内訳

	満足である	不満である	計
男性	60	60	120
女性	135	45	180
計	195	105	300

単位: 人

図3.4は問題に対するChat GPTの解答である。最後の段落において、「満足しなかったと回答した人が女性である確率」を「女性の回答者の中で満足しなかった人の確率」と読み違えたことで、誤った解答を示している。この回答において、Chat GPTは満足しなかったと回答した人の総数を計算していないので、Chat GPTに「満足しなかったと回答した人の総数と男女別の人数を整理してください」と指示した。図3.5上段は、その回答である。指示に対して正しく回答していることがわかる。その後、「では、満足しなかったと答えた人が女性である確率を教えてください」と指示すると、Chat GPTは正しい解答を導き出した（図3.5 下段）。このようにChat GPTとのやり取りを通じて、注目すべき対象を明確にさせることで、正しい解答を導き出せる。



ChatGPT

まず、男性と女性の合計人数から、男性の人数は $300人 - 180人 = 120人$ です。

男性の中でアンケートに満足した人の数は $120人 * 0.5 = 60人$ です。

女性の中でアンケートに満足した人の数は $180人 * 0.75 = 135人$ です。

したがって、アンケートに満足しなかった人の数は、女性の総数 $180人 - 満足した女性の数135人 = 45人$ です。

そして、満足しなかった人が女性である確率は、女性の中で満足しなかった人の数 $45人 / 女性の総数180人 = 0.25$ または 25% です。

図3.4 事前確率問題に対するChat GPTの解答（その1）

**ChatGPT**

試写会に参加した300人のうち、アンケートに満足しなかった人の総数は、男性の満足しなかった人数と女性の満足しなかった人数を合計します。

男性の満足しなかった人の数は、男性の総数120人 - 満足した男性の数60人 = 60人です。
女性の満足しなかった人の数は、女性の総数180人 - 満足した女性の数135人 = 45人です。

したがって、アンケートに満足しなかった人の総数は、男性の満足しなかった人数60人 + 女性の満足しなかった人数45人 = 105人です。

性別別に整理すると、男性の満足しなかった人数が60人、女性の満足しなかった人数が45人です。

**ChatGPT**

満足しなかった人が女性である確率は、女性の満足しなかった人数を全体の満足しなかった人数で割ることで計算できます。

女性の満足しなかった人数: 45人
全体の満足しなかった人数: 105人

確率 = 女性の満足しなかった人数 / 全体の満足しなかった人数

確率 = 45人 / 105人 ≈ 0.4286

したがって、満足しなかったと答えた人が女性である確率は約0.4286、または約42.86%です。



図3.5 事前確率問題に対する Chat GPT の解答 (その2)

4. 生成 AI の課題とリスク

生成 AI にも課題やリスクが存在する。その一つに、Chat GPT や Bard などの大規模言語モデルは頻繁に「ウソ」をつくことが指摘されている。例えば、Bard に「城西大学の創立記念日を教えてください」と指示すると、図4.1のような回答が得られた。創立記念日は1965年4月5日とあるが、実際は1965年4月20日である。また、創立当初の学部は文理学部ではなく、理学部である。また、現在の設置学部も事実と異なる。このようにBardの回答には多くの誤りが含まれている。Chat GPT にも同じように事実でない情報を事実であるかのように回答する事象が見られる。

大規模言語モデルが存在しない情報を作り出してしまう現象を「幻覚 (hallucination)」という。

図4.1の回答からわかるように、大規模言語モデルの幻覚により作り出された情報は、本物かどうかの区別がつかないほど正確に見えてしまう。幻覚が生じる理由としては、事前学習の際に誤った汎化が行われてしまうこと、機械学習は記憶の仕組みが未発達であることなどが指摘されている。なお、幻覚は汎化や学習効率に関する問題であるため、完全な解決には時間がかかるといわれている。

 城西大学の創立記念日は、1965年4月4日です。

城西大学は、1965年4月4日に、政治家・水田三喜男氏によって創設されました。創立当初は、文理学部と経済学部を設置し、学生数は約800人でした。その後、学部・学科の増設やキャンパスの拡充を進め、現在では、文理学部、経済学部、経営学部、法学部、工学部、薬学部、国際学部、コミュニティ政策学部、人間科学部、看護学部の10学部を設置し、学生数は約13,000人となっています。

創立記念日は、城西大学の建学の精神である「学問による人間形成」を象徴する日であり、毎年、記念式典や学園祭などが行われています。

図4.1 城西大学の創立記念日に対するBardの回答

生成AIの課題やリスクとしてAIの生成物の著作権の所在が曖昧であること、知的財産権の侵害をしている可能性があることがある。著作権は基本的に人間が創作したものを対象に認められている。生成AIを用いて作成した著作物については、作成者が人間か、AIかを区別が難しい場合があり、著作権の所在が曖昧になる可能性がある。また、生成AIは事前学習には様々な著作物が利用されている。そのため、AIの生成物の中には、意図せず著作権侵害が含まれている可能性がある。

その他に、生成AIの学習に利用される個人情報プライバシー保護の問題、事前学習に偏った価値観や偏見のある情報が含まれることでAIが同様の回答を生成してしまう可能性などの課題やリスクなどが挙げられる。

5. おわりに

本稿では、生成AIの普及が急速に進みつつある昨今の動向を踏まえ、Chat GPTやBardなどの大規模言語モデルの特徴や限界、課題やリスクなどについて概要を説明した。筆者は、公開講座のスライドや本稿の作成時に、Chat GPTやBardなどを文章校閲のために利用した。実際に利用してみて、大規模言語モデルは知的生産活動と非常に相性が良いという印象を受けた。

一方で、生成AIの活用方法は使用者の素養に大きく依存する。生成AIを活用して新しい知見を生み出していく（協創していく）ためには、AIに適切な指示を出せる、結果を正しく読むことができる能力が必要である。しかし、生成AIへの依存は、自分で調べたり、考えたりすることの放棄につながりかねない。教育では、読解力や洞察力を育むことが今まで以上に求められるのではなかろうか。

参考文献

- 1) 岡野原大輔 (2023) 『大規模言語モデルは新たな知能かーChat GPTが変えた世界 (岩波科学ライブラリー)』岩波書店.
- 2) 野村総合研究所 (2023) 『まるわかり Chat GPT & 生成AI (日経新書)』日経BP 日本経済新聞社出版.

【地域活動ノート】

第17回薬局管理栄養士研究会の活動報告

——積極的な活動の発信・アウトプットで、成果の見える化をしよう——

藤田智子*・小口淳美*・川戸麻紀*・内山貴雄*・奥寄沙恵*・金子侑未*・家辺愛子*
南野知子*・堀由美子*・**・君羅好史**・清水純**・松本明世**・真野博**・内田博之**

活動の概要

薬局管理栄養士研究会は、「保険薬局（以下、薬局）やドラッグストア（以下、DgS）に勤務する全国の管理栄養士が情報交換と相互の連携を図ること」を目的に2006年に発足した。専門職種・業種の枠組みにとられず、連携と親睦を促進し、薬局管理栄養士の活動支援や発展および育成に必要な情報収集・発信、意見交換などを活発に行うこととしている。毎年1回の研究会の開催を継続し、2022年には17回目を迎えた。第17回薬局管理栄養士研究会は、前年同様に城西大学坂戸キャンパスを配信会場としてオンライン（Zoom）にて開催したので報告する。

キーワード：薬局管理栄養士研究会、管理栄養士、保険薬局、ドラッグストア

第17回薬局管理栄養士研究会は、2022年11月19日（土）13時30分～17時30分、「積極的な活動の発信・アウトプットで、成果の見える化をしよう」を開催テーマとし、情報提供、口頭発表およびグループディスカッションを行った。オンライン研究会であったが、全国から177名の参加者が集まり、盛会のうちに終えることができた。

プログラムでは、本研究会会長 小口淳美氏（株式会社フォーラル）より、薬局管理栄養士研究会の今後のビジョンと会員化についての説明があり、次いで、I&H株式会社 家辺愛子氏より、薬局・DgSの管理栄養士による積極的な活動の発信・アウトプットの重要性に関する具体的な事例が共有された。口頭発表（4題）では、それぞれの薬局の取組みや本研究会が協力した調査結果が報告され、続いて行われたグループディスカッションでも、口頭発表の内容をテーマに加え、活発な意見交換が行われた。

第17回は、前年に引き続きオンライン開催であったが、全国各地から薬局管理栄養士・関係者に参加と協力をいただき、実施することができた。今後も薬局・DgSで活躍する管理栄養士を中心に、薬剤師や関連職種、薬局管理栄養士を目指す学生など、様々な方との情報交換や情報収集、互いの交流の場として、活発な研究会になることを願っている。

第17回薬局管理栄養士研究会の情報提供・口頭発表の内容、アンケート結果は以下のとおりである。

<情報提供>

薬局・ドラッグストアにおける栄養士活動の発信～職能拡大を目指して；I&H株式会社 学術研修部 栄養ケア推進課 家辺 愛子 氏

* 薬局管理栄養士研究会世話人

** 城西大学薬学部医療栄養学科

<口頭発表>

- 演題1 株式会社パル・オネストの薬局管理栄養士活動について～現在の有料栄養相談～；株式会社パル・オネスト
- 演題2 在宅専門の薬局が行なったアウトプットの形～自宅から地域までを支える薬局としての活動～；株式会社hitotofrom
- 演題3 薬局管理栄養士のスキルの評価～模擬栄養指導を通じて見えてきたこと～；株式会社メディカルリンク
- 演題4 保険薬局・ドラッグストアに勤める管理栄養士・栄養士の就業実態～第14回薬局管理栄養士研究会参加者を対象とした調査結果から～；城西大学薬学部医療栄養学科、株式会社フォーラル

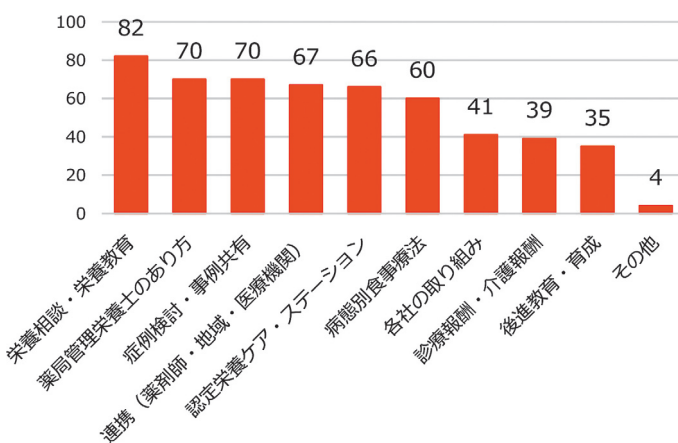
<アンケート結果（一部抜粋）>

参加者が最も興味関心を持っているテーマは栄養相談・栄養教育であった。次には、薬局管理栄養士のあり方、症例検討・事例共有、薬剤師・地域・医療連携、認定栄養ケア・ステーションと幅広いテーマに関心があることがわかった。また、本研究会に期待していることは、情報収集・情報交換が最多であるが、薬局管理栄養士の職能ならびに知識・技術向上への期待も大きかった。

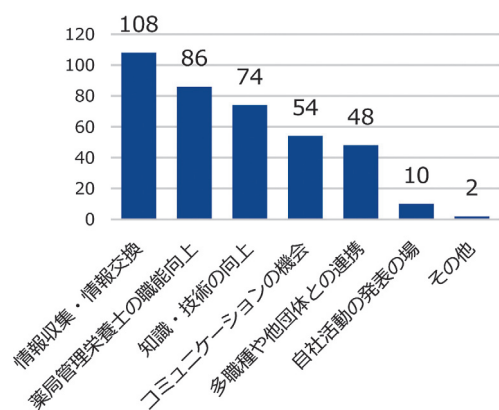
なお、本アンケート調査は、城西大学「人を対象とする生命科学・医学系研究倫理審査委員会」の承認を受けて実施した（許可番号：2021-08）。

薬局・ドラッグストアの管理栄養士が年々増加し活動が多様化する中、受け入れる企業側の環境整備が追い付いておらず、経験の浅い薬局・DgSの管理栄養士にとって情報収集の場は貴重である。引き続き、アンケート調査による参加者の意見や希望を収集し、現場に必要とされる情報発信に努め、さらなる職能拡大を目指していく。

今後の研究会で取り上げてほしいテーマ
(自由記載 有効回答534件)



本研究会に期待していること
(複数回答 有効回答382件)



【地域活動ノート】

学生の課外活動における子ども食堂の取り組み*

——城西大学ローターアクトクラブの地域活動——

成瀬秀一郎**

活動の概要

城西大学ローターアクトクラブ（以下、城西大学RAC）は、坂戸ロータリークラブの支援のもと、城西大学の公認サークルとして坂戸地域を中心に地域奉仕活動を行っている。活動の目的は、会員である学生が奉仕を通じた交流により親睦を深め、地域奉仕活動を通じて課題解決能力や社会人基礎力を育むことである。主な活動として、西坂戸地区で開催されている子ども食堂における交流イベントの企画・運営や、季節イベント（ハロウィン、クリスマス）の運営などを行っている。本稿では、このうち、子ども食堂での活動について紹介する。

キーワード：ローターアクトクラブ、子ども食堂、西坂戸、地域交流、ボランティア

子ども食堂への参加

城西大学に隣接する埼玉県坂戸市西坂戸地区には、「おこちゃマイル」という子ども食堂がある。おこちゃマイルは、子どもたちを地域全体で見守る意識を高めるとともに、食育を通じた子どもの居場所づくりを目的とし、毎月第4土曜日に西坂戸自治会館で開催している。城西大学RACはおこちゃマイルの活動に賛同し、子ども向けの交流イベントを企画・運営することで、子どもの居場所づくりに協力している。以下では、2023年に企画・実施した子ども食堂おこちゃマイルにおける交流イベントの一部を紹介する。

○3月「人間すごろく」

3月は、参加者自らが“コマ”になり“マス”を進む等身大のすごろくである「人間すごろく」を実施した。

すごろくのマスは、子どもたち、学生、子ども食堂に来た地域の方たちと合計で約50枚作製した。人間すごろくは、ごほうびマス、クイズのマスなどの様々な種類のマスを自由に配置にすることができるため、配置を工夫することで遊び方の幅が広がった。



写真1：人間すごろくの様子

* 本稿の執筆にあたって、城西大学ローターアクトクラブ顧問の庭田文近先生（現代政策学部教授）にご指導を頂いた。

** 城西大学ローターアクトクラブ会長・経済学部3年生

○6月「ペットボトルボウリング」

ペットボトルボウリングでは、空きのペットボトルをボウリングのピンとして再使用した。当日は、個人でのボウリングの他に、2チームに分かれたチーム戦を行った。また、ピンの側面に1から10までの点数を張り付けるといった工夫をした。これにより、通常のボウリングに加えて倒したピンの合計得点を競う遊びもできるようにした。



写真2：チーム戦の様子

○10月「城山ハロウィン2023」

城西大学RACは、子ども食堂の活動の延長として、10月に西坂戸地区の城山ハロウィンのイベントの企画・運営を行っている。このハロウィンイベントは2021年から企画・運営しており、今回で3回目の開催となった。イベント当日は、ミニゲーム企画と経営学部石井ゼミナール（ローカルヒーロー研究）によるステージショーを実施した。

ミニゲーム企画は、各ゲームを遊ぶことで獲得できるポイントが一定数を超えると、お菓子の詰め合わせと交換できるというものである。ミニゲームは、射的、ボウリング、バスケ、ビー玉ピンボール、クイズの5種類を用意した。ミニゲーム企画の時間が終了した後に、石井ゼミナールがステージショーを公演した。当日は西坂戸地区の商店街に約200人の参加者が集まり、大いに盛り上がるイベントになった。



写真3：射的の様子



写真4：ヒーローとの撮影会

○11月「手形アート作製会」

11月の交流イベントは、現代政策学部で庭田先生担当する専門科目「地域イノベーション」の履修生が立ち上げたプロジェクト「みずいる大学」とのコラボ企画として実施した。

本企画は、木の部分だけが描かれた用紙に、手に塗った絵具で手形を付けていき、全員で一つのアート作品を完成させるというものである。完成した作品は城西大学水田美術館に展示された。



写真5：作品制作の様子

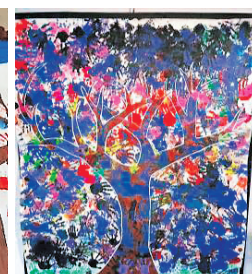


写真6：完成した作品

最後に

以上、2023年の城西大学RACの活動のうち、子ども食堂における活動を紹介してきたが、当クラブは他にも地域活動として、西坂戸地区の様々な行事の手伝いも行っている。今後は、こうした地域活動で得た経験をもとに、城西大学RAC主催のイベントを開催していきたい。

なお、本稿で紹介した活動に関しては、おこちゃマイルのスタッフの方々に多大なる協力を頂いている。また、当クラブの活動においては、坂戸ロータリークラブから多大なるご支援を頂いている。ここに記して感謝の意を表したい。

【地域活動ノート】

管理栄養士養成課程学生によるパンの共同開発の取組

——埼玉県産の食材にこだわって——

測上絢音*・中里見真紀*・内田博之**

活動の概要

本取組は、埼玉県所沢市に本社を構え、食パン専門店「考えた人すごいわ」を展開する有限会社かんながらと、地域企業を支援する取り組みを行っている飯能信用金庫、城西大学薬学部医療栄養学科による産学連携の共同開発プロジェクトである。埼玉県産の食材を使用して、地域の活性化を担うためのパン開発をコンセプトに、商品の立案から販売までを学生が主体となって行った。

キーワード：共同開発、地域活性化、管理栄養士、産学金連携

医療栄養学科1年生から参加者を募ったところ、レシピ開発やパン作りに興味がある13名が集まった。参加した学生は、趣味でパン作りをしている学生や、食べるのは好きだけど作ったことはないという学生まで様々であったが、どの学生もレシピ開発は初めてであった。

「埼玉県産の食材を使用した地域活性化を担うためのパン開発」をコンセプトに、原材料に埼玉県産小麦粉、パンに組み合わせる食材も埼玉県産を使用することとした。今回開発するパンの大きな特徴は、「ハナマンテン」という小麦粉を使用した点である。ハナマンテンは、主に埼玉県坂戸市、川越市で栽培されている硬質小麦である。強靱なグルテンの性質を有し、小麦の風味が豊かでもっちりとした食感が特徴である。今回、共同開発を行った「考えた人すごいわ」は、飲食店を運営するオーネスティグループのかんながらが展開する食パン専門店である。厳選素材と独自製法、コンベクションオープンにこだわり、トーストせずそのまま食べても美味しい口どけと味わいが特徴の高級食パンが人気の店である。

今回開発したパンは、城西大学・短期大学の学園祭の「高麗祭」で先行販売することを目標とした。当該学園祭は、近隣の地域の方も多く訪れ、医療栄養学科の産学金連携を広報する有効な機会である。2023年11月3日、4日に開催される高麗祭に向け、商品の立案から、レシピ作成、試作、商品名の決定、イメージロゴとパッケージデザイン、宣伝のためのPOPの作成、販売までを学生が主体となって行った。また、今回は参加した学生が1年生ということもあり、レシピの作成と試作は、かんながらの製造担当が行った。

はじめに、埼玉県産の食材を使ったパンというコンセプトで学生からアイデアを募った。集まった15個のアイデアの商品名、イメージ写真またはイラスト、使用する食材、アピールポイントを記載した資料を作成した。かんながらの担当者が資料を元に施策等の検討を重ねた上で、今回は「さつまいもクリームパン」と「ガーリックトースト風ネギパン」の2つを商品化することとなった。試食会では、かんながらの製造担当の方と直接意見交換を行った。学生からは、「具のベーコンが大きくて食べにくいので小さく切った方がいい」や「中のクリームに芋の食感が残っていた方がよりさつまいもっぽさを感じると思う」等の意見が出さ

* 城西大学薬学部医療栄養学科助手

** 城西大学薬学部医療栄養学科教授

れた。商品名を決める際は、インパクトがあり、どのようなパンかを想像できるような商品名を考えることに焦点を絞った。話し合いの結果、「さつまいもクリームパン」は立案時のものをそのまま採用し、ガーリックトースト風ネギパンは、「まるでネギ！パン」に決まった。

高麗祭当日は予想を大きく上回り、用意した「さつまいもクリームパン」80個、「まるでネギ！パン」20個の計100個が午前中に売り切れた。学生はチラシを持って来場者に声をかけ、積極的に販売をしていた。

高麗祭の1日目に学内で開催された地域連携活動発表会にもエントリーし、多くの方にこの活動を知っていただく機会となった。高麗祭、地域連携活動発表会に参加した地域の方からは、「産学連携の商品開発ということで、アイデアだけでなく商品化するための様々な制約などリアルに感じることができ、学びになったかと思います」、「食材の組み合わせを考えたことが、今後の勉強で献立を考える際に役に立つと聞き、活動の成果がでていると感じました」などの感想をいただくことができた。本取組に参加した学生からは、「先生以外の大人と話すことがあまりなかったので最初は緊張したが、回を重ねるごとに緊張がとけ、意見が言えるようになっていい商品ができたと思う」、「自分が考えたものが実際に商品となって販売されることが嬉しい」、「高麗祭で販売したときに、美味しそう！やインパクトすごい！と興味を持ってくれた方がいたことが嬉しかった。こちらも美味しさをどんどん伝えたいな」といった感想があった。



図1. 打ち合わせの様子

本取組のパンは、クラウドファンディングのシステムを利用し、多くの人に購入のチャンスを広げることを実施し、医療栄養学科との産学金連携の広報にも貢献している。産学金連携（有限会社かながら×飯能信用金庫×医療栄養学科）のクラウドファンディングCAMPFIREを公開しています。「パン屋社長の夢を信用金庫が繋ぐ！埼玉の力が結集した最高の幸せパン誕生！！」<https://camp-fire.jp/projects/707616/preview?token=3rueg5v4&utm_campaign=cp_po_share_c_msg_mypage_projects_show>（2024年1月31日まで）



図2. 商品化されたパン

この取組は給食経営管理のアクティブラーニングとなり、埼玉県の食材を知り、発信することで地域活性化の一助となると考えられる。取組の過程で、学生の取り組む姿勢の変化や普段の授業で見せない一面が見られたことが印象に残っている。そのため、学生の成長の場として、この取組を今後も継続していきたい。

【地域活動ノート】

スピーチコンテストをなぜ行うのか

——地域との繋がりを目指して——

大橋稔*

活動の概要

第9回中国語スピーチコンテスト（2023年10月28日）と第12回英語スピーチコンテスト（同11月23日）を開催した。いずれのコンテストも応募者多数であったため事前審査を行い、中国語スピーチコンテストでは21名（朗読の部10名、スピーチの部11名）が、英語スピーチコンテストでは20名（高校の部14名、大学の部6名）が日頃の語学学習の成果を披露した。両コンテストとも全国から応募があるが、特に英語の高校の部には、継続して応募してくれている県内の高等学校が複数ある。また連続して応募してくれる個人や、出場後に視聴者として来場したり、教師になって生徒を連れて来てくれたりする元出場者もいる。

キーワード：語学教育、英語、中国語、スピーチ

語学教育センターでは、語学教育の一環として英語スピーチコンテストと中国語スピーチコンテストを毎年開催している。創立45周年の記念事業として準備された本コンテストは、本年度で英語スピーチコンテストは12回目、中国語は9回目の開催となった。語学教育の一環として計画されたスピーチコンテストであるが、特に英語スピーチコンテストは近年、地域貢献的な意義も有するようになってきているので、近年のコンテストを回想しつつ、語学教育センターが行う地域活動報告として本稿を作成する。

両スピーチコンテストは通常、当該年度の振り返りを踏まえつつ、年度末に翌年度の実施内容について立案することから準備が始まる。21年度は新型コロナウイルスの影響を受け、オンラインでコンテストを開催したが、22年度は感染症の影響としてではなく、オンラインでのスピーチが新しい時代のスピーチの一つの主要な形態になり、その技能を高めることは今後も必要になるとの考えから、オンラインでコンテストを実施することにした。

このようなコンテストの開催意義を広く理解してもらうことを目的に、21年度の審査員長であった小堀隆司教授（英語）と樊穎准教授（中国語）と所長である大橋の三人で座談会を行い、その様子を収録した動画を語学教育センターのホームページ上で公開した。そこでは対面で行うスピーチとオンラインで行うスピーチとでは、聞き手との距離感の違い、話し手の見え方の違いなどから留意すべき点が異なることを説明した。開催方法を決定した意図などを広く伝えることは、ある種の知の地域への還元だと言えるだろう。

そして23年度も引き続きオンラインでコンテストを継続することに決めた。コロナ禍の収束に伴い教育現場には対面での活動が戻ってきた。特に語学教育においてはオンラインを使用する機会、意識が激減したように思われる。しかし現実の社会では、オンラインを使用することの利点は残り、オンラインでのやり取りは継続されている。そのような状況の中、オンラインでのスピーチ技術の向上に意識を向け続ける必要があるとの考えからの決定であった。

語学教育センターのスピーチコンテストは、コンテストであるためその技能の優劣を判断することは避け

* 城西大学語学教育センター教授

られないが、それ以上に学習活動の一環であり、学習成果の確認の場であることを大切にしている。そのような場を（全国からの応募を受け付けているものの）県内の学生や高校生に提供できていることは、センターとしての地域活動であると考えても良いだろう。またこのような意識を今後も保ち、継続していく必要があると考えている。

英語スピーチコンテストは、近隣の高等学校に好意的に受け入れていただいているようで、コンテストに応募するための校内選考会を実施している高校もあると聞いている。第1回コンテストを計画したとき、どの程度の応募を得られるのか不安で、若林俊英副所長（当時）と二人で近隣の高校を訪問し、参加をお願いするとともに、本コンテストの存在を英語カリキュラムの一環に取り入れてほしいと依頼したことが懐かしい思い出である。

また中国語スピーチコンテストは、第二外国語であるため参加は大学生に限られているが、早い段階よりNPO埼玉県日本中国友好協会の協力を得ながら開催している。一方で、本学学生も協会が主催する催しに参加するなど、中国語を学ぶ学生と友好活動を推進する県内の人々を繋ぐ場としての役割を果たしている。コンテストに挑戦した本学学生の中には、卒業後も協会の催しなどに積極的に参加し、中国語のみならず中国への理解をさらに深め続けている方もいる。

本コンテストでは、参加者の交流にも力を入れている。発表者だけではなく視聴者も発表者にコメントを伝えることができる制度を整えたり、結果発表までの時間で互いの感想を述べあうなどの機会を確保したりしている。オンライン開催では、懇親会を行うことができなくなってしまったが、これらの取り組みは継続している。特にこの時間では、高校の先生方に生徒への「褒め」言葉を述べるよう促している。褒められることがさらなる学びの意欲に繋がるからだ。

またこのような場では、思うように力を発揮できなかったように思われる出場者に積極的に声がけをすることを、運営側として特に心掛けている。次の学びの意欲が途絶えないようにしたいと考えるからだ。すべてがダメだった発表者など居るわけもなく、必ず評価できるべき点がある。そのことを具体的に指摘することで、笑顔を見せてくれることも多い。登壇者一人ひとりの当日までの努力を、最大限に讃えることができるコンテストでありたいと考えている。

これらの取り組みについては、地元の高校の先生方から概ね好評をいただいている。「教育的配慮の行き届いたコンテストで、また生徒を出場させたい」などのお言葉をいただくことがある。また県内の他の大学がスピーチコンテストを企画したさい、「城西のようなコンテストを目指したら良い」と本コンテストの後援団体より助言があったとして相談を受けたこともある。これらは本コンテストをめぐるセンターの活動や姿勢が、地域に評価された結果だと思いたい。

本質的な意味においてスピーチコンテストの開催は、地域活動とは呼べないのかもしれない。しかし既述した通り、センターの取り組みは埼玉の関係者からの信頼によって成り立ち、関係者の活動にも何らかの影響を与えるものとして継続している。この点において、スピーチコンテストをめぐるセンターの活動を、地域への貢献活動だと呼んでも良いだろうと思う。これからも地域との繋がりを大切にしながら、スピーチコンテストという教育活動、地域活動を継続していきたい。

『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』投稿規定

1. 目的

『地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要 (Journal of Josai Community Liaison Center)』(以下「紀要」)は、城西大学・城西短期大学地域連携センター(以下「地域連携センター」)ないしは本学の地域活動・地域研究により蓄積された成果を掲載し刊行することにより、地域連携および地域を舞台とした教育・地域を対象とした研究を促進することを目的とする。

2. 発行

- (1) 紀要は年1回発行する。
- (2) 紀要の編集は、地域連携センター内に設置する紀要編集委員会(以下「編集委員会」)が取り扱う。
- (3) 編集委員会は、編集長1名と編集委員1名以上、および担当事務員1名以上から構成される。
- (4) 編集長および発行責任者は、地域連携センター所長または副所長とする。
- (5) 編集委員は、地域連携センター運営委員の中から選任する。

3. 投稿・掲載区分

- (1) 紀要に投稿・掲載する原稿は、ひろく地域に関するテーマで執筆された未刊行のものであり、以下の①～⑤の区分のものとする。
 - ①論文
 - ②地域調査報告
 - ③地域教育実践報告
 - ④地域活動ノート(1件につきA4サイズ横書き日本語で2頁以内)
 - ⑤その他(地域連携報告、地域情報、地域資料、講演録、書評など)
- (2) 執筆者は、投稿時に希望の区分を提示する。
- (3) 使用言語は、区分④以外は特に定めない。
- (4) 字数または枚数制限および横書き・縦書きは、区分④以外は特に定めない。

4. 執筆資格

- (1) 城西大学・城西短期大学の教職員・事務職員：専任・非常勤を問わず、上記区分の全てを執筆・投稿することができる。
- (2) 城西大学・城西短期大学名誉教授および定年退職者：上記区分の全てを執筆・投稿することができる。
- (3) 城西大学・城西大学大学院・城西短期大学の在学生：上記区分④を執筆・投稿することができる。なお、城西大学大学院博士後期課程在学者は、上記区分③以外の全てを執筆・投稿することができる。

※その他、卒業生や学外者等であっても、上記の資格者との共著であれば当該区分を執筆・投稿することができる。また、編集委員会が特に認めた者は、単著で執筆・投稿することができる。

5. 執筆要領

- (1) 使用言語および分量は、投稿区分④以外は特に定めない。
- (2) 文章は原則として黒字だが、特に必要な場合は図・表・写真などにカラーを使うこともできる。
- (3) 申込後、掲載可となった場合は、別に定める区分ごとの「執筆要領・フォーマット」に基づいて掲載用原稿を執筆する。
- (4) 原稿に記載できる共著者の範囲は、「城西大学・城西短期大学研究倫理規定」第15条（オーサーシップ）の定めるところによる（https://www.josai.ac.jp/media/7-4-1_kenkyu_rinnri_kitei.pdf）。

6. 執筆・掲載の採否

執筆および掲載の採否については、編集委員会が決定する。

7. 発行形態および公開

- (1) 紀要は、電子ファイル（オンライン版）および冊子にて発行する。
- (2) 電子ファイルは、地域連携センターホームページおよび城西大学機関リポジトリ（JURA）からインターネット上に公開する。

8. 著作権

- (1) 掲載された著作物の著作権は、著作者が保持する。
- (2) 掲載された著作物の著作者は、当該著作物に関する複製および公衆送信を編集委員会に対して許諾したものとみなす。編集委員会が複製及び公衆送信を第3者に委託した場合も同様とする。

9. 投稿料・原稿料等

- (1) 投稿者から投稿料は徴収しない。
- (2) 執筆者に対して、原稿料は支払わない。
- (3) 執筆者には掲載冊子を1部進呈する。

2023年7月
城西大学・城西短期大学地域連携センター 紀要編集委員会

城西大学・城西短期大学における地域活動の情報公開

城西大学・城西短期大学の地域活動は、下記URLもしくは
二次元バーコードよりご覧いただけます。

<https://www.josai.ac.jp/lifelong/cooperation/katudouhoukoku/>



編集後記

「地域と大学—城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要—」も第4号の発刊となりました。ここまでお読みいただいたご感想はいかがでしょう。

本紀要は、本学における地域活動・教育研究により蓄積された成果を広く発信し、地域連携および地域を舞台とした教育や地域を対象とした研究を促進することを刊行の目的としています。

本学は2024年に開学60年目に入りますが、開学当初からこのけやき台の地で、地域との連携を深めながら発展して参りました。より多くの方々に本学のことを知っていただき、本学を活用していただけるように、現在本学で取り組んでいる地域連携活動や地域をテーマにした教育について本紀要にて発信しております。

本紀要で紹介される各種取組や活動、さらにそれぞれに参加した学生・教職員・地域住民の方々の学びを介した繋がり・結びつきが、地域と大学にとって大きな力となっていると感じております。本紀要のタイトルでもある「地域と大学」の繋がり・連携が巡り巡って大きな力に育ち、地域の方々のために、そしてこの地域へ通ってくる学生さんにとっての安心・安全にもつながるのだらうと思います。

本紀要に、より多くの方々に興味を持っていただき、そして気軽に参加していただきたいと考えておりますので、編集後記をお読みくださっている“あなた”からの投稿を心よりお待ちしております。

2024年3月 地域連携センター所長 高尾浩一

城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要第4号編集委員会

編集長 庭田文近（地域連携センター副所長・現代政策学部教授）

高尾浩一（地域連携センター所長・薬学部教授）

奈良博恵（地域連携センター事務長）

渡辺沙織・植木さやか（地域連携センター事務員）

地域と大学——城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要 第4号

令和6年3月31日 発行

編集者 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要編集委員会
発行者 城西大学・城西短期大学地域連携センター
印刷者 有限会社 東京工芸社
発行所 城西大学
埼玉県坂戸市けやき台1-1
TEL 049-286-2233 (代)
〒350-0295

Printed in Japan ISSN 2436-2336(Print) 2436-2530(Online)
©2024 城西大学